

烽火

共産主義者同盟
関西政治理論誌

No.7

日本労働者階級に対する共産主義者同盟の任務
共産主義者同盟関西地方委員会

- ◎ 我々の緊急の任務＝世界党建設に向けて
—現代世界革命序論— 一向 健
- ◎ 革命党建設の諸任務 佐伯 武
- I. 自衛隊
—自衛隊の現況— (1) 葛木 曾津彦
-

1968. 1. 31

共産主義者同盟
関西地方委員会 編集発行

日本の労働者階級に対する共産主義者同盟の任務について

共産主義者同盟関西地方委員会

論 争 (その1)

我が共産主義者同盟には、まだ明確な綱領はなく、これは今後早急に確立しなければならないものである。だから当面、我々が、我が同盟の任務について明らかにする場合、同盟の六回大会の諸決定にもとずいて、これをゆたかなものにするといったかたちで進められねばならない。

我が同盟の規約の第一章「同盟の目的と任務」は、三条から構成されており、不十分なものであるが、これは、同じ六回大会で決定された、他の五つの決定案によっておぎなわなければならない。

規約の第一章第一条は、「世界共産主義社会の実現を終局目的とする。」こと、第二条は「日本におけるブルジョア支配の打倒、プロレタリア独裁の樹立を当面の任務とする。」ことが、そして、第三条では、「公認の『共産主義』指導部及びあらゆる類の社会民主主義指導部から自らを明確に区別し、それらとの非妥協的闘争」を押し進めることが述べられている。

ところで、この第一条―第三条のそれぞれの内容、及びそれらの相互関係について、ここ一年間いろいろの論争が行なわれてきた。

この論争の第一は、「『帝国主義打倒プロレタリア世界革命』をいかに実現するか」ということが、次のようなおぼろげな論争となつてあらわれてきているという点である。即ち、帝国主義列強の相互関係、及びこれと植民地及び被抑圧民族諸国、「社会主義」諸国

との相互関係の中で、革命が、或る特定の（特に日本を含めた）「弱い環」からはじまり、「帝国主義（列強）打倒プロレタリア世界革命」といつたかたちで考えるのか、それとも、むしろ、列強の同時的な打倒が主要な内容を構成するのかという問題として論争されて来ているのである。この場合、後者の立場から見れば、「世界革命」は、終局の任務とし、「弱い環」である日本帝国主義打倒を終局の目的、任務に至る当面の任務とするということは、革命の世界性、ひいてはプロレタリア国際主義を後方において危険性が生まれる、という心配が出て来ているのである。

だから、ここから、規約第一章第一条の「終局目的」及び、第二条の「当面の任務」は現代の世界革命との関係において、固定した一つの型として理解するべきではなく、かかる表現は検討されなければならぬのではないかという意見が出て来ている。又、このことは、六回大会の基調を形成している「反帝斗争を日本革命へ！」について、戦後の世界体制の動揺と世界階級斗争の激化の一環として、日本帝国主義の戦後体制もまた、動揺と流動化を開始し、日本階級斗争は新たな段階にはいつた」として、一方では世界の階級斗争と日本の階級斗争の同時的、同質的性格についての考えがありながらも、むしろ全体的な基調としては、「日本革命をアジア革命の勝利と、世界革命の突破口とせよ！」といったような、日本革命、アジア革命、世界革命の地理的、時間的な又は、資本主義世界の相互関係からみちびき出される階級斗争の構造的型として受けと

られる傾向があるのである。

現在の我々の組織的状况が日本に制限されており、又、共産主義インターが結成されていないという主体的条件にもとづく留保によるものである場合には、このような日本、アジア、世界の相互関係に対する接近のしかたもありうるとしても、資本主義世界の相互関係と、階級斗争の構造的要因からみちびき出された現代革命の型として、これが固定化されることは極めて危険であるといわねばならない。むしろ一般的には、日本のプロレタリアートは万國の労働者階級の世界軍の一部隊にすぎないものとして理解することが正当である。又、現代世界と階級斗争の型をみちびき出すには、帝国主義列強、「社会主義」諸國、植民地、被抑圧民族の關係を深く分析する必要があるのである。

現在の我が同盟が、おかれてい地理的、社会的、政治的条件からして、我々が日本の帝国主義打倒のための斗争に、その主力を注がねばならないことは当然であり、ここからはなれて、空想をめぐらすことによつては、現実を一步たりとも変革することは出来ない。然し、我が同盟は、決して民族共産党に転落してはならないし、共産主義インターの結成、及び、すべての労働者政党と共産主義を区別するところの、「国籍に左右されない利益」のための斗争を、すなわち、プロレタリア國際主義の原則にみちびかれた闘いを、我々の任務とすべきである。

論争(その2)

論争の才二の点は、規約第二章才二条における「日本におけるブルジョア支配の打倒、プロレタリア独裁の樹立」ということを、も

ローガン」を挙げた闘いが党は、「帝国主義打倒、プロレタリア革命の要求を直接に表現する」必要があるし、又、しなければならぬのである。

同盟の党活動、党の独自活動を守り、拡大し、系統性をあたえなければならぬのである。

このことは、けつして、「改良斗争をとおして改良斗争の限界を、大衆的にバックロし、改良斗争を大衆的にのりこえさせること」と矛盾するものではない。然し、党は、けつして、「改良斗争をとおして改良斗争の限界を、大衆的にバックロ」するところの「党派戦術」を絶対化し、党は過程の意識であるとか、戦術としての党といつたように、党活動を制限することは決定的に誤りであると言わねばならないのである。

党の意識性の最高の表現は、綱領であり、綱領の必要性を拒否してはならない。だから、以上のような論争は、我々の綱領にむけての努力をつづけなければならないだろう。

論争(その3)

三つ目の論争と言うのは、我が同盟が「公認の『共産主義』指導部及びあらゆる類の社会民主主義指導部から自らを明確に区別し、それらとの非妥協的斗争をとおして新たな革命的労働者党の結成を目指す」と言う場合、「公認の『共産主義』指導部」や「社会民主主義指導部」に対する党派斗争は、まず何よりも、これらの「日本共産党、社会党、民社党、公明党をはじめとする——諸党に対する権力、革命理論における決定的な批判を行なわなければならないのであり、マルクス・レーニン主義に対する日和見主義や、修正主

つと具体的に明らかにすべきであるという意見である。すなわち、「暴力革命」を我が同盟の旗印として明確に挙げるべきであるということである。すなわち、「反帝斗争を日本革命へ」の4のcに述べられているところの「(c) 一切のブルジョア國家機關、武装組織の即時かつ無条件の解体、全人民大衆の武装、プロレタリア赤衛軍の組織」を、我が同盟の目的と任務として確定する必要があるということであり、この点からの党としての宣伝、扇動、教育と、この目的と任務を解決するための党の活動を目的意識的に準備し、計画する必要があるのである。

このことは、國會の議論でも、又、ジャーナリズムや世論においても、公然と軍隊の強化についての論議がはじまり出しているというところ、ここから、いわゆる「反帝」ということでは十分に、権力の問題に対する我々の主張を明らかにし、プロレタリアートを導くことが出来ないということである。才二には、五〇年代に議會が持つていた一定の進歩性があり、反動的役割を急速に強めはじめた昨今において、「議會制度の廃棄」にもとづく、議會制度批判を我々が公然とはじめなければならぬということから、我が同盟の党的活動の強化とその独自の主張にもとづいた、独自活動が決定的な重要性をまして来ていることからも明らかである。日本の労働者階級に対する共産主義者同盟の任務、党としての独自活動における任務がこうした、いわば、綱領的立場にみちびかれて系統的に計画されてゆかねばならぬということである。

権力に反対するだけとか、議會における反動政策や立法に反対するだけでは不十分である。たしかに大衆斗争は、「防衛と抵抗の意義に対する批判を行なわなければならないのであつて、この任務を、諸政策反対斗争や、個々の経済斗争や、又それにまつわる戦術やスローガンをめぐる対立にのみ制限してはならないのである。だから、ここから、我が同盟の党派斗争の中心は、日本におけるマルクス・レーニン主義の名のもとにこれを修正し、日和見主義と結合している日本共産党に対して、又、これらとつながる國際的な思想的、政治的潮流と組織に対する闘いとして行なわなければならないのである。

この一年、同盟の党派斗争は、一方では、社会党や総評に対する。又、他方では、中核や解放等に対する党派斗争に制限されて来たような感がある。

ここから、全国的な党的政策を打ち立てることが希はくになる傾向が生まれ、又、我が同盟内部における論争が、政策反対斗争や、経済斗争や、戦術をめぐる論争にせよめられる傾向が強かつたのではないかということである。

「社民指導部、日共に対する断固たる反対派の立場を堅持し、彼等の政治方針、彼等のブルジョア民主主義的ブルジョア平和主義的イデオロギーとの一切の連帯を拒否すること」だけでは不十分であり、我々の立場を積極的に明らかにしなければならないのである。又、「大衆斗争を既成指導部を下から左翼的に突き上げ」るだけではないのであつて、これだけでは、既成指導部の左のボウ波でいにかすぎなくなり、水沢同志が言うように、丁度、ローザルクセンブルクの誤りと同じく「プロレタリアート自身の革命性」に戦術的過程としてしか、かわりあうことが出来ないと言ふことにな

るところで、このことこそ、六〇年安保 Bunday、かつての関西

Bund が、大衆運動主義的傾向に傾斜していった原因でもあつたろう。「下から左翼的に突き上げ」ることや、又、党派戦術は極めて重要である。然し戦術的次元における党派性は、さらに高い戦略や、綱領次元における党派性にみちびかれて、はじめて一貫性と系統性を持つことが出来るだろう。

論争 (その4)

現在「一方で『戦斗組織』の克服と、他方『戦斗組織』の強化と同時に解決してゆく政治的任務を」我々は同盟が背負わされていくということについていくどか見て来た。

一方で、党の独自活動を強化しなければならず、他方、日本の階級斗争を強化するために『戦斗組織』を強化しなければならないという二つの任務を、我々はこのように解決すればよいのかということとが問われている。

この問題に当面して、最近我が同盟のなかで、特に学生同盟員のあいだで、「同盟の公然活動」又は「公然化」とか、あるいは、丁度一九一三年のロシアのように、『公然の党のための斗争』ということが、さかんにもはやされはじめていることに注意しなければならない。このような考えは、最近の論争とどのように関係しているのか、又このことはどういう意味を含んでいるのかということとを明らかにしておかねばならないだろう。「公然の党のための斗争」というのは、現在の場合、「党の独自活動の強化」ということを、『戦斗組織』の強化」と等置しているところから生まれている考えである。わかりやすく言えば、「党の独自活動の強化」ということと『戦斗組織』の強化」ということを同じものである。あるいは

活動の強化」とを等置して考えるということは、どういうことを意味しているかといえば、それは、「党の独自活動の強化」という任務を解体し、党を『戦斗組織』に解体することを意味しているのである。

このことは、党を大衆組織に解体するか、さもなければ、党の基本活動をグループ活動に解体するか、又は、グループ活動を党の基本活動に優先させる考えを結果するものである。現在意識されているかいないかは別として、我々が旧 Bund の総括、及び「政治過程論」の総括の中から、克服して来つつある「過程としての党」とか、「戦術としての党」とか、「過程の意識」といつたことが、新しいよそおいをこらして再びあらわれて来つつあるという点に注意しなければならないのである。

この点を留意し、全同盟員が、党の基本路線に従い、その一貫として、諸斗争における組織戦術を考えることが出来るようになるよう努力すべきである。

(注) ① レーニン「何をなすべきか」

② レーニン「論争問題」(一九一三年)

③ 「烽火」第五「社会主義の当面する焦眉の問題」を参照せよ!

論争 (その5)

では、我が同盟は、一方における「党の独自活動の強化」の問題と、他方に於ける「戦斗組織」の強化」の問題をどのようなかたちで押し進めようとしているのか?

同盟は、一方において、宣伝活動の強化を急いでいる。(この内

は同じ内容だと考えているところから生まれているということである。このような考えは、この両者が、我が同盟と日本の階級斗争にとつて要請されているものであるにもかかわらず、この両者の意味内容が、質的に異なるものであるということと理解出来ないというところから生まれているのである。というのは、「党の独自活動の強化」ということの内容が、論争(その一)から(その三)まで見て来たように、より高い政治的質を要求しているということであり、「戦斗組織」の強化」ということは文字どおりそうした「戦斗組織の強化」の事を意味しているのであつて、本来「戦斗組織」という場合、それは、「軍事組織」の強化ということの意味しているのであつて、現在の場合、そこまで洗練されたものとしてではなく、一日のうちの数時間、又は、一ヶ月のうちの数日間を、街頭斗争において「準軍事」的行為と、「準軍事」的組織のために献げる程度のものである。

現在の社会的状況のもとで、純粹の「軍事組織」をつくりあげ、これにもとづく「戦斗」をつくりあげるといふことは、極めて困難であり、ありうるとすれば、「都市ゲリラ」的なものが、理論上では考えられる程度であり、現在の「戦斗組織」というのは、大衆斗争と、あわい「都市ゲリラ」的なものが重なりあつた過渡的な組織状況、あるいは行為を形成しているということであつて、これは、権力との関係において、ギリギリいづばいの死線上で行なわれている斗争形態であるということとを理解する必要があるのであつて、我々は、このような斗争形態を、党の他の領域における活動との関係においてとりあつかつているのであつて、決して、これを自己目的化しているわけではないことをはつきりと自覚しておく必要がある。ところで、このような、「戦斗組織」の強化」と、「党の独自

容についてはここではふれない。)そして、同盟の組織を、地区委員会の強化を押し進め、党の基本組織の強化を最も重要な任務の一つとしている。機関の強化、宣伝の強化、基本組織の強化をとおして、我が同盟が、学連グループから誕生して来た歴史的条件によつて規制されていた弱点を克服しつつある、以上のことを基本として踏まえて、この上に立つて、①産別委員会の結成、(労対活動の強化)、②反戦グループの結成(統一戦線活動の強化)、③全学連グループの強化(学対活動の強化)の三つの組織強化をいそいでいるのである。

我々は、宣伝活動、党機関活動、地区委員会、経営及び住区細胞の強化をとおして、「党の独自活動の強化」をはかつてゆかねばならない。又、各グループ及び委員会活動の強化をとおして、色々の種類の、多角的な「戦斗組織」「行動組織」「執行組織」を強化してゆくことが出来る。

「戦斗組織」の強化」に「党の独自活動の強化」を解体させてはならない。この両者の関係は決して矛盾するものではなく、この両者が強化されねばならないのである。

党が、党としての聖職を守り、その独自の活動を強化すればするほど、労働者階級は、自らの闘いのための「戦斗組織」の強化」を、自らの任務とするようになるだろう。

「労働者階級の解放は、労働者自身の事業でなければならぬ。」ことを、ますますはつきりと理解するようになるだろう。そして、「労働者や大衆の中位の人々は、ストライキや警官と軍隊相手の街頭斗争で、巨大な精力と自己犠牲心を発揮する能力をもっており、われわれの全運動の帰結を決定する能力をもっている。」のである。

わが同盟の任務（その一）

① 我が同盟の政治的任務について

④ 我が同盟は、帝国主義列強を打倒し、世界革命をおして、世界共産主義社会を実現するために、全世界の労働者の国籍に左右されない利益、全労働者階級の利益のために闘わなければならない。この目的と任務を押し進めるために、スターニスト達が、帝国主義列強との妥協と取引のために解体した共産主義インターを、プロレタリア国際主義のために復活させねばならない。そして、この新しくつくられた共産主義インターは、世界単一の党として、全世界の共産主義者と労働者階級を指導しなければならない。

特に、国際的な労働者の団結の組織として労働組合を結合し、共通の目的と任務にむけて闘わせねばならないと同時に、増々重要になつていく帝国主義と戦争に対する闘いを、国際的に押し進める組織をつくりあげなければならない。

⑤ 日本の労働者階級は、万国の労働者階級の世界軍の一部隊にすぎないことをつきりと自覚し、世界の労働者階級の目的と任務に従い、このための闘いを、日本において遂行しなければならない。日本の労働者階級は、特に、自己の直接的な支配者である、ブルジョアとその政権を打倒し、プロレタリア独裁を樹立しなければならない。

(I) この目的と任務のために、日本の労働者階級は、日本帝国主義打倒、プロレタリア独裁の樹立が、暴力革命をぬきには不可能であることを理解し、一切のブルジョア国家機関、武装組織（軍隊、警察、公安）の即時かつ無条件の解体、全人民の武装をめざして、

2. 国家権力（自衛隊・警察・公安）の増強と活発化に対する闘い。

- (1) 自衛隊の省昇格粉碎
- (2) 自衛隊の核武装化粉碎
- (3) 「才三防衛計画」反対
- (4) 徴兵制復活、自衛隊の海外派兵阻止
- (5) 三矢計画、非常事態立法等粉碎
- (6) 破防法・都条例・公安条例・新暴力法等の弾圧と統制立法の廃棄
- (7) 政治警察・警備公安・内閣調査庁等のスパイ活動の粉碎
- (8) 道交法をはじめとする諸立法の拡大解釈、拡大執行の阻止

3. 国会・地方議会及び議員・官僚に対する闘い。

- (1) 憲法改悪阻止
 - (2) 小選挙区粉碎
 - (3) 議員・高級官僚の報酬及び給与を一般労働者なみにせよ
 - (4) 独占資本の政治献金の禁止
 - (5) 買収・汚職・利権及び地位の利用の禁止とリコール
 - (6) 議員・官僚に対するリコール権の現実的獲得
 - (7) 公務員の組合、政治活動の自由の獲得
 - (8) 全人民による議員、官僚の監視
- ③ 当面する、社会的、経済的任務
1. 教育、文化、科学の帝国主義国家及び独占からの自由の獲得

忍耐不拔の活動を行わなければならない。

(II) 又、このことは、議会制度の廃棄と、私有財産制度の廃棄と密接不可分のものであることを理解し、このための、宣伝、扇動、組織活動を強めなければならない。

⑥ 以上の基本的な政治的任務を押し進めるために、我が同盟は、修正主義、民族主義、議会主義、日和見主義との系統的な闘いを組織し、マルクス・レーニン主義の原則を守り発展させるために、理論斗争、宣伝、扇動、教育を強化しなければならない。

② 当面する政治的任務について

日本帝国主義打倒と政治的自由の獲得！

1. 軍事外交路線を歩む、侵略と抑圧の佐藤自民党政権を打倒する闘い

- (1) ベトナム問題 — アメリカのベトナム侵略戦争に反対し、佐藤内閣の侵略の目的を粉碎するために
- (2) 東南アジアをはじめとする佐藤内閣の侵略と抑圧と、これら諸国における軍事カライ政権支援に対する闘い
- (3) ベトナム侵略の基地、沖縄の米軍政打倒、軍事基地撤廃
- (4) 本土における、砂川、新島、成田、佐世保等々の軍事基地撤廃のための闘い
- (5) 軍事物資の生産、輸送阻止のための闘い
- (6) 安保条約破棄、七〇年安保粉碎
- (7) 言論、出版、結社、亡命の自由のための闘い
- (8) 労働者階級の団結権、争議権の獲得

のための闘い。

- (1) 大官法阻止
- (2) 教免法改悪反対
- (3) 後期中等教育、学校教育法改悪阻止
- (4) 学習指導要項改悪阻止
- (5) 授業料値上げ阻止
- (6) 教育及び研究環境の改善
- (7) 産学協同反対！
- (8) テレビ、ラジオ、新聞、雑誌紙に対する統制粉碎
- (9) 教育、文化、科学に対する一切の行政的、思想的統制の粉碎

2. 重物価、重税、住宅難、交通災害公害に対する闘い。

- (1) 再販価格維持協約をはじめとする独占価格に対する闘い。
- (2) ①、電報電話料金、②、国鉄一般運賃・定期割引、③、市電・市バス・トロリー、④、私鉄・私バス料金
- ⑤、水道・電気・ガス、⑥、新聞、⑦、米、⑧、酒、タバコ等公共料金の値上げ阻止
- (3) 所得税、住居税、間接税、入場税、消費税、揮発油税、印紙税等々の値上阻止、大衆課税の大幅引下げ
- (4) 信用膨脹（インフレ）政策阻止
- (5) 低家賃住宅の獲得、家賃値上げ阻止
- (6) 医療保険制度改悪、保険料値上げ阻止
- (7) 失業保険制度の改悪阻止
- (8) 交通事故、災害、工場汚水、空気汚せん等、公害等の労働保安、労働条件の悪化、過重労働のときはつと改革

④ 労働者階級の経済的任務

- (1) 大幅賃上げと、全国一律最賃制の確立
 - (2) 合理化阻止
 - (3) 配転、首切り、賃下げ粉砕
 - (4) 週五日制、週四〇時間労働の確立
 - (5) 労働の強度、密度における過重労働の廃止
 - (6) 幼児労働の保護
 - (7) 婦人労働における、生理休暇、出産休暇、育児時間の有給実施、乳児保育、学童保育施設の獲得
- 以上を、我が同盟の大まかな任務とすべきである。

わが同盟の任務（その2）

我が同盟は、党の基本組織における統一した任務（これは、まだ大まかなものであるが）を押し進めると同時に、次の主要な三つのグループにおける活動を行なわなければならない。

- ① 労対グループを中心とする産別委員会
- ② 統一戦線部のグループを中心とした反戦グループ
- ③ 学対グループを中心とした全学連グループ

これらを我々が押し進めるにあたって、特に日本の資本主義の構造と労働者階級の状況からして、我が同盟は、同盟の組織活動を、①東京（なかでも中央区を中心とする公労協、京ひんを中心とする民間大手） ②関西（大阪北区と兵庫尼ヶ崎） ③名古屋、④北九州の四大都市において系統的に、計画的に押し進める必要がある。

我々の緊急の任務 世界党建設に向けて

一向 健

目次

序章 スローガン・党の型

一章 世界（世界階級斗争）

一節 過渡期世界と世界階級斗争

(一) 経済過程に於ける帝国主義の主軸性

(二) 世界はブル・プロの二大階級の非和解的斗争の場である。

それ以外の第三世界と第三世界観はない。

(三) 攻撃型世界階級斗争、攻撃型世界革命

(1) 過渡期世界と受動から攻撃型への変化問題の設定

(2) プロレタリアートの世界革命の根拠地の登場、ブルの自己矛盾した主観的帝国主義政治の追求とその必然的破産

(3) 労働者国家と現代修正主義

(4) 危機の引き延しと人類史未曾生の破局 全世界永続戦

争と現代プロレタリア世界革命

二節 ロシア革命以降の帝国主義（現代帝国主義）

(1) 結論 帝国主義

(2) レーニン帝国主義の根本的全面的正しさとその論議点

及び付加すべきこと。

(イ) (ロ)

① 産別委員会は、国鉄、全通、電通、教組、自治労、鉄、機械、化学、金属、繊維に集中した活動を行う必要がある。産別委員会は独自の機関誌を発行し、活動に系統性と全国性をあたえなければいけない。

② 反戦グループは、基本的には地域、地区、住区ごとに組織されるが、これは、全国中央グループの統一した指導のもとに組織されねばならない。党の基本組織とこの反戦グループとは明らかにことなるものであるから、党の各級機関は、党人事において、反戦担当をはつきりと決定しなければならない。

③ 学対グループは、本来的には、その内に更に、寮グループ、学館グループ、ゼミナールをはじめとする諸機能にもとづいてグループを構成するわけであるが、当面は、自治会グループを中心として押し進めなければならない。本来学対グループは、学校細胞と同じものではなく、学校細胞の一つの活動領域を構成するものであるが、現在では、この学校における細胞は、この自治会グループ活動に解体されているのが現状である。学生同盟員は、このことを理解し、すみやかに学校細胞を建設し、各都道府県委員会、地区委員会の指導のもとに党の基本組織をつくりあげなければならない。

以上の任務に従い、わが同盟を強化し、階級斗争の発展のために全同盟員は活動しなければならない。

(3) 基本「新」現象と現代資本主義論争

(イ) 基本「新」現象

(ロ) 現代資本主義論争

二章 プロレタリア社会と帝国主義国家

一節 生産過程、市民社会・国家

二節 諸階級の政治への参加 支配の論理 具体的政治過程

三節 帝国主義国家とプロレタリア世界革命

四節 国家死滅の経済的基礎 独暴力革命の修正主義と現代無政府主義

三章 我々の世界革命戦略、及び世界党建設

一節 世界階級斗争の有機的全体性とその鎖の一環としての独自性

二節 序章の(1) (4)のスローガンの説明

(a) (b) (c) (d)

三節 世界プロレタリア党

四節 レーニン死後の国際共産主義運動

- (一) 第一の世界革命の波とそれ以降「レーニン」ローザ・ト
ッキー・スターリン
 - (二) 第二の世界革命の波とその挫折
 - (三) 第二の波、その全体性・世界革命戦略
 - (四) 独仏革命の挫折とスターリン主義の現代修正主義への転
落
 - (五) ファシズム・人民戦線・現代修正主義の帝国主義との和
解
 - (六) 毛沢東主義とその岐路
 - (七) 米革命の挫折とニューディール
 - (八) 日本革命の挫折、国際主義と世界革命戦略の存在
 - (九) 第三の革命の波の挫折とその結果と展望
- 四章 党の型と実践論
- 一節 共産主義者及びその組織の登場
 - (一) 実践の合目的性と「人間」認識（唯物弁証法）
 - (二) ブルジョア社会の疎外と対象化、目的意識性の獲得
 - (三) 共産主義者の戦略「戦術的結集とその組織の獲得」武装
された前衛への転化
 - 二節 戦術的戦術の党、その党の分離と結合
 - (一) 労働者階級の自然発生性と共産主義者の目的意識性の分
離、結合について
 - (二) 自然発生性目的意識性の萌芽
 - (三) レーニンとメンシェヴィキ・トロ・ローザ、山川「福
本論争
 - (四) 自然発生性、市民社会と国家、権力・上部構造の階級
性とブルイデオロギー

- (一) 党の階級斗争に果す役割り、その戦略「戦術的実践と労
働者人民からの分離と結合
- (二) 党の具体的実践活動
- (三) 権力斗争、理論斗争、党組織斗争、党純化斗争
- (四) 権力斗争
- (一) 革命的敗北主義
- (二) 全人民的政治斗争、個別斗争、最大限綱領と全人
民的政治バク
- (三) 政党間統一戦線と党派解体戦術
- (四) 直接の政党活動の必要性目的政党運動、大衆組織の
中での前衛のとるべき態度
- (一) 全国政治新聞
- (二) 各部署、各級機関
- (三) 現代革命と組織論
- (一) 現代革命と組織論の諸前提
- (二) 現代帝国主義市民社会と我々の組織論
- (一) 合法的大衆の前衛党とその影
- (二) 現代帝国主義市民社会と階級斗争の型、自然発生性
目的意識的階級斗争の推進と我々の組織の型
- (三) 世界単一党の実現へ

序章 スローガン。党の型

我が同盟のプロレタリア世界革命実現の階級斗争「党形成に於ける諸戦術駆使の实践的基準は次の「戦略」「戦術」と「党の型」の二つである。

その一は

- ① 帝国主義と排外主義と現代修正主義に抗し、一切の階級斗争を攻撃的階級斗争として組織し、民族解放「社会主義」労働者国家への一切の反革命反対、世界革命をめざす革命的プロレタリア独裁実現「帝国主義政府の侵略、抑圧、反革命粉砕」に集結せよ
- ② 国際的侵略、反革命反対斗争に一切の階級斗争（特に反合斗争）を国際的に結びつけ内乱へ「プロレタリア世界革命を同時に実現せよ」
- ③ 農民、小ブルをプロレタリアートの反帝同盟軍として結集せよ
- ④ 全人民の武装「全ゆる斗争を武装斗争を主要な戦術形態として展開せよ」日本革命戦略戦術も以上の③つであるが②の「侵略、反革命」は日本革命に至るまで、反戦斗争として斗われ、特殊に重要である。その二つは、(一)の戦術の確認の上で、世界日本 支那として、職業軍人による、上からの中央集権的型をもつ、ホルンエツキ・レーニン党の「党の型」の実現にある。

かかる二つの結論はM・L主義に従った以下

- (I) 世界階級斗争（過渡期世界と歪められ労働者国家群と帝国主義世界）
- (II) ブルジョア社会と帝国主義国家
- (III) 戦略「戦術」による階級形成と党形成

- (四) 世界革命戦略と世界単一党
 - (五) プロレタリア党の型
- の五つの認識と意識に支えられて提出されるものである。

第一章 世界（世界階級斗争）

第一節 過渡期世界と世界階級斗争

- (一) 帝国主義の延命とその超巨大金融独占資本主義への発展及びその一層の腐敗、寄生性の増大
- (二) 植民地半植民地国家の植民地経済の極度のヒ滞と永続的危機
- (三) 労働者国家の社会主義生産の限界と帝国主義からの制約、これは根本的には社会主義原始蓄積の脆弱性と主体的には非資本主義圏の総合的分業の立ち遅れ、各国的分断に根拠をおくかつ経済の限界はプロレタリア世界革命政治においてのみ解決される。
- (四) この点は労働者国家「社会主義」共産主義と経済の発展が階級斗争の発展を消滅させるといふテーゼ・階級斗争をぬきに支配関係を労働者国家に適用することに対する批判
- (五) の三つから成立している。

だがこの三つの経済的プロククは個々バラバラに存在するのでなく、(一)は(二)に直接に規定され(三)はそれ自体の独自性を持ちながら、帝国主義に制約され、世界階級斗争を通じて帝国主義に根本的に規定されている。

帝国主義は、それ自体の運動法則を、発展させるが、労働者国家の原始蓄積の脆弱性は一國経済とまいて発展の限界をもち、その矛盾は政治的に経済は政治に優先され、解決されねばならぬ。

従って世界の下部構造は帝国主義の運動法則に直接、間接に規定され樞軸に運動している。

二

① 三つのプロレタリアートの階級斗争は帝国主義の運動を通じ、ブルジョアジーとプロレタリアートの非和解的対立を樞軸に相互に関連し合ひ、互いに結びつきあひ単一の全体の一環である。

② (イ) 帝国主義内部の階級斗争は具体的現実的ブルジョアジーとプロレタリアートの階級斗争である。

(ロ) 植民地半植民地の階級斗争は民族ブルジョアと帝国主義との癒着、プロレタリアートの他のプロレタリアートの形成と労働者国家内部の階級斗争は、プロレタリアートが権力を掌握しながらも、社会主義経済の限界からの内部の階級対立はプロレタリア人民のその目的を世界革命の政治的根拠地に転化せしめるプロレタリア意識性によつてのみ、階級対立は止揚の方向を見出す。強硬の工業化、工業と農業のバランスはかかる方向で推進されねばならぬ。

労働者国家内部の階級対立は、資本主義生産諸関係の残存とブルジョア制度の母胎とブルジョアオロギイ故に、社会主義生産の限界の露呈過程で他方での外部からの反革命攻撃と結合し全面化する。

この顕在化は外的な根本的に当効国の「世界革命戦略」が破壊する過程に照応する。

内部での資本主義生産諸関係イデオロギイの残存、社会主義生産の限界、外部からの帝国主義の反革命攻撃の結合を通じての階級斗争は非プロレタリア階級のブルジョア思想と要求は自らの政党不在故、当効国「共産党」の内部に浸透し、それを修正

けた。まさに、帝国主義の対立物プロレタリアートは、労働者国家を作り出したのだ。革命から延命した帝国主義は、再生産を集積し、超巨大金融独占資本に発展し、経済的には、農工の不均衡、基幹産業とその他の不均衡、資本主義固有の混沌・恐慌と奇生性の増大を一層深くさせた。政治的にはどうか。金融独占資本の超巨大化を通じて、金融ブルジョアジーへの官僚的屈服と人的結合をへ、一国の「国民」経済と政治的国家は、金融ブルジョアジーに占有された。金融ブルジョアジーは、自己の利害を貫徹する為に、計画的に侵略と抑圧、反革命攻撃を展開した。他方、帝国主義のプロレタリアートも金融独占の巨大化に際し、より大量に組織され団結し、後進国プロレタリア人民は、キガと政治的無権利状態に陥し込められた。だが、かかる帝国主義の延命をへての先進国階級斗争、後進国階級斗争は、プロレタリアートが、世界革命の根拠地をもつことによつて、最早ロシア革命以前とは根本的に異なる質的受動から攻撃へと転化した。又、同時にあらかも超帝国主義なるかの如き、国際帝国主義政治の諸現象を生み出したのであった。とりわけ、五十年代はそうであった。

(b) プロレタリアートの世界革命の根拠地創出の歴史的意味とブルジョアジーの帝国主義政治に於ける主観的追求。とそれの必然的破壊

ロシア革命以前の帝国主義段階の政治、支配の論理は、単純で帝国主義世界の即自的自然形態であった。即ち、帝国主義者の支配の物的基礎は、国民経済であり、政治的基礎は、帝国主義国家であった。ブルジョアジーは、他の諸階級の利害を、国民利害の如く思い込ませ、自らの利害を貫徹し、

主義の不均等発展、市場再分轄成への不可避的経済過程に照応した。侵略、抑圧、反革命の全世界戦争(一)発展政治過程に於て、三者の内在性を諸国家の枠を越え単一の一つのものと、そしてその全体の鎖の一環へと転化する経済的政治的基礎を与える。三者内部相互の力関係の規定し合ひはその基礎に帝国主義のブルジョアジープロレタリアートの力関係に発展転化し、逆に前二者の力関係と先進国階級斗争への影響は根本的なものとなる。

三

ロシア革命以後、とりわけ中国革命、東欧革命を経たかゝる世界が三つのプロレタリアートに分裂している(二)厳密には二つ(三)世界は世界史にとって如何なる時代であるのか。このことは現代革命の基本点を獲得する前提である。我々はかかる世界史の特殊な時代を人類の、(一)自然史の最終ページであり、(二)世界プロレタリア革命の最終の前夜、(三)世界階級斗争に於けるプロレタリアートの攻撃的段階と結論づける。

俗物にはかかる時代は奇妙で人類史の破局(来世とみえるかも知れない。だが歴史は根本的に発展し、鉄の法則を貫徹し、ブルジョアジーと資本主義社会を追いつめ、歴史の主人公をプロレタリアートと世界社会主義に席を明け渡さざるを得ない最終段階に至っている。

④ 産業資本主義から帝国主義への発展転化はその対立物(二)帝国主義の墓場人プロレタリアートを大量に生み出し、その世界観(二)マルクス・レーニン主義と指導部ボルジエヴィキ・レーニン党を完成させた。そして、帝国主義の鎖の弱い環を、プロレタリアートは、ボルジエヴィキ・レーニン党を先駆に打ち砕き、ソ連邦を築きあげた。他階級の利害を従属させ拒否した。生産の増大と市場の限界から起る、市場再分割戦に於ける帝国主義相互の対立、被抑圧民族の侵略と抑圧においても、ナショナリズムで帝国主義競争に動員するのであった。プロレタリア革命は、プロレタリアの各国毎の分断下で帝国主義と日和見主義と闘いつつ、帝国主義戦争の結果の資本主義生産の破壊をもつて、「国民経済」「国家」の幻想の崩壊の地点で革命を闘いとられねばならぬ。帝国主義の全世界戦争以前に労働者は、資本主義のカラクリを見破る、経済的基礎と政治的環境は与えられず、革命家運にとつて、プロレタリアートの国際的、国内的団結とプロレタリアートの建設が焦眉の課題であつた。かかる受動的革命とは違つて、現代の革命は革命に向けて攻撃的である。

プロレタリアートの根拠地が出来上ることによつてその根拠地を通じて、政治的にも、組織的にも、各国の分断された階級斗争は、統合単一化され、同時に各国に、経済的危機に規定されながらも相対的独自の陣地を築くことが可能である。誤解されないようにアッチやオッチの如き、経済過程の構造改革でなく、先進国に於ては、労働組合、他大衆組織の強化拡大及び合法的政治活動の獲得である。又、後進国では解放区とゲリラ軍である。これらの陣地戦は、何も根拠地からの要因によつてのみではなく、前述した金融独占の巨大化を通じて、労働者の大量な押出とその団結にその内在的経済的基礎をおく(三)又後進国は、五十年代の水平分業の発展とアメ帝の支配収奪の極限的永続的危機がそれである。これらの根拠地の存在と根拠地と結びついた世界階級斗争の攻撃的質への転化(四)、国際帝国主義政治に如何なる影響を及ぼすのか。ロシア革命以前、古典的帝国主義政治に於ける帝国主義者の敵(二)

プロレタリアートは、各国国民国家毎に分断され、内にあつた、だが根拠地の存在を通じて、各国帝国主義は外と内（それも結合された）の敵と対決せざるを得なくなつた。金融独占ブルジョアジーは延命し、その巨大な資本力によって国家を占有し、最も自己の特権を全社会的に「国民利害」の幻想によって貫徹するかの如くみえたが、他方同時に、プロレタリア人民が根拠地と明白に陣地をもつことによつて支配の効率を半減させ、自己の利害と対立しない限りに於て労働者国家に対し政治的には同盟を余さなくされた。彼等は内のプロレタリアートを支配せんとすれば、国際的の反革命と同質な攻撃を展開せざるを得ないのである。アメリカ帝国主義の圧倒的経済的地位を基礎に各国帝国主義は、自己の経済的利益を犯さない限りで同盟し、ソ連修正主義指導部に核反革命体制でどうかつし、國連をテコに国家間帝国主義政治に巻きこんだ。だが、西陲日本帝國主義にとつて、経済的に自立しながらも、政治的には、相対的に劣位な同盟を結ぶことは、自らの支配の論理そのものを歪め、不純なものにするが故に、ナショナリストとプロレタリア人民から反撥されざるを得なくするのである。このように帝國主義者のジレンマはどこからくるのか。正に古典的帝國主義の支配の論理を飛び超えかものとして、プロレタリアートの根拠地が生みおとされ、存在し、活動していることにこそ根源をおく。これは彼等にとつて絶対的の限界である。アメリカ帝國主義は、五十年代帝國主義世界に、自己の金融独占の網目を張りめぐらし、それ故にこそ反革命行動は自己の利益に一致していた。だが同じく、彼等に又支配の論理を不純なものにした。かかる帝國主義のジレンマは一層拡大され、増々自己矛盾し、労働者国家と帝國主義国家内部のプロレタリア陣地に対する国際的の反革命同盟、国際的の協調を完全に主観的願望に転落

の歴史的發展、そのものなかの絶対的の后退と危機である。
(c) 労働者国家と現代修正主義
キューバはO.L.A.S.会議をもつて自らを世界革命の根拠地國家足らんことを宣言した。

中国の「文化大革命」運動の根本的根拠は五十年代一六十年代前期までの世界革命戦略の反米民族解放一中間地帯化路線の後進國の危機の全面化に対応する民族解放一社会主義の一段階世界革命の進展をもつて、その戦略の反動性を暴露した。ブルジョアジー、農民、小ブルとプロレタリアートの前者のプロレタリアへの妥協の上に乗った割、右派ラインの修正主義グループは、天災、ソ連の引き上げと援助の打ち切りによる経済の停滞と国際戦略の破綻とが結合し、混在していたブルジョアジー、富農、小ブル、上層労働者、特権官僚群と部分的プロレタリアート、農民との階級対立が顕在化した。右派修正主義が前者のプロレタリアに依拠したのに比し、毛沢東は后者のプロレタリアに依拠し、プロレタリアを追求している。

だが、問題の核心はどこにあるのか。
アメ帝を軸とした帝國主義と癒着した民族ブルジョアジーと、プロレタリア、農民との妥協体制の上にあつたボナバルチズム政權が、植民地経済の破綻からブルジョアジーと帝國主義に對し、プロレタリア、農民の階級対立が激化することによつて、崩壊し、軍事反革命政權に転化し、プロレタリア、農民の闘いが民族解放一社会主義に、後進國階級斗争が転化し、ことである。

このことを通してボナバルト政權を支持し、それを基礎にしての反米民族解放の中間地帯化戦略が破綻し、その展望の下に社会主義生産の限界からの階級斗争が妥協し合つていたのが一挙に顕在したものであり、その方向はプロレタリアの自己目的化ではなく、我々の提出す

させる。まさに、帝國主義の鉄の法則が貫徹し、六四一六五年を境に、不均等發展の第三段階への突入一市場再分割の再開をまつて、帝國主義の対立と抗争、そして、キューバの世界革命の根拠地化、中國世界革命路線の破産・再編と限界と結びついた（中國の）文革と半根拠地化と結合し、後進國労働者一人民の民族解放一社会主義の前進、先進國プロレタリアートの武装斗争の開始は彼等のジレンマをより一層拡大しつづつある。

主観的に對自ブルジョアジーからんとしたケネディは、不均等發展の開始をまつて、ドゴールとアメリカ個別ブルジョアジーに殺され、ジョンソンは今、その主観的願望の破産に追い込まれつつある。

各國帝國主義者は、自己の利益追求の鉄の法則に支配され、不均等發展一市場再分割を開始し、帝國主義相互の対立一抗争に巻き込まれ、他方での労働者国家内部での階級対立と修正主義の打倒の攻撃的階級斗争の發展に對する國際帝國主義の反革命協謀の主観的願望の増大、この両極の矛盾の深化に、分裂病に陥っている。

彼らの分裂と混乱の根源は根本的に世界革命の根拠地と攻撃的階級斗争の質にある。そして、かかる混乱と分裂は必然的に帝國主義の経済法則に規定され、この古典的國民一経済と國家の支配の論理に、最終的に再び純化する。

それは金融ブルジョアジーの発生根拠が帝國主義の経済法則と帝國主義國家にあり、彼等の世界政策（帝國主義政治）は、これと遊離しては有り得ないことに根拠をおくからである。それと遊離したブルジョアジーの政策は主観であり、恣意であり、経済法則の進展と支配の力量の限界に達する地点で、その性格を暴露する。

これらのことはプロレタリアートの世界史的攻勢とブルジョアジ

る世界革命戦略に向けての、世界革命の根拠地國家以外に、内部の階級対立は止揚の方向を見出さない。

従つて、中國文化大革命の裏に貫徹した真理は、実は労働者國家が社会主義生産の限界からの階級対立が、一國ではなく万国レタリア世界革命政治に於いてしか止揚され得ないことを物語つたのである。だからこそ、正に、國際政治の破綻から、文革は始つたのであり、國際路線に國內政治を経て、帰りつかざるを得ないし、つきつづつある。

驚いたのは、一國社会主義生産が無限に価値を創出し、階級対立が止揚され、社会主義から共産主義への移行（帝國主義の不均等性をそれが規制する）するものと信じていた中國、東歐、ソ連、各國の構改革や日共の修正主義、一國革命論者である。

主義の物質的根拠は帝国主義の存在を通じた階級対立の存在であり相互の結合は相互に補充し合う。そして両者のマルクス主義的言辭をもつてのマルクス・レーニン主義の現代的修正は一種の原始蓄積の脆弱性と社会的生産の限界にもかかわらず社会主義を主観的に願望し、前者は世界革命根拠地国家に向けてのプロ独を抜き、後者はブルジョアジーと総体として帝国主義に和解する。スターリニズムはかかる意味に於いて現代過渡期世界の修正主義以外の何者でもない。だから我々の実践的世界観は反帝世界革命「プロ独・暴力革命以外の何者でもない。過渡期社会とスターリン主義を帝国主義の存在や労働者国家内部の階級対立を切り離しプロレタリア革命から共産主義への処方箋を歪める特殊な神秘的な「第三節とゆう」とその「人格」と勝手に観念し、スターリニズムからの跋外を叫ぶ反帝・反修正主義者は正にその二元論的な観念から跋外されるのである。同様に、青同解放派は反帝を唱え乍ら結局のところスターリニズムの現実的根拠の解明とそれと理論の関連の実際的分析を抜きにすることに何んと観念的なことか。レーニン主義に根拠を求めているが実は反スタ派と同じく二元論であることに無自覚である。彼らの左翼日和見主義の観念性は過渡期世界と帝国主義の運動法則として規定されての攻撃的階級斗争の時代の意義を見抜けず、帝国主義論を放棄しせいぜい「賃労働と資本」段階の経済学に止まり、初期マルクスの市民社会と国家の関連に於ける公人と私人の分裂・疎外の把握にとどまるところに根拠をおく。本格的攻撃的階級斗争がOLASによるゲバラ・カストロ路線の確立、及び中共の経験主義的プラグマチックな世界革命根拠地国家への半転化を基礎に展開され始めている。我々は我々の階級斗争を我々の戦略と国際主義の下に実現しつつ第三の道派と連合し、手派を實踐過程で革命

的に変革せしめ、ソ連修正主義を打倒すべく単一世界党を勝ち取りねばならぬ。

(d) 危機の引き延ばしからの人類史未曾有の破局に全世界永続戦争と現代革命

金融ブルジョアジーの国家の占有とアメ帝の後退し乍らも帝国主義世界の五十年代の経済・政治的・軍事的遺産のいまだの相続・その内部からの西歐・日本の敵対勢力の伸長と相互の冷戦を計画的遺産の分配競争、かかる対応は統一されないものの恣意的結合であるが故に、最終的に帝国主義の法則によって分裂する。

問題は分裂するまでの過程であり、分裂した時点である。生産の力剩り市場再分割の進行は他方での帝国主義者の経済外からの恣意によって計画的に強行され、その経済的対立・抗争が政治的、軍事的対立・ヘストリートに転化することが引き延ばされ、五十年代の経済・政治、軍事の米帝体制の枠の内部で高度に累積し、その枠を通じてのなす崩壊的市場再編成として発現する。だが帝国主義の運動法則は、これを突き破り、本来の市場再分割戦へと発展するのである。

五十年代の経済・政治・軍事機構・制度の枠内での世界市場の再編成から、これ等の諸制度の崩壊を経ての本格的分割戦と政治的軍事的対立・帝国主義戦争、反革命戦争、民族解放・社会主義戦争への結節点は何なる環をもつて実現されるのか、この地点への過程は、国際的膨脹政策とそれに応じた国内政策への労働者、人民の攻撃的階級斗争が浄化する過程である。

生産の過剰を基礎にした過剰生産恐慌の諸矛盾の成熟は帝国主義の不均等を発展がドル・ポンド体制と衝突を起し、動搖から国際的信用・金融恐慌を媒介にし、全面発現し、経済過程の停滞と資本主

義生産諸関係の崩壊をもたらさずにはおかない。帝国主義は収縮した世界市場に対しての過剰資本を資本輸出し、排他的勢力圏の形成から政治的軍事的対立・帝国主義戦争を準備しなければならぬ。このことはプロレタリアートの世界革命の根拠地と結びついた、陣地の粉砕抜きには不可能である。

陣地の粉砕は国際戦略の下への小ブル・農民の排外主義的結集とプロレタリアートの孤立と内部の分裂を不可欠の条件としての暴力的粉砕であり、正に革命と反革命の階級決戦である。

これはブルジョアジーの力量の弱く、プロレタリアートなど明確な指導部を持て得なく、にも拘らず膨大な陣地を保持しているが為にブルジョアジーの不手極に小ブル、農民が焦燥し、これを主力としたファシズムによって取り組まれる場合もある。

正にかかる階級決戦こそ、国際金融恐慌から過剰生産恐慌への発展過程で展開されるのである。

だからこそ、かかる時点の世界同時革命に向け世界党を建設し、その前段階での帝国主義のナクソシ的市場再分割戦と侵略、反革命、日和見主義、排外主義、現代修正主義に抗し、各階級プロレタリアートが国際反戦斗争をプロレタリア国際主義の旗の下に徹頭徹尾闘い抜き、全ゆる階級斗争を反帝斗争に昂め、プロレタリアート自ら統一陣地を拡大し、農民・小ブルとの革命的反帝同盟を形成することが至上命令なのだ。

第二節 ロシア革命以降の帝国主義(現代帝国主義)

(1) 結 論

現代帝国主義はレーニンの分析し、資本論を継承し内的運動法則を、歴史的・論理的に叙述した帝国主義論に従って、経済法則を展

開している。他の如何なる法則でもない。

今、最も必要をことはレーニン帝国主義論に従って、(1)現状分析(2)幾つかの「新」現象を過渡期世界に攻撃的階級斗争と帝国主義との関連で科学的に説明し(3)現代資本主義論争なるものの論争を整理する方法を確定し、ブルジョア御用学者と現代修正主義者の正体を暴露し、プロレタリアートを武装せしめることである。

- (1) 生産の集積と独占
- (2) 銀行とその新しい役割
- (3) 金融資本と金融寡頭制
- (4) 資本の輸出
- (5) 資本家団体のあいだでの世界の分割
- (6) 列強のあいだでの世界の分割
- (7) 資本主義の特殊な段階としての帝国主義
- (8) 資本主義の寄生性と腐朽
- (9) 帝国主義の批判
- (10) 帝国主義の歴史的地位

かかる帝国主義の運動法則、段階規定、及びプロレタリア世界革命に於ける、修正主義批判と歴史的地位の叙述は真理である。ロシア革命以降、とりわけ第二次帝国主義戦争以降、帝国主義論に沿った上で強調され、或いは付け加えねばならぬ点は以下である。

(1) 生産の集積を通じた、超巨大金融独占資本の成立は、資本の圧倒的過剰からの世界市場の限ない分割、及び金融寡頭制が国民経済、世界市場、政治的國家を独占支配するまで発展したことである。

P 95 (絡み合い、痿着) の段階

P 108 「自由市場は増々過去のものとなりつつある」

P 141 「資本主義独占体は国民経済と政治で首位を占めつつある」

P 160 「例外なく全ての経済機関と政治機関の上に細かい網の目を張りめぐらしている金融寡頭制」

等々の一層の発展としてある。

これ等の資本の過剰と金融寡頭制の新たな発展(決して転化ではなす)は、レーニンが指摘する如く、生産の社会性と所得、生産手段の私有の矛盾を増々累積せしめる。

(ロ) 6章は五〇年代の位置との関連では、第二次世界大戦が米英仏帝国主義の世界分割に対する独目、伊帝国主義の再分割の政治的表現であり、この戦争を通して、米帝国主義が英仏帝国主義を従えての世界市場を分割したのであった。

従って現代の再分割は再び米帝国主義の分割に対する、他帝国主義の再分割からざるを得ない。決して米帝の地位と他帝国主義の従属し超世界資本主義ではなす。

(イ) 九章の帝国主義批判は、レーニンに於いては、「社会の種々な階級が、それぞれの一般的イデオロギーとの関連においてとる帝国主義の政策に対してとる態度」と決定し、諸政党の修正主義と分枝する基準を「帝国主義の基礎を改良主義的に改められるか否か」に設定している。マルクス主義の背教者カウツキーの批判を「生産の独占し金融独占の矛盾という最も奥深い矛盾との闘いを糾象する、帝国主義を政策とする考え」に「経済に於ける独占が政治に於ける独占と政策を創出している」ことを指摘し「経済に於ける独占が非独占的・非暴力的・非侵略的行動様式と両立し得るわけがない」と批判している。

ット

(4) IMF体制 米帝の独占支配、他帝国主義の反乱は不可ヒ

⑤ 「社会主義」 貿易は属性として対象は問題でない。現代修正主義の武装解除と甘い願望。

(ロ) 現代資本主義論争

(一) 世界革命樞軸地国家の成立と、攻撃的階級斗争の歴史的时代は、ブルジョアジーの旧来の帝国主義国民経済↓国家の支配の論理を越え、逆に支配の論理の限界に対する、個々のブルジョアジーの危機感からの主観的対自化と最終的破産、この物質的内的根拠は、①金融力頭制による国家の占有②五〇年代一六〇年代前半のアメリカの帝国主義に対する独裁的地位、③現代修正主義の存在、の三つである。

(二) 経済→政治のマルクス主義経済学の原則をまっぴら、ブルジョアジーの主観的対自化の対応が現象化する現代過渡期世界の把握を踏えることによつて、正当に位置付けられることを意味する。現代過渡期世界の把握を抜きにした場合、この原則は教条化するか或いは、修正される。修正主義経済学者は、その根拠を何か別個を経済法則に求めようとする。

そこにブルジョア近経学者との和解の成立ノ時態はこれだけではなす。

(三) 経済の政治への従属、政治の経済の優位という観念も、又その逆で、経済が政治を完全に占有した故に、逆にまたかも政治が経済に優先しているかのごとく現象することもあるのである。

実は、経済が政治を占有することによって、もつとも冷静合理的に世界的視野で金融独占が利潤を稼ぎだそうとする計画性にある。

この批判は今も生きている。だが現代修正主義者がこのことに関しては曖昧にし、この根拠を、労働者国家内部の現代修正主義者と相互補充し合い、労働者国家の共産主義への無限の発展という虚意と世界革命へむけてのプロ独のマルクス主義の修正を行っているところ現代修正主義の現代性がある。

だから我々は帝国主義の確認、帝国主義に包囲された労働者国家の生産の限界と革命の根拠地をめざすプロ独との関連を明らかにし、再び帝国主義世界にもどらねばならぬ。

(三) 十章はレーニンは帝国主義の歴史的地位を「自由競争の上から他ならぬ自由競争から成長する独占は、資本主義制度からもつと高度の社会制経済制度への過渡である」と規定する。この規定は増々その正しさを証明しつつある。

経済制度としてロシア革命以降、生産の社会化の進行、そして私有財産制との対立、その矛盾を金融寡頭制は国家の支配として擬制的社会性を実現している。

かつレーニンは帝国主義が階級斗争に於てプロ世界革命の前夜であると規定した。我々は金融寡頭制の発展、資本の過剰、プロの大衆化と団結、労働者国家の世界革命樞軸地国家への転化の歴史的地位を考慮すれば、ロシア革命以降の時代は「プロレタリア革命の最終の前夜」と規定し得る。

(3) 新現象と現代資本主義論争

① DEEC 「国民経済」利益に背反しない限りでの経・政的(反米反共)連合、省略

② 国際独占体 国籍をもち、他の金融独占資本輸出の現代的形態と対立、タタキ出される。

③ 開発・援助 資本輸出形態、政治的役割を兼ねる或いは七

英統制経済や未来の国際的金融機関の創出、「協調」反共軍事同盟、アメリカと他帝国主義、植民地、半植民地の陶造等も又、しかりである。

(II) だからこそ、ブルの主観的政治に感わされることなく、我々は彼等の主観的展望が、見事に破産し、あかかも変容しかかと思える。支配の論理が、支配の論理として全面化する地点に向け、帝国主義論と、国家と革命の原則を徹頭徹尾防衛する必要があるのだ。同時に過渡期世界、帝国主義論との関連でブルジョアジーの主観的政治とその破産を科学的に説明する必要がある。

第二章 ブルジョア社会と帝国主義国家

第一節 生産課程・市民社会・国家

(1) 産業資本主義の確立、及び、その帝国主義への発展、転化を基礎に帝国主義市民社会は、市民社会が階級社会であることを最も顕在化させた。産業資本主義の前期、あるいは、その発展転化過程に於いて分析された「生産過程→市民社会→国家」の諸規定と、その総体が、何故、哲学的で神秘的なヘーゲルの残滓を有していたかは明らかに、対象は産業資本主義とプロレタリアートの未確立そのものにあつた。

或いは「市民社会から生れ、社会の上にとり、社会に対して、外的なものとなつていく権力」「交通形態」等々の曖昧性は対象そのものの曖昧性であった。確立された帝国主義段階には対象が確立されているが故に、レーニンの示した如く、我々は市民社会が階級社会であると規定する。

(2) そして、国家は市民社会II階級社会の、階級対立の非和解性

の産物であると適確に規定できる。

更にその具体的な④武装した人間の特殊な部隊、⑤被抑圧階級を搾取する道具、と規定し得る。むしろ、我々に今から、未来にかけて、必要なのは日本帝國主義國家の⑥⑦の具体的分析と必要である。

第二節 諸階級の政治への参加—支配の論理

—具体的政治過程

① 生産過程（勿論流通過程も含む）に基礎を置く市民社会の階級対立、必然的に、資本主義生産関係、資本主義階級を結核する帝國主義國家と対立する。

② この政治過程は、帝國主義社會に於いては根本的に実現されない要求を國家に向ける根拠は、根本的には資本制生産と私有財産制度、帝國主義國家の存在そのものによるが、直接的には、諸階級が資本制生産過程に於いて、生活資料を与えられる（又、ブルジョアも利潤追求の限りで与えざるを得ない）こと、及び私有財産制度にある。

③ マルクスの提出したブルジョア國家の幻想共同性とはこの事に物質的根拠を以て諸階級自身のブルジョアイデオロギーである。又そのような、ブルジョアの、即自的人間の屬性である。これは論理的には、人間労働が資本制生産過程では剰余価値を生み出すことに對する無理解であり、客観的には、生きる為、換言すれば、人間が労働し生産手段を作り、種子を作る存在の為に、ブルジョアの労働を余さなくされ、資本制生産関係が、國家に結核させられているからである。

このことを直接的根拠としてブルジョア生産様式があたかも一對

その二つは、かかる具体的政治過程は諸階級の意識と力関係を反映してブルジョア政党、改良主義政党、革命党の具体的行動と党派斗争に於いて展開されることである。

だから市民社会と國家の分析は常に結論的に党派の主張と動向、及び党派斗争の戦術に物質化させねばならぬ。

第三節 帝國主義國家とプロレタリア世界革命

1. 帝國主義は帝國主義國家の支配の論理を自ら打ち壊さざるを得ない。

帝國主義の生産の集積—資本の過剰—資本輸出—世界の資本家団体の分割の必然的、鉄の經濟的法則は政治的軍事的諸列強の世界の分割の論理を照応させる。このことは、労働者人民に國家の批判と、國際的団結を与える。この經濟政治法則の深化は、必然的にも恐慌、産業の不均衡、混乱をよび起し、他方で政治的に帝國主義戦争に向けて資本主義生産関係を破壊することによって、「幻想共同性」の現在の根拠を消滅させ、階級社会と國家の暴力、階級性を全面化する。正にブルジョア階級は帝國主義「國民」經濟から生れ、その經濟法則が自己の支配の根拠、「國民」國家を越え、逆にそのことが資本制生産過程を動揺させるが故に、革命の根本的可能性を与えるのである。

2. 過渡期世界は、かかる可能性に加えプロレタリアートに、世界革命根拠地國家と結びつくことにおいて主体的な即自的能動性—攻撃的階級斗争の質を与える。

3. 帝國主義生産過程はブルジョア階級とプロレタリアートの非

立と統一—「絶対と相互依存」の自己矛盾的統一関係としてあるかの如く考へることの結合にある。両者の相互規定し合いとしての現実そのものである。人間存在とその意識において、階級は政治的である。ブルジョア社會の屬性を幻想共同性と規定することはとりわけ、政治過程において重要である。

△それ故に現実のブルジョアの労働に對する根本的批判、私有財産制度、帝國主義國家の暴力的打倒でありながら諸階級の自己意識をブルジョアイデオロギー—國家の幻想共同性に外化し、他方で、ブルジョア階級も幻想共同性と暴力でもって運動を抑圧し、妥協が成立する。

△同時に、運動そのものをブルジョア階級は、諸階級に資本制制度を容認させ、自己の特殊性に諸階級の利益を従属させ、或いは否定し、またかゝる諸階級の利害を満たしたかの如く振舞うのである。又、諸階級もそのように思いこまされる。

△ここで留意しなければならぬことは次の二点である。

△その一つは、かかる階級斗争の推進は、諸階級に自然発生的に過渡期世界、帝國主義生産過程、市民社会と帝國主義國家の階級の本質を即自的、自然発生的に意識する契機を与える。

△かつ帝國主義打倒の戦術—戦術をそして自らの団結とソヴィエト建設のそれを与える。

だが決して、自らでもってそれを意識化し、把持することはできない。かかる二つの事柄は一つのことである。即ち資本主義生産関係と帝國主義國家と通じたブルジョア階級とプロレタリアートの対立が資本主義の危機が成熟せず、表面的な資本と賃労働の相互の対立ともたれ合いの如き現象を写すからであり、それは前衛によって外から、日常的意識の外から把持をおさせられねばならない。

和解的対立を形成し、正にそれ故に帝國主義國家は帝國主義生産過程を維持するためにブルジョア階級の暴力装置と収奪の道具としての役割りを果たす。

従って階級対立の止揚はまず帝國主義國家を暴力的打倒し、それと、資本主義生産、私有財産制度を廢絶すべきプロレタリア世界革命の根拠地國家化と世界社会主義をめざすプロレタリア独裁に置き換えられねばならない。

第四節 國家死滅の經濟的基礎—プロレタリア世界革命

の修正—現代修正主義と現代無政府主義

レーニンは國家と革命の第五章でこの問題を取り上げている。

かかる主要に帝國主義と超帝國主義、暴力革命と非暴力革命、革命的プロレタリア独裁と、その否定等々のマルクス主義の根本問題が実践的に問われた時代、レーニンは最後の問題につきカウツキーとパンネツクを修正主義と無政府主義を引き合いに出しながら、その両者を批判している。

現代過渡期世界は正に新たな装いをもって再びマルクス主義の根本問題を実践的に暴力革命—革命的プロレタリア独裁について、現代修正主義（スターリン主義、トリアツチ主義、機改、官頭派）及び反帝反スタ派の無政府主義を登場させている。

過去に於て、修正主義者は暴力革命を否定し、無政府主義は、暴力革命の準備に於けるプロレタリア党を否定し、暴力革命を承認し、共産主義への過渡としての革命的プロレタリア独裁を否定した。

現代過渡期世界に於ける、左右の日和見主義とマルクス主義への背叛が、暴力革命とプロレタリア独裁をめぐって登場している。

現代修正主義者達は、一國に於いて社会主義から共産主義に經濟

的に出来る」と願望し、実はその裏面は国内のブルジョアとブルジョア制度、イデオロギー及び、帝国主義世界のブルジョアととの闘いを放棄し、和解している。

他方、現代無政府主義は反帝反スタ派は現実の経済の発展段階に規制され、制約されていると云ふから起る現実の階級対立と政治に目を向けることをなく、プロレタリアートの反動的階級対立の国内的、国際的闘いを、現代労働者国家に於いて人間の人間に対する支配が今、否定されるなかの如く思い込み、そこから現実の世界を御念から推定する。何故なら、彼らは一国社会主義、二階級階級を批判しながらも、現実の過渡期世界に階級斗争を止揚する革命的な世界革命戦略と単一世界党を否定することに於て明かだ。

両者とも、過渡期世界の現実の階級矛盾とその経済的、政治的実践的解決を離れ、甘んじたるい主観的願望に於けるのである。

問題はこうである。労働者国家と帝国主義世界は、帝国主義の運動を基礎に、世界階級斗争として取り結ばれ単一の有機的全体であり、部分はその一環である。

正に、それを如何に総体としてプロレタリア世界革命を通じ、世界社会主義から共産主義へ一歩一歩具体的に発展させるかである。

レーニンは国家死滅の経済的基礎の章で、労働者国家から共産主義への具体的な科学的解明をマルクスエンゲルスを手引にしたがから、論じている。マルクスは「資本主義社会と共産主義社会との間には、前者から後者への革命的転換の時期がある。この時期に照応した政治上の過渡期がある。この過渡期の国家はプロレタリアートの革命の独裁である。」と述べている。

共産主義へと発展しつつある資本主義社会から共産主義への移行は、政治上の過渡期を以ては不可能である。そしてこの時期の国家

第一節 世界階級斗争の有機的全体性（世界性）と部分の独自性及びその全体の一環としての位置

第一章で述べたことを再度まとめて確認しよう。先進国帝国主義内部の階級斗争は、ブルジョアとプロレタリアとの対立を基礎に展開している。

後進国階級斗争は、帝国主義の侵略、反革命を媒介に、かつそれを反動し反革命化した民族ブルジョアとのゆ着を通じて、帝国主義と民族ブルジョアとのプロレタリアとのゆ着を通じて、帝国主義の他のプロレタリアと非階級的に対立している。かつ労働者国家内部は一国経済の限界を基礎にした階級斗争が、外部の帝国主義の反革命攻撃と階級斗争と結合し、各国帝国主義の打倒を通じてのプロレタリアートの革命的独裁を媒介にした国内階級斗争のプロレタリア的發展以外に抜け道はない。

これ等の三つのプロレタリアの階級斗争は帝国主義の市場再分割と反革命干渉し戦争を通じて、しつかりと単一の有機的全体性をもっている。

それ等の等質性ばかりでなく、各プロレタリア毎に、各国ブルジョアとプロレタリアとの対立を基礎として展開している。

これ等の等質性をもった階級斗争の発展は、若干のつれをもちながらも基本的な同時的テンポで発展し、各三者の力関係は、各他二者を規定し、かつ他者から規定される。

このテンポは帝国主義の同時的危機をまけて完全に準備する。そして、かかることの単一の総体としての力関係は最終的に、先進国の力関係に規定されるものと発展し、他方先進国の力関係は他

はプロレタリアートの革命的独裁を以てしなかりえたい。

従って、経済的發展段階からくる、階級対立を止揚する政治的基礎は労働者国家の指導部が、かかる階級対立が内部の経済的制約に規定されかつ、帝国主義世界から反革命攻撃に規定されていることに對し、プロレタリア世界革命から世界社会主義をめざす、世界革命戦略の追求とそれを追求する形態に独裁を獲得し、この基準の下に、「労働者に応じた分配」や、工業、農業の不均衡の現実的解決の方向が直されねばならぬ、それと對する反動的階級と現代修正主義者を世界労働者人民と結合する過程で粉碎しなければならぬ。

かかる認識と基準の破綻からのみ現代修正主義者は批判されねばならぬ、決して、何か特殊な世界革命戦略とプロレタリアから切り離された、「第三世界」からの批判はあり得ない。と云ふかかかる基準からみれば、ソ連修正主義指導部を先頭とする現代修正主義者の「全人民国家の現在に於ける形成」平和共存の勝利、人民戦線「スターリン流民族自決」等は全くの暴力革命の原則を修正し、全く反労働的、反革命である。彼らは帝国主義世界のブルジョアと国内の反動的階級と手を結び、和解しているのだ。

第三章 我々の世界革命戦略、及び世界党建設

我々の世界日本革命戦略は序章で結論を述べた。一章で過渡期（過渡期社会、帝国主義論世界）の内的構造と有機的全体関連は述べた。従ってここでは本題の確定と説明をする必要がある。

二者に規定されつつある。①かかる②の事柄は正に世界階級斗争の基本動向力が直接間接に帝国主義の運動法則に規定されていることに根拠をおいているからに他ならぬ。

第二節 序章の(1)-(4)のスローガンの説明

(a) ①のスローガンについて

①帝国主義の経済法則を通じて、かつブルジョアとプロレタリアとの間の一部は労働者の売却、及び諸階級の富裕層のブルジョアとの国際、国内階級の利益追求のその参画を物的、政治的基礎にする諸階級の排外主義への傾斜が、ブルジョアと排外主義、現代修正主義の党派によって促進される客観的基礎を与える。だから、とりわけその全体の基本的比重を占める先進帝国主義のプロレタリアートの闘いは、帝国主義の侵略、反革命に對する闘いの過程で同時に排外主義、現代修正主義に對し、プロレタリア国際主義の旗が守り抜かれねばならぬ。

② かつ一章で述べたが如く、先進国、後進国階級斗争を攻撃的階級斗争として、目的意識的に闘いとらねばならぬ。

③ プロレタリア国際主義の現代的旗は、民族解放し社会主義し労働者国家への一切の反革命反対し世界革命をめざす革命的プロレタリア独裁實現し帝国主義政府の一切の侵略、抑圧、反革命粉碎の三つの政治内容である。

これ等の三つの旗は、どのプロレタリアの、どの一国のプロレタリア人民にとっても同じである。

この三つのスローガンは後進国の一国のプロレタリア人民にとつては、民族解放斗争から出発しながらも、それが帝国主義と民族

ルの着着を通じ最早民族解放に終らないことが斗争そのものに最初から皆段に貫徹し、かかる帝国主義世界全体との対立へ発展することとが最初から並段に貫徹するが故に、かかる斗争は先進国プロレタリア人民と労働者国家の人民のプロ国際主義の斗いと結合することを条件とし、又、他の二者の内在性がそうさせずにはおかない。

若干の注意点は民族解放社会主義のストローガンは、一段階世界革命戦略である。が民族解放を飛び越えた社会主義が先行される二段階戦略の裏返しとして理解されてはならない。

民族解放斗争は社会主義をめざすことよってのみ可能であり、かつ社会主義は民族解放斗争に内包され永続的に発展転化するものである。

又民族自決社会主義でも正しいが、レーニンの民族自決の原則は、現代修正主義者に歪曲され、流布され、ブルジョアジーはそれを利用してはいるが故に、かかる言葉は使用しなす。

先進国プロ人民にとつての、この国際主義のストローガンは、自国帝国主義の侵略、抑圧、反革命に斗い抜くことも後進国人民、労働者国家人民と結合してのみ、帝国主義、排外主義、現代修正主義の党派から労働者人民を切り離し得るのである。

労働者国家のプロレタリア人民も、自国の反動的階級と斗い、現代修正主義を打倒し、共産主義の実現に向かう為には、先進国、後進国労働者人民と結合し、帝国主義の世界的体系を打ち破る以外には道はない。

(b) ②のストローガンについては、次の二つのことに於て説明されなければならぬ。

イ、その実現の経済的基礎

の不均等発展と先進国、中進国を含んだ、或いは労働者国家も対象にした直接的現在のなし崩しの再分割一勢力圏形成と後進国危機との結合を通じた帝国主義と後進国労働者人民の民族解放社会主義の第三世界の戦争の発現をキ軸に展開される。だから①の国際主義のストローガンの下に単一に結合され、全ゆる階級斗争は帝国主義の侵略と抑圧一反革命斗争に統合され、又統合されなければならない。それは、最終的に帝国主義の過剰生産恐慌の発現の時点にむけ、帝国主義者の政治的動揺とプロレタリアートの攻勢的階級決戦としての同時的烽火に発展するし、又発展させられなければならない。かくて同時にプロレタリア世界革命は成熟し、又実現されなければならない。この際どこか強い国ではプロレタリア革命が敗退するかも知れなことを予見して、世界革命戦略はたてられたい。正しく、かかる意識と理論こそが一国革命の総和としての段階的、世界革命戦略への転落即ち結果現象を合理化する日和見主義、客観主義の革命戦略の結果せしめるのである。

単一の世界戦略の下での同時打倒こそがプロレタリア革命の敗退をさける唯一の道である。

(c) ③のストローガンについて

かかる国際主義のストローガンと単一、同時世界革命戦略の下に、動揺し、狂乱化する、農民、小ブルの現状打破一反資本主義の運動を、革命的貧民小ブルを同盟軍として組織することが、彼らにブルジョアジーの排外主義一国家主義の下へ結集させ得ないこととあり、現代革命の寄生形態IIファシズムを消滅させる唯一の道である。それにはプロレタリアートの正規軍の形成と全階級斗争へのそのヘグモニーの拡大を基礎にしなければならぬ。

ロ、主体的な最終的帝国主義同時打倒の追求についてである。

帝国主義の運動法則はそれ自体根本的に展開される。にも拘らず過渡期世界に於ける歴史的な世界革命根拠地国家の登場、及びそれと結びついた世界の攻勢的階級斗争故の、帝国主義者の主観的対自性により、帝国主義の運動は歪められ、変形され、矛盾発現を引き延される。だが、それは同時に根本的を帝国主義の矛盾の高度を累積であり、次の段階のその法則の最も純化された発現の過渡である。

これらの總体の破局にむけての、動力は正に、生産の集積一資本の過剰に他ならない。そして、その経済的矛盾は、金融独占産業と他産業の不均等、物価騰貴、恐慌、人民の収奪等々のブルジョア生産の混頓であり、各帝国主義の不均等発展を基底とした。なし崩しの市場再分割の進行である。これらの戦後アメリカ、経済、政治、軍事体制の枠を通じた不均等を発展は、同時にそれ自身の「破局」引き延し、発現の形態故に、帝国主義に肝倒的な過剰生産を累積せしめ、過剰生産恐慌を成熟させる。これは、その契機を不均等を発展による帝国主義の対立一抗争が、アメリカによって条件付けられた世界貿易の信用関係を動揺一崩壊させることを契機として、世界金融恐慌に媒介されて発現する。

資本主義個有のかかる自律的価値破壊運動は、全世界の全産業に貫徹し、帝国主義経済は一時的に停滞させずにはおかない。この一時的停滞は古典的帝国主義の帝国主義戦争という政治に媒介された、経済的停滞と同意であり、否それ以上の規模の広がりとして深さを有する。

全世界階級決戦はかくして形成される。それに至る全世界の各ブロックの、各国の階級斗争は、帝国主義相互侵襲一補充関係はなくなるものであり、自律的な小ブル一農民の反資本主義の組織一プロレタリアートの組織のモイズムと第四インターのトロッキーストの小ブル同盟論とは全く異なる。

(d) ④のストローガン

帝国主義国家は増々武装された特殊な人間の部隊、収奪の道具としての階級の本質を露呈させつつある。人民は民主主義を真に形式ではなく、一国的ではなく、実態に於て実現する為には文字通り、全人民の武装をすることによってプロレタリアート人民のコンミュニオンソヴィエト型国家の基礎を作るし、作らねばならぬ。全世界の全ゆる階級斗争は帝国主義国家との武装斗争へ発展しつつあるし、それは必然である。

我々は攻勢的階級斗争の歴史的位置を国家の階級的役割り、暴力革命の不可ヒ性を自覚し、全ゆる階級斗争の主要な階級形態を武装斗争として斗い、多様な斗争形態を結合し、かつそれに発展せしめる必要がある。

第三節 世界プロレタリア党

以上の(1)(2)の事柄とその実現は、不可ヒ的に単一な、各国労働者共産党の一枚岩の世界指令部II世界プロレタリア党の獲得として結論付けられる。

ブルジョアジーの歴史の後退とプロレタリアートの攻勢的階級斗争は最も有利なものとして各国の分断されたい同質性、全体的単一性II世界性を世界党をもつて必然的に物質化せしめる。この党の実現は全世界の共産主義者の死活の問題にかりつつある。

し、又、ならせねばならぬ。

現在、国際共産主義運動は大きく三つのブロックに、即ちO.L.A.S.II第三の道派と、毛沢東派、ソ連現代修正主義派に分裂し、かつ結合の動きを開始しつつある。それは世界階級斗争の必然的法則であり、現代修正主義者のみが、分裂を固定化し、一枚岩世界単一党に反対する。何故なら、修正主義そのものが全世界の共産主義者から受け入れられぬからである。

第三インター、コミンテルンの一枚岩は世界階級の認識故に崩壊し、コミンフォルムから連合党へと墮落せしめられた。これ等の事態は党の形態に欠陥があるのではなく、主要に世界革命戦略の誤りに帰因する。

我々は、我々のプロレタリア国際主義と世界革命戦略を提示し、O.L.A.S.II派と一致せしめ、ソ連現代修正主義指導部の世界党会議に於けるその戦略の反革命性をあげき、打倒し、毛沢東派を分派斗争を通して、結集しなければならぬ。戦略的一致の厳密性故、O.L.A.S.II派、中共派の實踐と理論斗争に於ける一致、当面行動綱領に於ける統一行動の保証が出发点である。

第四節 レーニン死後の国際共産主義運動

(1) 第一の世界革命の波と以降

レーニン・ローザ・スターリン・トロツキー

① ①世界革命の挫折及びロシア革命一國に於ける帝国主義の包圍はローザを中心とした革命派の欠陥に起因する。かつ二二年に於けるレーニン戦術の、独共産党の放棄以上の二つである。

② ②ローザの革命性とその左翼日和見主義は、資本蓄積論にみら

両者の関係は後者への前者の従属と前者の日和見主義への転化である。

これは前述した過渡期世界に於ける労働者国家の階級対立と世界革命根拠地国家への転化の否定の誤謬であり、官農、ブルジョアジへの妥協と、帝国主義世界のブルジョアジとの和解であった。

③ ③では如何に追求されたから実現されたのか、総括は常に實際的主体的にかく提出されねばならない。再び誤謬を積み重ねない為

に。アジアの階級対立の激化(中国、インド、朝鮮等)東欧諸国、ソ連邦の階級対立の激化、そして二七—三〇年代初頭にかけての帝國主義相互の対立(抗争、先進帝國主義の階級決戦の成熟、世界階級斗争の再配置、単一性はかく形成された。

これらを根本的に直接間接に規定したものは帝國主義の不均等發展と市場再分割戦であった。この土台の上で世界階級斗争は、一か

かり、斗われていた。

正にスターリンがそれに従属した各國共産党が考えか如く世界階級斗争を各ブロック、各國毎に分断しソ連邦社会主義の建設とその防衛を戦略目標とし、各國ブルジョアジとの和解、即ちその上に築かれた、先進帝國主義のブルジョアジとの和解、即ちその上に

戦術(社会ファシズム、反ファシズム)統一階級、人民階級等)後進國際斗争のスターリン主義的「民族自決」路線は必然的に破産せざるを得なかった。かかる「一國社会主義建設、祖国防衛」に従属した先進國、後進國のバラバラに切り離され、分断された、総和革命戦略は、現実の階級斗争の同質性と帝國主義の起動力に對立する觀念戦略であるが故に、それ自身と對立し破産する。

毛沢東のみが適切をプラグマチズムによってコミンテルンの路線

れる、帝國主義の自動崩壊論を基礎とした國際主義と世界の監視、組織論に於けるメンシェヴィキ的自然成長性論にある。

③ ③レーニンの「弱しき」「飛火論」等は結果として、或いは主体的位置を語ったものであり、レーニンは世界同時革命論者であり、決して段階發展論和世界革命論者ではな

④ ④ロシア革命以降、世界史は地上に過渡期社会を創出した。換言すれば、M.L.S.IIは過渡期世界の革命理論として發展されなければならなかった。

それは我々は合衆得一つつある過渡期世界の階級斗争の攻撃的単一性を基礎とした世界戦略、労働者国家の階級対立の政治的止揚の原則と政策、市民社会と帝國主義国家、組織論である。そのことに切り込み切れない場合、必然的に教条主義と修正主義が生まれる。

偉大な革命家トロツキーも又それによれず、スターリン主義を、現代修正主義を見抜けず、自己の教条と諸欠陥を露呈させずにはおかなかつた。そして、現代修正主義者へのプラグマチックな経済主義的対応はその見本である。

我々は今迄トロツキーから学び吸収してきたが、今けつきりと決別しをければならぬ。

(2) 第二の世界革命の波とその挫折

① ①二七—三〇年代中期の階級決戦は、後進國、ソ連の階級対立を、西欧(特に独)米、日に集中し、それと結合し、解放されねばならなかった。

② ②それは、ソ連共産党現代修正主義の下での、各國の共産党の結合關係を通しての、一般的合法的合法戦略、及び帝國主義戦争を内乱への教条的採用にあり、他方での現代修正主義指導部の一國社会主義建設「社会主義防衛」二段階戦略路線にあった。

から離れ、中國革命の成功に導いた。

我々は、かく実現すべきだと考える。現代修正主義者達と「社会主義」の建設とし各國階級斗争の従属とは反対に、世界階級斗争が直接、間接に、根本的に帝國主義に規定され、全世界階級斗争がこれを機軸に展開され、逆に社会主義も帝國主義打倒を通じた、世界革命と世界社会主義としてのみ過渡を形成する必然故に先進帝國主義内部の階級斗争を機軸に後進國階級斗争、労働者国家内部の階級斗争を一体化し統合する単一の世界戦略こそが要求されたと考える。

正に、それこそ、序章で提起したプロレタリア國際主義のスローガンと、戦略同盟軍論である。

独、米、日の革命運動をかかざる基本点から見た場合、二七—三三—三五年にかけてみよう。

④ ④独共革命の敗北とスターリン主義の現代修正主義への転落

独は二七年前後過剰生産が生じ、不均等發展から信用恐慌が、アメリカの金融恐慌から世界の金融恐慌を通じ、全世界の過剰生産恐慌に突入した。この恐慌は二九年以降数年間、資本主義的、一時的停滯を招いた。二七年前後、独は世界市場への資本輸出、東欧へのたし崩しの分割(三角貿易)と将来仏との國際競争を仰ぎていた。この独の世界市場の國際再分割戦に對抗した仏、英米のヴェルサイユブロックは、ヴェルサイユ体制を基礎に對立、抗争し、獨階級斗争はヴェルサイユ体制を動揺させ、諸階級はヴェルサイユ体制をブルジョア的にかフロタリヤ的にか再編せざるを得なかった。

獨ブルジョアジはその能力を持たず(正に根拠地と結びついたプロの陣地がある)階級斗争の指導部は、ブル・社民から共産党・ナチスに移行した。ナチスは農民、小ブル、ルンプロを反共産党・反汎ゲルマン、ヴェルサイユ体制打倒、欧州の再編し第三帝國の

樹立の展望の下に集約しようとした。とこまで独共産党はどうか？ 彼らの全般的危機とコミンテルンへの従属は、革命の成熟、その

このことを通じた独革命の成功は、逆にソ連内部の革命的プロレタリアートと諸トロツキストたちを勇気づけスターリン主義との斗

紛砕し、同時に資本主義生産諸関係、私有財産制に彼ら自身の反資本主義の紛砕の核心があるにも拘らず感情とデモゴギー、神秘的狂

正しく独仏同時革命に結びつくべきソ連におけるプロレタリアートの革命的民主的独裁を準備させねばならなかつた。

かかる階級斗争は独階級斗争に集中され、その敗北は現代革命の寄生形態IIファシズムを生み出し、他方仏独階級斗争と共産主義者を

⑤ファシズム、人民戦線、現代修正主義の帝国主義との和解

独革命の敗北とファシズムの勝利として終った二〇年代後半から三〇年代初期の西歐階級斗争は、プロレタリアートの攻撃革命の最

絶され、プロレタリアート、人民の世界史的団結が獲得されている人民の革命防衛戦争とは本質的に質が違ひ、ソ連の警退は明らか

三〇年代中期、ロシア革命以降はじめて、国際ブルジョアジーの要求」を満すべき世界革命の根拠地国家に對して対決する「反革命

三〇年代中期の帝国主義者の政治は非常に複雑である。他帝国主義者は、独帝国主義と経済的対立を行なながらも、同時に正

だがそれは不可能である。何故なら人民をデモゴギーでした侵略戦争と現代修正主義指導部であれ私有財産制度が社会的には廢

独一革命と22-2

独プロレタリアートの連帯による独仏打倒の挫折の原因について述べた。ソ連の「社会主義II相国」防衛戦略に従属した反ファシ

確かに仏共産党左派は、これが「帝国主義戦争である」と考え、内乱の準備」を主張したことは正当である。だが錯綜した現代の帝国

(2)これらの反ファシズム統一戦線の二環であり労働者の祖国も防衛できる。かくして現代修正主義の主張は用意された。

かかる主張の二点が仏共産主義をして人民戦線、その後の帝国主義戦争、仏帝国主義の敗北とレジスタンス、そして對帝国主義の敗北とドゴールによる戦争路線過程に全くプロレタリアートを武装解除させた。

これらの根本的誤謬の総体は次の三点において露明され、解決されねばならぬ。

その第一は、帝国主義世界と労働者国家が有する過渡期世界の把握である。

それを基礎とする、現代世界革命戦略、特に「一國社会主義、労働者の祖國防衛」と自己の階級斗争との関連である。

その第二は、ファシズムを単に上部構造のみでこれ考ふるのではなく、正に土台との関連で把握することである。ファシズムは帝国主義の危機に對する反革命の特殊な政治形態以外の何者でもない。

下部構造は徳華明徳の帝国主義なのだ。この上から立って、全現実に對し、侵略せんとし、かつ仏帝国主義の帝国主義戦争に對して、如何なる態度を取るのが問われるのだ。

更に現代民主主義に對してである、ファシズムは現代民主主義を破壊した。マルクス主義は民主主義を国家形態（或いは政治形態）と規定する。ファシズムが帝国主義の特殊な国家形態であるように

又、民主主義も又、国家形態である。だから、その土台が如何なるものであるかということと切り離されてはならない。民主主義は、マルクスが述べている如く「支配階級のどの成員が議會で人民を抑圧し、ふみにじるかを数年に一度決めることこそ、ブル民主主義の階級の本質である。だが「國家は一階級が他の一階級を抑圧する為の機関である（エンゲルス）」としても或る無政府主義者達の「救える」ように、抑圧の形態がプロレタリアートにどうでもよいと

人民戦線は共産主義者の革命的敗北主義の原則の放棄であり、その後の戦後共産党の現代修正主義、否全世界の現代修正主義者の見本を与えたのだ。

スペイン階級斗争も又歪められざるをえないか。革命的プロレタリアート人民はソビエト建設の初めの段階にまで到達した。

このことを正に現代半植民地国の革命の見本とならねばならぬがだが、独革命の敗北を企てスペイン階級斗争はナチスにフランコが結び労働者人民はソ連に手を結ぶことによつて、世界的力関係に発展しながらもスペインプロレタリアートは自覚された現代世界革命戦略をもった前征党を持ちえないが故に、スペイン共産党によつて抑圧され、その斗争を反ファシズム民主主義斗争に押し下げられ、ファシズムの帝国主義諸國はそれを促進せしめたとことによつて、正に反革命に敗退せざるを得なかつた。

この人民戦線の過渡的戦術は、現在先進国各国の現代修正主義者の出発点とされている。ことに日共一官本一派はその典型である。

現在の国際帝国主義政治を従属帝国主義論を基礎にアメ帝を独帝に、そして日本を仏にをぞらえアメ帝の反革命侵略に對する日帝の強制的従属的侵略加担からの大衆の「反米帝民主主義要求」を國際的に「中ソの統一」を基礎とし国際的的反米反帝統一戦線、国内的反米反独占、反帝国主義の統一戦線を基礎に、その上に民主連合政府（人民戦線政府）を集約しようとしている。

中ソの間を右往左往した日共はソ連平和共存路線をみせかけだけ批判した。だが中共、強硬な武装反米人民戦線は彼等にとつて小ブル意識にそまらぬ日共にはかたがた恐怖と驚がくするのみで、それを左から真に革命的に止揚するのではなく右から教条主義の批判的批判を行なうにとどまらなかつた。

いふ事ではない。「階級斗争と階級的抑圧のより広い、より自由なより公然たる形態は階級一般を階級する斗いをプロレタリアートが行うことを常に助ける」（レーニン）のも真理である。

まさに民主主義は土台国家形態の性格、プロレタリアートの階級斗争への利用等の観点で明確にされねばならぬ。

ロシア革命以後、帝国主義の延命労働者國家の登場は、ブルジョアジーをより広い、公然たる自明を抑圧し、公然たる抑圧形態に君主制から、代議制民主主義制度の民主普遍性を与えた。だがやがり形式である。だが過渡期世界に於るプロレタリアートは攻撃的階級斗争故民主主義を君主制度とは、けるかにその実態において、革命を利用できる。この最後の問題こそが、土台と切り離しての、民主主義を願望せしめ、無党派的形式民主主義に転落せしめ、反ファシズム、民主主義防衛に走らせ、結末は帝国主義戦争の合戦隊に転落せしめ、反ファシズム、民主主義防衛に走らせ、帝国主義戦争の合戦隊に転落せしめられたのだ。

このことは抬頭し、全面化する人民の根本的を侵略反対の意識の全面的に揮ふる理論的所産でもある。

以上これらの当時の論争の主要点を整理することによつて、帝国主義戦争をパクロシ、軍事外交政策と反合斗争を結合し、内乱を準備することこそが必要であつたのだ。

これらのことはある意味では絶対的制約をもつていたとも言える。何故からドイツ革命の敗北をもつての諸混乱とその物化は、決定的であつたからである。だが仏共産主義者の進道はそれ以外にない。

この内乱の成功は逆にプロレタリアートに革命の条件をせしめ、同じくソ連現代修正主義を打倒する力關係をソ連内部にもたらざるを得ない。

そして今、彼等はソ連修正主義と妥協を開始した。

彼等の現代革命の歴史的論証は、上田耕一郎全くのベテンの御用理論家、近代主義の俗物は仏人民戦線の総括と革命的発展として、人民戦線の欠陥が下からのプロレタリアートを基礎にして上から強硬的に社会主義政策を大胆に実行すればよかつた、

確かに部分的にファシズム勢力に十字火隊にはナチョナリズムが勝利した。それは帝国主義戦争の出発点における仏ブルジョアジーの勝利にすぎない。だがレオンニブルム内閣はなんとプロレタリアートの政治的、経済的要求と非和解的に對立したか。

社会党中期路線の理論的支柱に清水慎三も又この同類である。諸構革派も大なり小なり同じ現代修正主義の同床異夢に過ぎない。他方ソ連現代修正主義の日本国内に於けるアンチ中諸中国派は肉体的左翼性を保持していても同様に階級的民族主義に彼等の世界革命戦略が変らないう限り転落し、同じ社会排外主義の左からの推進に結実する。

今日日共現代修正主義と古典的教条主義は、仏の労働者階級と共産党の敗北の道を確實に歩んでゐる。

批露への道は善悪でしきつめられてゐる。正に「一度目は悲劇でも二度目は茶番だ」彼等との非和解的を斗争は過渡期世界、現代革命、世界革命戦略、従属帝国主義諸批判、世界単一党建設等をめぐつて死活をかけて斗いとられねばならぬ。

ソ連人民戦線

日共自主
独立路線

人民戦線に對する批判

毛沢東主義がいして幾つかの重大の非マルクス主義的欠陥を有してゐるが現代修正主義やスターリン主義ではない。

- ① 反米一民族解放、中間地帯化(第一第二) 戦略II 周辺革命戦略の誤り、インドネシア革命の敗北の総括II スターリン主義からの内的決別
- ② 世界革命戦略化、プロ独との内的関連における意味性、自力更生は戦略理論の基本として意識化されてはいない。
- ③ 中国核実験ナンセンス
- ④ 核は武器であり誰がどのように使うかである。かつ核の危機があることがら直接に類の危機II 非革命的武器と考へてはならない。
- ⑤ だから問題は戦略である。
- ⑥ 戦略が正しい場合、如何なる条件で打ち返せるのか、かつ戦術決断の誤謬の場合その原則I 他のプロレタリアートのとる態度I 我々自身の曖昧性
- ⑦ 戦略が誤つてゐる場合、帝国主義の反革命核攻撃に対して、他のプロレタリアートのとる態度、ブレフトリトフスク条約とレニ

- ④ 唯一の労働者国家に導いた正しさ
- ⑤ 反右派斗争と人民公社
- ⑥ 人民内部の矛盾、階級斗争論
- ⑦ 文革
- ⑧ 現代修正主義との違い
- ⑨ 個人崇拜I 全くの部分

欠陥の部分性

全く卓抜である。その後の政治的過渡期に於ける基本点に於ける新民主主義体制朝鮮動乱、反右派斗争I 人民公社運動の正しさ、モスクワへの参画II フルシエフとの妥協、ハンガリー動乱に対する修正主義への加担、その後の中、ソ連の発展、六〇年代中期以降の対外戦略の誤謬と破産そして中国文革、正にこれらの過程は矛盾に満ちてゐるかの如くみえる。だが中国共産党の現実の矛盾を通した発展である。

彼等はスターリン主義の如く閉じられた体系をもつてはいない。そしてこの主體的評価の基本点は国内政策の基本的正しさと国防政策の正しさと誤謬の入りまじりとしてゐる現象に内在する基本点に中国階級斗争が一國の階級諸關係を通じて現代世界全体を内包しはじめることである。このことは、中国共産党は植民地に於ける現代的攻撃的階級斗争の民族解放社会主義の路線を直線的・即自的(II) ラグマチックな経験主義)にたどりながら、世界的諸關係に立ち至ることによつて、その意味を対自的なものとして、即ち経験主義を越え、現代過渡期世界現代革命の把握と我々の国際主義、世界革命戦略、戦術を採用せざるを得ないし、又それに至らねばい場合、地方的共産主義に留まるか、現代修正主義に転落するかを運命付けられてゐるのである。

今彼等は我々への道をプラグマチックに捜索しつつある。中・ソ論争は労働者国家の発展の不均等に客観的に起因する面もあるが、主要に主體的には、過渡期世界と世界革命戦略の問題である。⑦ 米革命の挫折とニューディール 世界過剰生産恐怖I 米帝の欧州への帝国主義外交の破産からの二九年一三〇年初頭に於ける階級決断の成熟、プロレタリアートの自然発生的攻撃的斗争の開始、だが世界単一党の不在とアメリカ大

これを基本問題だと捉える態度こそ小ブル的である。⑦ 次の中共大会とその政治内容こそが問題である。

ここでは、このことを論議するのが主要でない。この問題は後述する。ここでは、特に④のaを問題にする。二七年上海蜂起、二八年広東蜂起、二度のコミンテルンの指導の左右の日和見主義としての誤りと毛沢東の革命路線に於けるそれとの袂別以降の抗日統一戦線、解放区を保持した上での国共合作、反動化しつつある民族ブルジョアジーへの警戒心とその利用、革命的民族主義者の結果、日本兵士との連帯活動、これらの行動は卓抜した最適を対応である。攻撃と利用に於けるプラグマチズムだが一九三〇年代から四〇年代にかけて最も考へられる現代植民地に於ける攻撃的階級斗争の統一戦線戦術である。我々があの時点のあの諸条件で考へた場合、トロツキーの単純永続革命の道をのり切らなければならぬ。

同時にかかる対応は、コミンテルンのファッショII 民族ブルジョアジーとの同盟とは全く異なることを確認出来る。武装解除した日、米II 英諸帝国主義の侵略と相互の抵抗、暫次の民族ブルジョアジーと地主ブルジョアの米・英帝国主義との癒着、この条件では都市が帝国主義の圧倒的軍事力によつて絶対的制圧されてゐる場合ソ連を利用しつつプロレタリアートの主力を長征を通じて、農民の土地革命のエネルギーと結合し、プロレタリアートII 赤軍によつて解放し周辺から都市へ進撃することは全く中国一國の範圍では適切である。帝国主義戦争の日帝の敗北の間響を通じて英米帝国主義と蒋介石軍プロックに主要打撃対象を永続的に移行せしめ、都市のプロレタリアートを港行的に解放区を根拠地にして組織し、最終的時点での農村からの進撃と都市のプロレタリアートの浮上II 蜂起との結合、

陸のプロック化を基礎としたアメリカ帝国主義者の動揺からのたち直り、モンロー主義II アメリカ大陸主義の確立、国内政策に於ける労働者人民の不满の州分権制に対する解消と合衆國國家の中央集権制の強化を糧料とした、ブルジョア統制経済II ニューディール政策の展望へのプロレタリアートの集約と暴力的毀滅である。ルーズベルトこそ、正に民主主義者II 人民の味方を装った反革命の張本人であつたのだ。

プロレタリアートの分断と敗走の上に築きあげられたニューディール体制は戦時統制経済への転化の基礎であつた。であるが故に、資本の過剰及びアメリカ大陸からの膨張と枢軸プロックとの対立は、アム帝をして、参戦せしめた。そうした彼等は帝国主義戦争の間隙に、過渡期世界の盟主から人と野望したのであつた。

⑧ 日本革命の挫折、国際主義と世界革命戦略の不在II その一國革命二段階的傾向 ④ 独革命と同様に日本革命の総括は決定的である。やはり、日本階級斗争も二七、二九一三〇年代初頭に階級決断を迎えた。その経済過程を簡単に概観すれば、こうである。二七年金融恐慌、二八年田中内閣の金本位制への復讐と世界恐慌への遭遇、山東出兵、田中メモにみられる蒙古I 満州I 中国への侵略計画と各國(特に米)へのソオシャル・ダンピング、労働者階級への全面的合理化攻撃、二九年浜口内閣の成立と金解禁I 田中内閣の諸政策の強化推進及び一層の軍事力強化、これ等を貫く過渡期的農村の疲弊とその深化である。かかる経済過程に対して天皇制ブルジョアジーの攻撃は治安維持法の実施と第一次、第二次、第三次レツド・ページ、上層組織労働者を総同盟の買収を通じてのブルジョアジーの下への再組織、そして全労働者人民への徴兵制を基礎とし

その排外主義の鼓吹の大弾圧である。

共産党のレッド・パージによる解体を通じて意識的前衛党の不在故、プロレタリアート、農民の自然発生的運動の昂揚、それ故のブルジョアジーの支配力の限界の露呈とプロレタリアートの無能力からの農民の半狂乱化と排外主義が徴兵制を媒介に軍部を通じて、上からの三〇年代初頭にかけたブルジョア政権へと変つての農本ファシズムの進行―大東亜共栄圏構想への結集―五・一五、二・二六を経て労働組合の大解散と大政翼賛会への転落を以て最終的の確立として反革命は完成する。では革命的日本共産党は如何に対応したか。

④日本共産主義運動は、ロシア革命の成立とアナ・ボル論争が始まり、労働者は自らを労働組合に組織し始めた。だが労働者の形成と革命運動の開始は直ちに党と労働者階級の醸成と党自身の労働者階級への在り方を山川―榎本論争として現実的の要請した。他方かかる組織論上の問題は、日本帝国主義の膨張―侵略の抑圧として、かつ労働者と構造的矛盾を受け数多くの農民一揆を繰返していき農民自身の限界からの政治的同盟問題を内包していき所の労働者の政治斗争に無産政党創立、前衛と改良主義党派との諸問題、在り方を背後に含んでいく実践的問題であった。この論争は必然であるし、又二五年前後の総同盟と評議会、無産政党の創設の動きとその分裂は必然であった。

この事態の中心は、労働運動と共産主義の結合、前衛党の労働者からの分離の上での結合、日常的意識の外からの指導の必要性、或いは労働者内部、他階級、他階層の特殊利害の追求からの分裂―利益の排外主義への転化に対する綱領と前衛党を基礎としを全人民的国際反戦斗争を通して諸斗争のそれへの結合としてあるプロレタリア

⑤第三の革命の波とその挫折、結果と展望をめぐっての現代革命主体の、現代無政府主義の萌芽、及び現代修正主義の世界的定着―帝国主義戦争の終極から攻撃階級斗争の再度の昂揚、(仏、独、日本、植民地)が巻き起された。

米帝の過剰生産力―資本はこの帝国主義の動揺と波瀾過程を条件に資本輸出を展開し、全世界の市場を独占的に再分割した。かかる米帝による世界市場の再分割は昂揚する階級斗争を鏡子―他帝国主義を自国に屈服せしめるべく、世界反革命戦略と不可分に結びついてきた。かかる経済的法則と政治的要求を結びつけたものこそマイナルブランンド・チャイン・M.S.M.等の反革命援助であり、決して反革命一般に投下されたのではない。他方動揺―崩壊した、資本主義生産とその諸関係を立て直すには、アメ帝の反革命を通して、経済的政治的再建に着手せざるを得なかった。あたかもアメ帝はアメ帝経済の利害と世界ブルジョアジーの利害を一体にした、世界反革命帝国主義として君臨したかにみえた。だがその後の不均等発展の深化―今その第三段階に突入することによってかかる諸現象はもろくも崩壊し、アメリカ帝国主義者の主観的野望は崩れさらんとしている。

各国プロレタリア革命はソ連根拠地と結びつき、動揺―混乱しつつある、帝国主義に対し、世界同時のプロレタリア革命を完遂する必要がある。

勿論アメリカ革命も例外ではない。だがソ連現代修正主義はアメ帝と先行する連合帝国主義と和解し、かつ国内の反動的階級と妥協し、それを放棄し、アメ帝を美化し、プロレタリアートを武装解除し、その斗争をブルジョア民主主義に押し下げた。

かかる内容こそが彼等の革命的冷戦政策の限度である。かくて世

統一戦線、労働者人民の武装、党の合法―非合法活動の結合と駆使等の死活の問題を組織論として集約的に表現したのであった。二五年度時の労働組合、政党の大分裂に対して一歩突き進み、かかる問題を理論的組織的に解決し、来るべき階級斗争期に對し、国際主義、世界革命戦略の確定の上での天皇制帝国主義との対決に向かうべきであった。

⑥とこも日本革命運動の組織論上の問題を一体的に地方共産主義として解決に向かいつつそれは必然的に現代過渡期世界と現代世界革命戦略、現代修正主義は、世界攻撃的階級斗争の全体の鏢の一環に組み込まれることによって、世界的水準の問題に達せざるを得なかった。

かかる問題の所在の中心が一国の権力規定論争に(二七―三二、三三―三六、講座派、労働派の対立)あったかの如くみえながら、実は一國革命の限界の過渡期世界の把握を通じた、プロレタリア主義及び世界革命戦略の確立―世界単一党の世界戦略こそ核心があり、コミンテルンの(祖国防衛)―二段階戦略こそが批判的に止揚されねばならなかった。

日本革命運動の原簿本イズムの分離―結合―山川イズムの方向転換―単一無産政党及び協同戦線党形成論は階級斗争の中心に接近しながら、その進展の基盤を国内権力規定に求めた。

それ故に世界革命戦略―世界単一党建設及び現代修正主義との対決の問題が放棄され、両者は結局、打換主義、赤色主義、解党主義―大衆運動主義へと転落―現代修正主義に屈服してしまつたのだ。

そしてその結果は自然成長的攻撃的階級斗争が国際的に結合されブルジョアジーを對峙に追い込めながら上からの農本ファシズムの軍部を権力にさせたのであった。

界革命は三度挫折し、プロレタリアート人民は帝国主義の奴隷の鎖にばかりつけられたのだ。かかる徹頭徹尾歪められ屈折した世界のプロレタリア―人民を血の海にまぐれさせた。

世界革命の挫折は、その結果を総括することに迫られ、コミンテルン・コミンフォルムは権威を失い、世界単一党は分解した。

錯綜し、複雑多岐なかかる革命の糸を解きほぐし解明する作業を放棄した部分はその後現実をそのまま肯定し、合理化し、フルンチョフトリアテイの現代修正主義を完成させ、現実をそのまま否定したものはマルクス主義に背教する。現代無政府主義―觀念論へと転落するのである。

現代革命主体はそれをトロツキーを手導きにし、苦斗の末から解明に向かい今過渡期世界、世界革命、戦略を確立し世界単一党の創設に向かいトロツキーをも決別し、真に現代M.L.主義を確立しつつある地点にある。

第四章 党の型と実践論

党の型とその実践的活動形態、党内生活(II 実践論)

①我々はプロレタリア世界革命の実践的基準、戦略を獲得した。

実践的基準を獲得した今、現実の階級斗争に對して、はじめて労働者をプロレタリアート(ソヴェト)組織し、かつ党形成する具体的方法を確定する作業に立ち至つた。「革命的理論を以て革命なし」(II a)だ。だがこれはプロレタリアートの壮大な事業の半分を獲得したに過ぎない。

aは「革命的組織を以て革命なし」(II b)に向けて固く結合

され、完成されるし、されねばならない。階級斗争に於て巨大な世界的能力を表現せしめ、飛躍的な戦斗的、実践的M.L.主義が、ブルジョア社会の全ゆる墓場人プロレタリアート人民を抑え尽すには我々は組織論の確定に向かわねばならない。

組織論の確立をもってM.L.主義は完成される。aは実は組織論まで含む。即ち理論が実践の組織的保証を得ることによって、はじめ階級斗争に結合されるが故に、かかる組織論をも内包したものとして実践的、戦斗的M.L.主義は完成されるのであって、aの限りでは決して完成したものではない。aのみに狭めてM.L.主義の世界観を理解する時、政党内の組織問題を解決する場合に実践的には、同時に理論の無責任性II理論主義（その反面での解党主義）を随所に牛み落とす。他方の極に、理論と無関係な組織主義II解党主義を生み落とす。両者は相互に補い合う。

組織論まで含んだプロレタリアートの実践的、戦斗的、戦略的、世界観を基礎にしてこそ、aの意義は増々真理からんとし、同時にbの意義をもそうさせる。それ故に組織的危機はその階級闘争における政治問題と結合され、政治問題I組織問題の序列をもつてのみ解決されねばならないし、又解決される。正に「組織問題は政治問題と切り離されてはならない」ばかり理解されねばならない。

我々は(1)(II)III章を組織論に結束させ、発展過程だが、発展の原理と終極に於いて地上の現実性となる所は完成された全体系をもつて我々は労働者、人民のまえに、不埒の姿を登場させねばならない。

②以上の事柄は、共産主義者の組織の建設からプロレタリア世界革命党への発展過程が、労働者人民の団結体II大衆的階級組織から、ソヴィエト(IIプロレタリア国家)への発展と不可分体であり、換言すれば、プロレタリアートは有機的肉体の如く結合された党と即

第一節 共産主義者及びその組織の登場

「自由とは必然への洞察である」「共産主義とは永遠の理想や基準ではなく、現実の実践である」と述べた、このマルクスの深い洞察は、現代の不毛な客観主義的、機械論的唯物論者には到底理解できなからいことである。かかる不毛な形骸化した唯物論者は、到底卓越した観念論者の敵ではない。

我々がかかる不毛な唯物論者を、帝国主義と、卓越した観念論の粉砕を通じて、同時にこれを打倒しなければならぬ。共産主義者の哲学に於ける唯物弁証法とマルクス主義の党派性とは、今死活をかけて守り抜かねばならない。

さて我々は共産主義者及びその組織を語る前に若干の前提を語るから出発しよう。

共産主義者の形成は決して、論理的歴史のものが整合的に展開されるものではなく、飛躍と急激な後退等の社会的な歴史の論理的な諸関係の自己史のうちにか、総括されたいし、諸個人は無限の過程を経て、ここに飛躍し、到達するのであり、それは個人の思想が社会政治思想に到達する過程であり、それは個人の思想が社会政治思想に到達する過程であり、それは絶対に普遍的に叙述できるものではない。だから、本題に應えるには我々は、歴史的論理的に不整合をまき、その発展の基本点に於てのみ語ればよい。

又、それ以上を望むことは、無駄な不毛な努力であり、観念論への転落でもある。

本題では、対象化され、我々の目的意識性の総括体としての、世界革命戦略に基づいた諸戦術的実践の主体が、如何に理想と実践

自的労働者階級の階級斗争を通した内的発展I確立I消滅の抽象性であるからだ。前者はこれと離れては有り得ない。又後者も前者に對してそうであることを意味する。組織論は労働者階級のプロレタリアート形成の一環である。それら両者を結ぶ現実の階級斗争を索引するものこそ、綱領II戦略である。(生成、発展、確立、消滅の歴史過程II)プロレタリアートは労働者階級と党の結合の深まりの階級斗争の深化からプロレタリア独裁(II世界プロレタリアートの完成)の形態の獲得へと登りつめ、政治的過渡期を経て、死滅の(同時に党の死滅)過程の対自的抽象性であるからだ。

③かかる歴史的、論理的全体過程に於ける階級形成I党形成の諸関係を、かつそれに占める戦略的戦術的位置に於ける有機的連関性は、共産主義者及びその組織の規定性を獲得することとしては定立出来得ない。何故から、共産主義者は抽象的、本質的であると同時に現実的だが、労働者階級は現実そのものであり、そのプロレタリアートへの過程は、共産主義者及びその組織の現実的活動を媒介してのみ形成されるからである。従って、本題の叙述は、かく行われねばならない。

- ① 共産主義者及びその組織の規定性
- ② ①を獲得しての、党の階級斗争に果す役割り、同時に階級斗争の党を規定する客観性と党形成の関連、及び労働者階級斗争の両者の関連を通した、戦略I戦術の総体に於ける位置の規定。

かくしてのみ、対象化された党の現在の現実性における党の具体的諸政治活動は始めて、実践論として指定出来る。だから本章(一)節、(1)共産主義者及びその組織と、その戦略I戦術、(2)戦略I戦術と階級形成I党形成の内的諸関連と発展構造、(三)節、実践論とならねばならない。

存在と意識等の根本的問題を如何に把握し、目的意識性の総括体、世界革命戦略に基づいた戦略的実践にたどりつくかを解明することである。これらのことは、勿論、換言すれば(1)・(II)・(III)章の前提であり、何ら新しいことではなく、巨大なマルクス・レーニンによって語り尽された一部ではない。だからこの叙述は逆M.L.主義の理解と実践への序の糸口を提出するもの過ぎない。

「実践の合目的性と人間認識(唯物論弁証法)」

①人間は労働し、生産手段を作り、他の人間を産出し協業する。人間のあり方は自然成長的社会そのものに他ならない。すなわち労働の材料、道具産物に對して諸個人が相互に取り結ぶ関係にある。しかも一定現実にあるがままの姿、即ち勤勞し、物質的に生産する諸個人、しをがって一定の物質的を、彼等の思う通りにならない諸制限、諸前提、諸条件のもとで活動している諸個人である。

②諸観念、諸表象、意識の生産は、まず最初は直接人間の物質的活動と物質的交通という現実生活の言語にのみこまれている。しかも人間の表象作用、思考は精神的交通は彼等の物質的活動態度の直接的流出物である。かかる人間が人間自身を認識する属性は、自然の人間が自然から生産手段を創り、自然から離れ同時に社会的分業と所有を生み出し、労働が精神労働と肉体労働に分裂する。人間社会が自然に對立する時始めて形成される。

自然の感性から他の人間との交通の要求、展望から生れそれ故意識は社会的産物であるが、過去の感性とは異り、意識は現にある実践の意識とは何か違ったものと思ひ込むことができるし、現実的に思ひ深べていると実際に思ひ込むことが出来る。

この一々人間から意識は世界から解放され八神神論、神学、哲学、道徳等の形成に移ることが可能である。だがそれらも又現実

的社會關係の總體 Ⅱ 諸個人の實踐の反映であり模写の歪んだ形態である。

③ かかる諸個人の社會諸關係により結ばれ、発露する行為の模写 Ⅱ 意識は、もともと人間の生体的肉体的を生理反応であり、現実の社會にありのまゝの人間が、社會そのものの存在と発露の形式に対応せんとする屬性である。しかも、それは社會そのものに適合し、その査証を得んとする屬性である。環境は人間がつくると同様に、環境は人間をつくる。

④ そのことは、換言すれば、人間そのものが、一つの歴史的關係の契機、四つの側面に規定される唯物弁証法的存在であるからだ。これらは諸個人をとり結んである社會の唯物弁証法的感性に他ならぬ。

⑤ だから諸個人は、その諸活動を、特定の環境 Ⅰ 特定の社會 Ⅰ 特定の生産力と生産關係の交通形態の唯物弁証法的運動法則に合目的化せんとする。

唯物弁証法的認識は、「諸個人」 Ⅱ 人間の社會の運動法則の模写された最も正確な表象である。

⑥ しかし、かかる實踐の合目的性はつねに現実の制約とそのイデオロギーゆえに、はばきられ、觀念を生産し、同時に再度の實踐への必然は、それを解體させる。かかる断続、飛躍、成長、後退等の物質生産の逆統過程は、偶然的に諸個人 Ⅱ 社會の運動法則そのものを模写し、これによって押え直された、實踐主義的意識的實踐が開始される。

もはや、単に經驗主義的を即自的合目的的實踐とは異なる弁証法に従ったこととの、實踐主義的に対応せんとする實踐である。即ち、實踐が結果に於て証明されんと欲するような實踐である。

る意識である。このことは、革命的實踐主義ともいえる性質のものである。かかる目的意識性は、諸個人の實踐を帝國主義的世界的同時打倒の、一貫した路綫に統合し整理せしめずにはおかない。

まさに人間の行為に於ける合目的性は、ブルジョア社會の歴史論理的運動 Ⅱ 唯物弁証法 Ⅰ 史的唯物論及び経済学、上部構造、イデオロギー形態として模写せしめ、かつこれを押え直す人間は、その合目的的實踐主義的實踐と革命的實踐に転化せしめるのである。

Ⅲ 共產主義者の戰略 Ⅰ 戰術的結論とその組織の獲得 Ⅱ 武装された共產主義者 Ⅱ 前衛

① 目的意識性をもちた革命的實踐は、全ブルジョア社會と根本的に非和解的のものとなる。かつ共產主義者は論理的なものと、歴史的なものとが初めて労働者人民の未来に於て論理と歴史との整合された姿 Ⅰ 現在では即自性そのものを Ⅰ 現在の實踐のうちには現する。それ故共產主義者は、即自的労働者人民の革命的前衛として存在される。かかる革命的實踐をおし進める目的意識性の諸力の集中は世界革命戰略である。

実はこれこそが、対象そのものの合目的的實踐を呼び起す歴史論理的な運動法則の模写 Ⅱ 唯物弁証法、史的唯物論、上部構造とイデオロギー形態の分析等の全模写の集中であり、総体であり、最高次の位置を占めるものである。

世界革命戰略こそ、対象の最も正確な重じようの模写なのだ。共產主義者の党派的目的意識性は世界革命戰略の正否にある。

それ故、労働者人民の正しい戰略の下での戰術的實踐は、その内的運動法則に結びつき、彼らを党のまわりにひきつけ、彼ら自身を運動の過程で階級形成をはかり、同時に共產主義者に対象を認識させ、目的意識性の基礎は一般の沼地的思想や諸哲学であってはなら

Ⅲ ブルジョア社會に於ける二重の「疎外」及び対象化と現実のあるがまゝの疎外の登場 Ⅱ 目的意識性の獲得 Ⅱ

① 即自的合目的的實踐を實踐主義的實踐への転化は、ブルジョア社會の人間に於て最終的に完了する。このこと自身も、社會的生産力と生産關係の發展に規定されて、同時に市民社會の階級への分裂と階級対立とを以て、唯物弁証法の法則が最も社會的に、論理的な姿を以て顕在化することに起因している。

② 實踐主義的實踐を通じて、ブルジョア・イデオロギーと、模写された意識との対立は觀念論と主要に實踐主義、プラグマティズム（經驗主義）とを生み出さずにはおかないが、現実の諸個人の運動の必然と、再び現実からの制約、觀念の解體と再編の繰り返し過程、現実と觀念とからの二重の疎外の発現形態の再生産過程の、無限の無數の過程は、遂に思弁から科学的態度と合目的性を飛躍させる。

↓「思弁の終るところ、社会科学が登場する」（マルクス）。これらに対し、唯物弁証法は人間そのものの模写として、諸觀念を設定するが故に、實踐主義的合目的的實踐とそのありのまゝの制約は、ありのまゝの社會とイデオロギーの分析として遂に史的唯物論、マルクス経済学（資本論）の確立、上部構造とそのイデオロギー形態の分析と批判、及び労働者階級の発見とそれへの結合と形成へ向けての實踐へと飛躍・発展する。

かかる目的意識的實踐と、唯物弁証法、唯物史観、経済学、上部構造とイデオロギー形態の押え直しと、ありのまゝの現実そのものの科学的分析をもつての再び實踐の繰り返し過程は、過去の自然成長的合目的的實踐、唯物弁証法に従った實踐主義的實踐のこれらとは全く質に於て異なり、それらから生まれ、その發展でありながら、より高次である諸個人の世界的意識と社會そのものの必然を模写す

ない。意識性をマルクス主義の原理に支えられた戦い Ⅱ 綱領に紳化させる。

論理性と歴史性との不整合は、疎外論や認識論、資本の把みとり等の主体性論ではなく、それ自体で完結するならば宗教となり、實踐的には解黨主義となるがマルクス主義の原理とそれを総括する戰略の下での革命的實踐こそが、対象への自己の現在の制約 Ⅱ この不整合を克服するのだ。この實踐が、またかも社會と対立する「諸個人」の如く觀念させ、現実からと二重に疎外される事柄を克服するのである。だが、かかる戦い Ⅰ 戰術的實踐は、ブルジョア社會と絶對的に相容れぬ敵對關係を形成する。だからこそ革命の前衛は、権力から集中攻撃と弾圧を受けるのみならず、現象的には労働者人民にも敵對するのである。

だがそれは、プロレタリア人民の個々ブルジョア的人間と敵對しているのだから、決して社會的歴史的プロレタリアートと敵對しているのではない。

共產主義者の組織した組織は戰略を基準に対象変革の戰略戰術的實踐に於て固く團結しているが他方でそのことは現在の労働者人民のブルジョア性に、その實踐の政治過程において、敵對することから、全ゆるブルジョア性の流入を阻む為には、鉄の規律が必要であり、前衛黨は常に全ゆる意味で武装されていなければならぬ。

他方で党内規約は實踐を通じて必然的に流入生起する小ブル的傾向を党内斗争の形式を保証しそのことによつて規律はより生きた実在的意識をもつて確立され増々、自らを紳化し、労働者と深く結合しかがらぬその日常性との閉鎖で全面的に彼等と分離するのである。そして自らの紳化を基礎に、戰略、戰術的實踐を媒介に増々深く労働者と結合しプロレタリアートを形成する。

四、戦略、戦術による党の必然的分離と一層の結合、党内共産主義者の実践意識純化

諸斗争に於ける諸戦術の戦略的推進は、その同一の事柄を、組織的には、労働者のブルジョア性からの増々の分離とそのプロレタリア性との増々の深い結合を獲得することとして表現する。

共産主義者の諸戦術実践が戦略的に推進される為には労働者大衆のブルジョア性からの絶対的分離した組織を通してのみそれと固く結合し媒介されてのみ可能である。

ブルジョア社会と絶対的に相容れぬ世界革命戦略の下での革命的実践は、プロレタリア革命党の鉄的存在を通してのみ可能であり、それと切り離してはありえない。その組織的保証を抜きにした場合、その戦術的実践は革命性をもったものであり孤立し一擧主義に結果し、他方で共産主義自身に戦略への疑問と小ブルジョア改良主義への転落を生み落すのである。

又世界革命戦略の無自覚性（誤りの場合）は組織そのものを形骸化し、官僚化させ、共産主義者の実践的意識を曇らせ、厚やけさせ、哲学や思想に招換させ、その観念性はブルジョアのイデオロギーへと結節され、最終的に組織の分裂と解党に結果するのだ。

これ等の戦略的実践と、労働者からの分離した組織不可分一体制事柄の本質的意味は戦略一戦術的今日の実践が、ブルジョア社会と根本的、絶対的に相容れぬ性格そのものの組織的表現である。

前衛党の鉄の規律の必要性は全ゆる意味での党の武装自身で共産主義者にとって外的なものではないブルジョア社会の模写の総括としての世界革命戦略一戦術的実践の目的意識性はその自他として終らず、組織的保証にまで、総括され共産主義者内在的に受け入れられることを意味する。

退に連なる性格のものである。

このことば次の二つの問題である。即自的を労働者階級の斗争に對する党の諸政治活動のあり方（労働者階級の運動に對する党の運動のあり方とその結び）及びそれを媒体にした党内に於ける前衛相互の関連である。その定在の仕方（現実的には各部署、各級機関の諸機能質、配置etcである）

この命題に於けるには逆に指定された党から働きかける対象である労働者階級或いはプロレタリアートそのものの運動が發展形成一成熟等を通して規定性そのものを定立する必要がある。又党が指定されたが故に、労働者からソヴェイト国家プロレタリアートへの形成一發展一確立過程はプロレタリア革命党と結びついて始めて表現可能となるからだ。

即ち本題は第一節に於て展開され、最高の階級意識戦略に下ついた、実践的意識を獲得した共産主義者の組織が、第四篇に於て、その形成の歴史的論理的発展そのもの自体から、党のブルジョア社会と労働者人民に對しての在り方とそれを通じての党内に於ける共産主義者のあり方を指定した二つの事柄を、階級形成との関連でより論理的なものとして完成させる事柄のことである。

我々は四章二節によって産業資本主義、その發展転化としての帝国主義の確立過程を通して共産主義の世界史的排出及びその組織的戦略一戦術的実践を、

(1) 人間活動の合目的性とその人間による表象、正確な模写が唯物弁証法であり、

(2) 唯物弁証法の認識を通してメンゲルス・レーニンは共産資本主義帝国主義に於て、階級斗争の世界的、多種多様な経験を通して史的唯物論、経済学的确立と上部構造、イデオロギー形態の分析とその批判、

ブルジョア社会の模写の総括を戦略一戦術的実践と対象化した共産主義者自身、実践を通して現在の労働者階級の階級形成過程に於けるブルジョア性に自己自身が規定される過程の意識であることまで対象化するが故に、自ら党の鉄の規律と他方での党内民主主義から党内の存在様式を通してのみ革命的実践の保障と、自己自身の戦略的意識性が純化されることを対象化するのである。

共産主義者の組織はブルジョア社会の一切のブルジョア性から分離した組織である。

党の社民等への加入戦術の採用やローザやその亜流の社民自身の自己展開的發展を通しての前衛党の分離等は、自己自身の戦略的階級意識の不在と小ブルジョア性の表現にすぎない。

第二節

労働者階級の自然発生性と党の同時意識的指導一党の大家からの分離と戦術を通じた実践過程の外部注入による場合

このことは今深く扱え直され、理解されねばならない。

この数年増々広く深く労働者階級の形成の新たな段階が到来し、それに応じた、世界革命戦略の確立と不可分一体に先進的諸国の指導の限界の露骨と、内部の分解、その転布を通して必然的党の必要性と、その作られるべき党の型が問題にされている点に於いてかつ革命戦略と結びついたボルジュウキ対メンシユウキ、或いは福本、山川論争の我々をも含んだ未整理故に決定的である。

正にボルシユウキの革命の実現とその敵対者の革命の敗北として鮮明化した問題に解答が与えられないことは、我々自身の革命の敗

ブルジョア社会の根底的粉砕プロ世界革命と共産主義社会への置き換えの過渡プロレタリア独裁の共産主義理論へと総括した。レーニンは革命運動を戦略に支えられた前衛党建設をもって遂行する必然性、かつ実践することによってマルクスを基本的に完成せしめた。

(3) 革命的实践の目的意識性（主体性）は、革命理論とその理論的、組織的総括プロ世界革命戦略及び、党によって保証され、共産主義者は実践の今に於て、歴史的、論理的なものを整合し、労働者階級の戦術となることを理解した。

さて、かかる時点から、労働者階級を語ろう。

①労働者階級の共産主義的意識の契機一萌芽

二〇世紀初頭のロシア革命運動を、労働者階級の自然発生性と共産主義者の目的意識性について選させ、かかる論争はロシア階級斗争に於ける実践的問題にたばかりでなく、西欧のそれや、戦前一九二〇年初頭の日本階級斗争に、山川一福本論争に於ても、革命運動に於て死活的問題であった。しかも、このボルシユウキ・レーニン主義とメンシユウキ（マルトフ）トロツキー、ローザ主義との格闘はこの世に階級斗争がある限り、永遠に繰り返される性格である。

我々はこの論争を避けて通ること出来ないし、又、今その問題の火急の決着が要請されている。

決着をつけよう。

(1) 帝国主義の経済法則と帝国主義社会は階級斗争を広汎に呼び起こすし、労働者階級人民に帝国主義とブルジョア社会に對する直視的批判を通しての社会プロ共産主義社会を自然発生的經驗的に願望せ

しめずにかかぬ。帝國主義のブルジョア社会は、貧困、収奪、政治的無権利、生命の危機、没落、戦争反動と暴力等呼び起し、労働者人民を苦しめ抜く。このことは世界史的経験、特に産業資本主義以降の無数の戦争、ブルジョア支配思想の誤謬、労働者の抑圧、収奪国家権力の暴力性、収奪及びブルジョアジーの階級支配の道具としての役割、革命斗争の開始と挫折、に開き、かつ資本主義生産の土台と切りはなされ、ブルジョア改良主義の破産とブルジョアジーとの癒着の事実、そしてロシア革命の勃発に労働者人民のありのままの現実と歴史の経験がそうさせるのである。

そしてかかる帝國主義の粉砕と国家権力の破壊、インフレ、プロ独の表現の自然発生的要求は、帝國主義の矛盾、拡大と混亂、世界市場の再分割と政治的対立が深化すればする程、拡大される。

正に帝國主義そのものが、労働者人民に帝國主義とその社会の批判、共産主義の確立の自然発生的意識を生みつけるものである。だが、かかる自然発生的直感的、即自的意識のみでの階級斗争や革命斗争が数多く敗北し、労働者人民の團結を弱め、分裂せしめ、ブルジョアジーと和解することも又、経済的事実である。

自然発生的認識は、決して計画的を全ゆる斗争を無目的を自己犠牲的プロ革斗争に、機械的、自然成長的に発展させはしない。そればかりか自らの斗争を既成の体制への妥協と屈服にせらせてしまう。労働者階級は自らのブルジョアジーと権力の闘いに、突き動かされている意味を、自ら科学的に解明することは出来ない。その闘いに突き動かす精力について、経験的直感的にしか把握取れない。

レーニンは何をなすべきか」に於て「自然発生性は目的意識性の萌芽である」といみしくも述べている。

その経済学は、ありのままの資本の運動法則を科学的に分析し模写することであつたし、一切の上部構造の矛盾が土台に於て形成されていることを、革命的にバクロし、その土台を共産主義に主体的に置き換えること、主体的共産主義活動の必要性を結論づけたのであつた。

資本主義が自動崩壊することを経済学で観念的に表象することは全く誤ちであり、犯罪的であり、革命運動の一切の武器解除をもたらし。資本主義は、プロレタリア革命党と労働者階級が深く結合し、暴力的にその上部構造を打倒し、生産力の発展段階にみあった社会主義経済を確立する以外には決して打倒されず。

我々は今一度、労働者階級の自然発生性について、より詳しくたづねてみる必要がある。

労働者階級の運動と、その意識との関連についてである。

「経済的發展と階級斗争とは、社会主義的生産の前提条件をつくり出すだけでなく、更にこの社会主義的生産が必然的だという認識をも直接につくり出す」。「共産主義的意識はプロレタリア的階級斗争の必然的を直接の結果である」等の誤ちはどこから来るのか。

それは次の三つの点にある。

(イ)労働者階級が資本主義的生産にしばりつけられていること自体、(ロ)イを基礎にしてブルジョア社会とその上部構造、ブルジョア国家があることからのブルジョア・イデオロギーへの非武装。

(ハ)ブルジョア政党、小ブル改良主義政党のブルジョア的政治活動と化し、革命政党の活動基盤が限られ、狭いこと。

以上である。ここでは(イ)を記述すれば自然発生性は規定し得る。労働者階級の自然発生性とその意識との関連は、(イ)によって規定し得るといふことは、以下次のことをはっきりさせればよいこと

プロレタリアートの共産主義実現の意識と準備は革命的インテリゲンチアとによって完成され、労働者の先進的部分を通して、労働者に外部からたらされることを結論している。

しかも、労働者の自然発生性と革命的インテリの革命理論形成も等しくその歴史的な社会に於て発生しかつ別々の場所から独立に発生しかつらる、一つのものとして固く結合するし、結合されねばならぬことを指摘している。

これは全く正しい。自然発生性は共産主義と共産主義運動の萌芽であり、前者の後者への飛躍の契機であり、その基礎である。

萌芽の契機は、それ以上でも以下でもない。決して共産主義への自然発生的、経験的認識は、共産主義理論そのものでは無い。

これを同様に捉え、その発展が自然に連続して共産主義運動に発展するかの如く捉えるところから一切の経済主義、改良主義、組合主義政治、自然成長革命論とその組織論が生れる。飛躍、発展、転化は即ち萌芽と契機、基盤を科学的に捉えた労働者の外からの実践活動に於てのみ実現されるのだ。

外からの別の要素と述べたがこれは単に別の要素ではなく、その自然発生性そのものの一切を模写した要素であり、換言すれば労働者階級の経験、直感を論理化したものであり、労働者の日常意識にブルジョアイデオロギーからみて、全くそこからなのである。

帝國主義は、それが存在する限り、自動崩壊するわけではなく、その経済法則は無限に続くのである。

M・E主義の経済学は自動崩壊から自然に共産主義が形成されることを証明しようとしなかつたし、又、されるはずもなかつた。

でもある。

階級を構成する現実の諸個人(歴史的現実の特定の環境と特定の条件、制約をもつた現実の諸個人、諸個人の観念的意識ではない。一が、市民社会(ブルジョア社会)の中での現実の矛盾を、彼等自身を取り結んでいる諸交通形態—諸関係が、その資本制分業関係に総括されつつ、階級斗争としてブルジョアジーと国家権力との対立—政治として展開されることと、現実の物質生産を行っている彼等諸個人と意識との關係を通して事柄とを、総体として関連付ければよいことである。だから、このことは換言すれば①歴史のかまど、今の市民社会の根本的諸個人の歴史性と論理性との矛盾の指定と資本制分業生産様式を通して階級対立への環元転化、②これら二つを通した、市民社会と国家の関連に於ける政治、③以上の上に立つての、市民社会、国家、共産主義の規定による、実態からの意識の指定をして終る事柄の事である。

①市民社会の運動の基礎は種々分業生産とそれを総括する社会的分業—資本制生産によって成立している。

階級を構成する諸個人の、現実の特殊利害(主要に「個人」—家族)は、諸分業によって、諸個人の活動と他の人間との協業—諸交通形態によって取り結ばれている所からの、共同利害と永続的非和的に対立する。

このことは、人間が自然から生産手段をもつことによつて離れ、自然を加工し、同時に人間社会を作り、それを分業と所有とに於て、分裂させたところにもとの起源をおく。かつ精神労働と肉体労働との分業—意識の、何か実態と離れたところの一人歩きができることこの起源である。この意識も分業社会の成立と、そこに於ける、特殊利害(現実の極めて直接的な利害)と共同利害との対立と、共

同利害の國家への移譲にあり、そこから社会の特殊利害と共同利害との分裂が自らの利害とはよそよそしい國家の定立によって存在から意識の幻想性が独自の、意識において与えられる。

実はこの幻想性も分業による特殊利害と共同利害との解決されなす対立の表象である。

この現実の特殊利害と諸共同利害との非和解的永続的対立は資本主義的分業とその國民經濟の定立からの、資本主義的分業諸階級に媒介されし諸個人の特殊利害は階級利害と非和解的対立を持ちつつし諸階級の特殊利害の國民的共同利害との非和解的基本的対立關係に還元されている。

ところが労働者階級の諸個人の利害は、自らが資本制分業社会にあっては生活すること自身、自らの労働を商品化する以外に生きられたい存在であり、かつ資本制社会の諸力の基礎に剰余価値を生み出しながらも、その反対に窮乏させられ、ますます社会から疎外され、政治的には機本的に抑圧されているが故に、自らの諸特殊利害を階級的資本制生産とブルジョア社会、ブルジョア國家と絶對的に対立し、その打倒の階級利害にこそ自身はあくまで階級利害と対立しながらも、一從属させられる客観的基礎をもっている。彼の階級はそうではない。彼らの特殊利害と諸共同利害は國民的利害と対立しながらもプロレタリアートの階級利害に從属しなす限り、永遠にバラバラで階級利害に統合されなす。

労働者の客観的を団結の基礎は資本主義の生成・発展・没落（經濟法則としての輪ね、だから再び生成・発展……）に一般的に応じて拡大される。

ところが、資本と賃労働との關係に於ける二律背反的關係（かかる關係があるからといって剰余価値が、二律背反的に分配されるわけに拡大される。）

全く解決せず、その対立を一層深化せしめるだけである。

かかる分業社会と國家がもつ、永遠の絶對的運命こそがプロレタリアートの運動とその意識を規定する。

分業社会の諸階級の諸個人は、分業社会に実態的基礎を置き、國家をつくり、かかる社会と國家との關係に於いて幻想共同性を觀念させられる。幻想の実態的根拠を見きわめた者であれ資本制分業生産と諸分業そのものからの特殊利害と諸階級利害、諸國民利害との非和解的対立にあり、現実の分業社会がある以上、やはり幻想するものである。

かかる分業社会の人間屬性は、ただ彼はその幻想を、実態との關係で究められ、ありのまま実態との斗争を実施することが出来る。従って、自己の特殊利害、あるいは階級利害を「ないものがある」としての「普遍利害」を掲げし國家をめぐって、貫徹せんとする政治を体現し、全ゆる階級斗争は必然的に國家をめぐって斗われるが故に、政治斗争であり、全ゆる諸問題の諸個人は政治的である。

他の人間が他の人間を抑圧し、從属せしめることが、必然的を冷酷をブルジョア社会の政治の本質なのだ。

諸階級の諸個人は分業制故に現実の実態を、その意識に於いて、現実の社会諸關係そのものに規定されて幻想に觀念する。

ブルジョア社会は、資本制分業生産様式に基礎を置くことによつて、他所得層を統合し自らを支配階級として組織し、普遍に國民利害を満たすかの如く振舞い、國家を占有し、諸國家機構に諸制度、市民社会の諸制度、実け自らの特殊利害を満し、諸階級の諸個人の諸物質的生産以外の他の表象、宗教、道德、処世訓、「人生觀」芸術、科学、哲学等を、自らの國家、法、支配思想のもとに集約し溶解させる。

けでなく、（その反対に労働時間の長さに一般的に比例し、労働者けより低賃金にせしめられる）に於ける資本家と労働者は、自己矛盾した二律背反的關係に兩者とも陥められ、かつ資本自身の価値法則に自己増殖運動は、兩者をも物本的に支配する。

この自己矛盾的資本制分業の自己矛盾的二律背反關係と資本の物本的自己増殖運動こそが、労働者の諸特殊利害をあたかも満足させ、それを総括しているブルジョア國家が、あたかも共同利害を表現するかの如き幻想を発生せしめる根拠である。

だから労働者階級は、自己の階級利害のもとに、諸個人の特殊利害を從属せしめると同時に、他方で自らの分裂をも永続的に分裂をも形成する基礎を資本主義的分業そのものから与えられている。

これらの第三者のブルジョア社会の利害に對して非和解的に対立しながらも、他方で自らの階級利害と諸個人の諸特殊利害も対立している内的構造は、現実には起する階級斗争に於いて党の外からの目的意識の指導と結合してはなす限り、資本制分業生産様式の土台からの歴絶と國家権力の打倒、共產主義の樹立は認識しえなすし真のプロレタリアートの団結は形成されなす。

②しかもこれらの事柄はブルジョア社会と國家との關係に二重にダブリ、及び諸階級の諸個人の實體とその意識において実現する。

ブルジョア社会に於ける諸分業と財価の私的所有を通した、諸個人の現実的利害、その多種多様を組み合せは資本主義分業生産關係に還元し媒介されながら階級的特殊利害と國民的共同利害として非和解的に対立する。

このことは市民社会から生れ、にもかかわらずその物質生産の土台を打ち壊さなす限りに於いて現実的、今の解決の要求を國家に要求する、だが國家はまたか、解決するかの如く、振舞いながらも、

労働者人民は自らの本来的を物質的表現の全てを通してブルジョアイデオロギーに融和し溶解せしめられ、ブルジョアイデオロギーに外化される内在性をもっている。

だからこの共同の利害は、単に表象のうちに入普通なものとしてとしてあるのではなく、何よりもまず、現実のうち相互に分業しあつてはなすことによって、依存しあつてはなす諸個人の關係として実在している。

従つてM.E.主義は、ブルジョア社会の分業との關係で、ブルジョア社会とブルジョア國家を規定し、かつ分業生産の基礎を打砕くべく登場した労働者と深く結合し、分業を歴絶した諸個人が自由に結合する社会に共產主義の確立に向け、根底的きプロレタリア世界革命を貫徹する。だから、我々は市民社会の屬性に擬似共同幻想性を生み出す階級社会、ブルジョア國家を階級対立の非和解性の産物であり、ブルジョア社会が組織した武装した特殊を集團及び収奪と支配の道具として規定する。

「市民社会は生産諸力の一定の發展段階の中での諸個人の物質的交通の全体を包括している。

それはある段階の商業と工業の生活全体を包括している。そしてその限りで國家と國民を越える。たとえ他面でも再びそれが外側に向つて國民性として現れ、外側に向つては、國家として再編されなければならぬにしても。」（「ドイツイデオロギー」マルクス）

まさに帝國主義は、國家と國民を越えつつ、同時にプロレタリアートと「國民社会」から、地方的な人間から世界市場を媒介し世界史的類の人間への過渡的プロレタリアートとして、登場させ始めてはなす。かくしてまさにレーニンの提起した自然発生性と共產主義者の目的意識性の規定及び生産主義の意識は外部からのみならず

ることは証明された。従って、ブルジョアと労働者の自然発生性の前に押縮する小ブル改良主義諸党派と非和解的に闘い、労働者をプロレタリアートに解放すべく、党の役割と党内生活を明確にしなければならぬ。

② 党の階級斗争に果す役割りと、党内生活のあり方
党の階級斗争に果す役割りと、党内生活のあり方
党の階級斗争に果す役割りと、党内生活のあり方

今、労働者人民の自然発生性が規定されたが、故に明確にされ得る党の階級斗争と果す役割りと党内生活のあり方
今、労働者人民の自然発生性が規定されたが、故に明確にされ得る党の階級斗争と果す役割りと党内生活のあり方

党は真にその普遍性を代表する所の最大限綱領
党は真にその普遍性を代表する所の最大限綱領
党は真にその普遍性を代表する所の最大限綱領

そして労働者と小ブル改良主義の党派のブルジョアイデオロギ
そして労働者と小ブル改良主義の党派のブルジョアイデオロギ
そして労働者と小ブル改良主義の党派のブルジョアイデオロギ

1) 対して全ゆる武装を獲得し、それから分離した組織に於いてこ
1) 対して全ゆる武装を獲得し、それから分離した組織に於いてこ
1) 対して全ゆる武装を獲得し、それから分離した組織に於いてこ

即ち労働者人民が今から未来へ、部分的場所性から世界性へ、部
即ち労働者人民が今から未来へ、部分的場所性から世界性へ、部
即ち労働者人民が今から未来へ、部分的場所性から世界性へ、部

全ゆる自然発生性の克服とイデオロギの流入に於いて、鉄の規律
全ゆる自然発生性の克服とイデオロギの流入に於いて、鉄の規律
全ゆる自然発生性の克服とイデオロギの流入に於いて、鉄の規律

各部局各機関の活動は中央集権性と民主集中性の様式と鉄の規
各部局各機関の活動は中央集権性と民主集中性の様式と鉄の規
各部局各機関の活動は中央集権性と民主集中性の様式と鉄の規

保持する事、この限りに於いてのみ戦略的展望からの「計画」とし
保持する事、この限りに於いてのみ戦略的展望からの「計画」とし
保持する事、この限りに於いてのみ戦略的展望からの「計画」とし

公然と人民裁判を提起し、人民の裏切り者に階級的制裁を加え、そ
公然と人民裁判を提起し、人民の裏切り者に階級的制裁を加え、そ
公然と人民裁判を提起し、人民の裏切り者に階級的制裁を加え、そ

真に全人民的政治斗争これが、個別利害と共同利害の根本的分裂
真に全人民的政治斗争これが、個別利害と共同利害の根本的分裂
真に全人民的政治斗争これが、個別利害と共同利害の根本的分裂

これ等の事が労働者人民に受け入れられる事は正に労働者階級
これ等の事が労働者人民に受け入れられる事は正に労働者階級
これ等の事が労働者人民に受け入れられる事は正に労働者階級

さて以上の自然発生性とその闘い、それを共産主義に飛躍させるた
さて以上の自然発生性とその闘い、それを共産主義に飛躍させるた
さて以上の自然発生性とその闘い、それを共産主義に飛躍させるた

第三節 党の具体的実践活動

我々は(1)共産主義とその組織、(2)自然発生性に対する党の目的意
我々は(1)共産主義とその組織、(2)自然発生性に対する党の目的意
我々は(1)共産主義とその組織、(2)自然発生性に対する党の目的意

① 権力斗争、理論斗争、党組織斗争、党純化の四つの活動の諸規
① 権力斗争、理論斗争、党組織斗争、党純化の四つの活動の諸規
① 権力斗争、理論斗争、党組織斗争、党純化の四つの活動の諸規

① 権力斗争、理論斗争、党組織斗争、党純化の四つの活動の諸規
① 権力斗争、理論斗争、党組織斗争、党純化の四つの活動の諸規
① 権力斗争、理論斗争、党組織斗争、党純化の四つの活動の諸規

② 党派解体論と政党内閣統一戦線

現実の斗争はブルジョアジーと国家権力との闘いであると、同時に大衆及び先進的集団をして党の提出する戦略の下での計画的戦術を、支持せしめ、かかる党の方針と主張に対する、小ブル改良主義党派との共通の当面に於ける共同斗争II統一戦線の成立と党派斗争の過程である。だから党は統一戦線と党派斗争に原則と一貫性を与えねばならぬ。

共同斗争は（それが長い短い本質的問題ではない。又、他政党I分派I我々に近い、あるいは遠いも同様である）は、与えられた条件と環境の中で党が確認する限りに於て一定の行動の統一II共同行動である。

だが共通の敵に、共同して闘うことは、全く党と他政党の戦略やその斗争に於けるスローガン（位置付け）が同じであることを意味しないし、反対にそれ等をめぐっての理論斗争のし烈な過程である。だから党は統一戦線に於ける諸行動の協定を守ると同時にスローガン、位置付けの相異を鮮明にし他党派の理論斗争を通じて党派解体戦術を意図的に追求しなければならぬ。このことを通じてこそ、ブルジョア意識から解放し、大衆と先進的集団を鍛え、革命的団結を与へ、党のまわりに結集し、同時に統一戦術を通じてソヴィエトを形成することが出来るのである。

(三)権力斗争の革命的敗北主義による追求は二通りであり、両者の結合によってなされる。

即ち、政党の直接の当核の斗争の追求であり、他方で、闘争の大衆組織を通じての斗争の追求の二つである。

今こそ前者の直接の政党活動（斗争の直接の指導、政治集会、国會議員のバクロ斗争「青年同盟」「SSU」等の武装斗争等）が徹頭徹尾強化されねばならぬ。

限縮・プロ国際主義のスローガンに総括される完成された全体系を徹頭徹尾展開されるものでなければならぬ。

従って、同志は完成された全体系を深く把みとしていなければならぬ。

だが、その全体系とそれを総括する主張は、現実の諸条件・環境を考慮に入れ、その環と深く結びついて斗争されなければならぬことも又自明である。

(六)その理論斗争の基準は、全国政治新聞を基礎に、その下に統轄され、序列づけられた、各級、各部局機関紙・パンフ・ピラ・アジテーション等である。宣伝車・レコード・テープ・政治集会・街頭演説、全ゆる近代宣伝の多種多様な諸手段が工夫されねばならぬ。かかる理論斗争の水準と、その現実性は全国政治新聞にかかっている。従って党の宣伝局I編集局に対する指導は決定的である。

③△党組織斗争▽

(1)かかる権力斗争、理論斗争による自然発生の闘い、必然的に先進的集団をして、現実から未来を、部分的な地方組織から世界史的視野を、かつ、自らの意識に於て斗争にかかり合う意識と転倒させ得る。党はその意識の転倒を完成された体系と、その総括II戦術、プロ国際主義を提出し、彼らを把え直さしめ、種々を経過を経て、最終的にオルグし、党へ結集させる。

(2)このことを党が放置することは、二重に犯罪的である。かかる共産主義者を党に結集することによって党を拡大することを放棄することに於て、戦闘の大衆組織へ彼らが還り、党の戦術I戦術的実勢の持ち込み、大衆組織を強化せしめることを放置することに於てである。

後者は、労組、自治会、全学連、反戦、社研等である。

ここでは(六)の原則と認識が最も現実に追求されたい限り、小ブル改良主義に党自身が転落する。

この際大衆組織にある。政党人けみかも無党派であるかの如く振舞うがこのことは全く犯罪である。

行動の統一の必要性和政治的意見理論斗争の必要性を前者に従属せしめ軽視しそうしき限り、大衆組織の団結が保持出来なと思ひ込んでいる改良主義思想である。これも又自然発生の闘いの一形態である。

両者の活動の結合に於てのみ、斗争は自然発生の闘いを克服する。

何故なら大衆組織に於ける政党人の行動の統一からの一定の制約に対し、それに制約される直接の政党活動の保証は、その制約を後者と結合しつつ取り扱うからである。

②△理論斗争▽

(イ)戦術の下II計画的諸戦術方針の追求は不可避にブルジョアジーと権力からのイデオロギー攻勢を受けるのみならず、その下での大衆の動揺とその改良主義党派とその改良主義イデオロギーとの結合の過程、正に自然発生的に斗争が提起するのに対して、(一)の権力斗争を擁護すべく、それと固く結びつき組織的理論斗争の必要性は痛切である。この理論斗争を通じて大衆I先進的集団は自らを教育する。

全ゆる一切の党の権力斗争、統一戦線II党派解体戦術II党派斗争に一体に、結合され理論斗争が準備されねばならぬ。

(ロ)かかる理論斗争は、当面の要請や意識の段階、相手との政治的思想的距離等の諸条件に全く規定されるものでなく、戦術・最大

④△党純化斗争▽

(1)戦術の下での計画的実践は、同時にその総括と把え直しからの、新たな計画としての、種々の理論把握とその総括II戦術I綱領Iプロ国際主義、実践論自体をヨリ深く把え直して行く。

この過程は、党が労働者、人民と深く結合すればするほど、党内総括過程での、これとの闘いは自らを純化し鍛え、ヨリ正確で深い

(二)この把え直しを計画的に全国新聞を基礎に学習会・党学校・各級各部局会議で行なわれねばならず適速・諸党的政治理論機関誌が必要である。

二△四つの活動の有機的結合II全国政治新聞▽

自然発生的Mに方向を与え、それを味方の誤謬からも敵のワナからも守る能力を育て、知識ある労働者や革命的インテリゲンチヤですらもが迷い込み拝跪する巨大な深さと広さの自然発生の闘い、そしてつまるところの経済主義を克服し、全体の政治生活の全ての側面、種々の階級が種々を動機で行う抗戦や斗争の全ての試みを、系統的に日常的に評価することとしての全人民的政治宣伝、煽動によって、諸同志が全国的いや全世界的状況を知り、激動や積極的斗争のありとあらゆるひらめきを総括し、普遍化せしめ、即ちの斗争をたゆみなく、有機的に結合し、深め拡大するその導きの糸は全国政治新聞である。

これは全人民的政治煽動、暴露、全国的政治状況の統合、煽動と鎮静の交代に於ける柔軟性、政治活動全体を形成する深部の有機的鎖の、当面の環からそれをたぐり出し、諸斗争の自然発生の闘いを克服

し全人民的政治斗争に合流し、戦略の下に、全ての革命勢力を統合する媒介は明白に全国政治新聞である。これによって戦略の下に四つの斗争は結びあわれ、各都府、各級機関の様々な活動は生き生きとして豊富に展開され、全体的政治的視点を常に獲得する。

我々は自然発生性への押を克服し、戦略に向け、全階級斗争を飛躍成熟せしめ、党形成し、党自身を純化し、増々労働者人民と深く、広く結合していく事、意識性の横杆こそ全国政治新聞を基礎にして出来ることを理解しなければならぬ。

かかる世界革命戦略を基準にしての全国政治新聞を媒介に全世界的政治動向の整理併合と全人民的政治宣伝、煽動に結びついての権力の対極に権力斗争、理論斗争はより大衆的階級斗争をプロ独国家権力へと発展し、かつその過程での先進的集団の意識の転入と党への結束を経て再び戦争的大衆組織への以前とは別の質を持つての介入、そして党の増々の純化とそれを通じた権力斗争、政治斗争、党組織斗争の循環が階級形成、党形成を一体に発展せしめるのである。

三、各都府・各級機関

党は世界党の日本支部として、その世界革命戦略の一環として、日本革命を遂行する。

かかる世界革命戦略による世界階級斗争の自然発生性の克服を原基にして四つの斗争は實際上、各都府、各級機関によって行われ

る。PPを最高指導機関として、そのスタッフII部局は根本的機能として、

(1)理論、教育の全国的全世界的全人民的政治バクロ、宣伝煽動の

機能

△全国政治新聞、編集、情報資料整理等
(2)プロ国際主義の実現(国際統一行動、情報交換交流、統一戦線形成、世界党建設等の為)の機能

(3)全人民を武装せしめ、ブルジョア国家の暴力装置に反対し、粉碎し、将来の赤軍の指導を荷う軍事指導委員会機能

(4)統一戦線、渉外機能

(5)財政的機能

(6)党自身の教育機能

(7)学対、労対、国会議員、反戦等々の全国的統一のフラク機能

等であり、かかる機能に応じて各都府は定められる。

各級機関は、四つの斗争を直接に遂行する機関であり、PP、各都府と結合し、その基礎を細胞におき、地区党、各都道府県委として、都道府県、地区党、経営細胞の順に決定は確認され、各級はそれに応じ、区別され、その諸段階諸条件に応じた活動の独自性と上、横の関連を保持する。

PPはかかる各都府、各級機関の直接の活動から離れ、戦略の下での理論政策、諸計画、人事等一切の階級形成、党形成の最高基本問題を解決し、理論的、経験的に卓越した小数の常任職者によって構成されなければならない。

書記局はPP直轄の執行、行勢機能を有し、各級各都府の任務を執行せしめ、行政する。

第四節 現代革命と組織論

一、現代革命と組織論の諸前提

五〇年代一六〇年代前半を経て現在階級斗争の転換が進行し指導の転換、指導部自身の転換が呼ばれている。だが進行している事態の本質について、呼んでいる主の本人は深く掘り込んであるか。少くとも、アレコレの経験的事実(世界的にも、国内的にも)はそのことを明白に物語っている。だが何が根本的に進行し、何が破綻し、何が近づき、何と我々は、全人格、全存在をかけて闘わねばならぬか。

「何をなすべきか」正にこの事が提出されねばならぬ。大胆に破局は近づきつつある。準備しなればならぬ。一切の準備を断乎として提出しなればならぬ。

I、II、III、を通じて我々はV章を完成させるに至った。だからそのことを再度まとめ整理し、本題に答えよう。

現代の労働者国家の下部構造、そして、現代帝国主義の下部構造、上部構造、その上に立っての過渡期世界総体の階級斗争の定立が必要である。

これを基礎に現代革命の型と世界革命戦略、世界党、及び組織論が定立される。そしてここから現代修正主義、現代無政府主義の自然発生性と社会排外主義への転落は論証されねばならぬ。かつ、自然発生性への押としての上からの職制組織の否定、世界党の否定が着き起されることも論証される。即ち解党主義が。

労働者国家では、

①社会主義的生産の原蓄の強さは、地理的、人口の増大、反革命に対する軍事的要因も加わって、その限界をバクロし、労働者人民に経済的負担と制約を起し、ブルジョア社会の母斑は、階級対立を顕在化させずにはおかない。

なるほど実験室の帝国主義の一国での労働者国家は、それを高い共産主義者へ政治的対立を含みながらも、緩慢に到達させる。

我々がかかる純経済的の法則を否定しけしめたい。

しかも、かかる実験室の中でさえも政治的過渡期は存在する。

即ちプロレタリア独裁である。

ところで現存する労働者国家は帝国主義に包囲され、その反革命攻勢(軍事的、政治的、イデオロギイ的、経済的)にも)のさ中にさらされている。だからこそ、かかる社会主義生産の低い段階、諸制約からの国内の階級対立は、国内的国際的要因が結合され、激化し、純然たるブルジョア対プロレタリアートの階級対立、ブルイデオロギイとMIIの世界観の非和解的対立を呼び起す。

できるが故に労働者国家の労働者は国内の低所得層を結集し、プロ独裁を基礎に帝国主義世界打倒の世界革命の根拠地として自己を位置付けることによって始めて、政治的過渡期を内在的に止揚する方向で乗り切れるし又、乗り切らねばならぬ。

②ところで、中ソ論争を労働者国家の社会主義的發展の不均等から解くことは必要である。

だがそれにとどまらず、何んの解決も与えない。確かに不均等發展はある。だがいずれにしても階級対立は激化する。

正に中ソ論争は、これを如何に止揚するのだから「左」右の論争と斗争を形成しているのだ。だが他方で、労働者国家群の世界史的登

場は、帝国主義世界に規定されると同時に帝国主義を規制する。それは帝国主義の世界市場が狭くたった事柄に主因をおくものでなく、主要に政治的側面である。

現代修正主義を内部に胎みながら（それも、歴史的過渡期に於いては、極く当然である。資本主義に於いてプロレタリアートも改良主義に毒される一時期が不可避に登場する如く）も労働者国家は極く当然である。その土台は資本主義とは異なり、労働者階級が権力を掌握し、政治的に、軍事的にも武装し、各国毎に閉じ込められ、分断されたプロレタリアートをその内部と外から統合し世界的を団結へと客観的には飛躍せしめたことである。

即ち彼等の世界観は共産主義の実現を経済的につけ知らせたのであった、彼等の帝国主義の延命、生産の集積からの超巨大金融独占を基礎にしての超巨大多数の労働者のブルジョアジーへの反抗に歴史的即目的であれ、新たな高々目的意識性の萌芽を与えた。新たな過渡期世界特有の自然発生性目的意識性の萌芽とは何か。それは、労働者人民が、即目的にであれ、「国家」と「国民」を越えたことである。

即ち分業社会そのものの廃止こそが彼等が人間に、人間と人間の自由を結合、自由に生産力を統御出来る共産主義への道であるといふ、自然発生的、経験的意識を与えたのである。この労働者階級の新たな自然発生性、このことは全世界の労働者に共通であり、後進国でもそうであり、かつ労働者もそうである。（何故なら、権力を握っているとは言え帝国主義の鎖から完全には解放されていず、ブルジョアイデオロギーを斗わねばならぬ存在であり、帝国主義を打倒しをねばならぬ、打倒することを通じてのみ、精神、肉体労働の分裂等から解放されるからだ。

然発生的諸活動、及びこれらと結びついた、労働者人民の広汎を戦斗の大衆組織及び解放区となつて現われ、かかる諸階級一掃地を基礎に、全世界の広さと深さをもった攻撃的階級斗争が高次を目的意識性で武装されたプロレタリアートに於て攻撃的プロレタリアートへ準備されつつあるし、準備しをねばならぬ。

④ところで、帝国主義と帝国主義者の方けどうか。帝国主義はまずまずその法則を貫徹し巨大な超金融独占体を形成し、全世界の市場を分割し、今又再分割戦を展開しようとしている。だが帝国主義の経済法則の発現は変容され、屈折し、引き延ばされ、極限的にそれを純化し発現する。何故か。帝国主義者は市民社会の内外の労働者人民の、彼ら自らの経済法則が生み出したことと結合し、諸根拠地一掃地を敵にまわし、支配しをねばならぬ。

彼らは巨大な勢力の登場に後退し（ブル民の枠内での政治活動の保証、若干の賃上げを許容する。）支配しをねばならぬ。労働者国家の根拠地と結びついた、労働者人民の諸階級と新たな高次の自然発生性、攻撃的階級斗争を抑圧し、支配するためには、経済的利益が許す限り、その極限までの国際的にも協調せざるを得なくなる地点に追い込まれた、彼らは互に政治的に自己抑制し、彼ら帝国主義の共通の防衛にめざめねばならぬ。

かつてロシア革命以前は、それは前提であり、彼等はそのことに自由であった。ただ国内の労働者人民を支配すればそれでよかつたのだ。だが今日は全く違う。その前提は崩れ去つたのだ。彼等が目覚めると同時に彼等は自己矛盾に陥いざるを得ない。強い帝国主義は弱い帝国主義の政治的弱さを補強してやり、植民地階級斗争に反革命は（直接経済的利益に比列しない時もある。だが後進国総体に占める経済的利益からみれば、それは小さな負担であ

現代修正主義

人間の意識に於ける浮遊、換言すれば、帝国主義が世界の半分以上を占め彼等を規制している以上、又彼等が低い生産力の発展段階を抜け切れぬが故に、諸分業がまだ残存している所にこそ、自然発生性は存在するからだ。（生産関係に於ける諸分業、即ち帝国主義世界に於ける、資本主義的分業、労働者国家に於ける諸分業と残存する資本主義的分業との癒着及び過渡期の国家、その社会の幻想共同性、これ等は世界の階級斗争の自然発生性の質と目的意識性の質をより現代的なものとして高次元に引き上げる。

資本主義的分業、及び労働者国家の諸分業と残存する諸ブルジョア的分業に土台を置いて、特異な自然発生性への拜跪したブルジョアイデオロギーが形成される。これこそが現代修正主義即ち現代社会排外主義の物質的土台であり、イデオロギーの質である。

帝国主義から、帝国主義内部の現代修正主義が生まれ、独立の基盤から生まれながらも、世界階級斗争を通じて結合され等質な（ブルジョアイデオロギーか社会主義イデオロギーか、その中間の世界観は否か。）ブルジョアイデオロギーとなる。

共産主義者は、現代世界とプロレタリアート世界革命戦略を放棄し、帝国主義と自国の反動的層（階級）に武装解除すればブルジョアイデオロギーに拜跪する。そして、その教条からのアンチは、別の幾つかの道路、それは主に教条主義そのもの、及び無政府主義を経て、ブルジョアイデオロギーに拜跪する。反帝反スタ派は後者の道を歩んでいる。

⑤高次を自然発生性、これは他方でそれに結びつく、高次を目的意識性の萌芽であり、高次を意識性がプロレタリアート世界革命によって与えられ、結合されるなら、巨大な力を形成する。まさに、かかる高次を自然発生性目的意識性の萌芽は、労働者国家そのものと、その自

る）しをねばならぬ。

他方弱い帝国主義は政治的にはそれに協調を余議なくされる、それはまたかとも一見、政治的従属の如き現象も呈する。だがこれ等の事柄は彼等双方において本来の経済政治を歪めている。

⑥全くの自己矛盾である。しかも経済的にも、双方の負担と協調は彼等の利益が犯されを限り、（未来、広さ利益の質まで含んでの）それであるから、特殊に利益の範囲を越えたかの如き現象も起る。これ等の帝国主義の法則が特殊な現代帝国主義政治に媒介された変容し、発現した形態こそが、E.T.O.「国際独占体」I.W.T.「体制・国連同盟」「反革命一掃地」等である。

ベルリン、朝鮮動乱、ヴェトナム等の各国帝国主義の自己矛盾した対応である。あるいはを崩し反革命の機能を保存させた市場再分割戦等である。

変容し抑え込まれ引き延ばされ、屈折しても、帝国主義の法則は不変であり、特定の間と諸環境を経て、矛盾を全面的に発現させるを得ない。他方帝国主義は各自のプロレタリア人民を反革命抑圧すると同時に、現代修正主義者を帝国主義政治に引きつり込み、ブルジョア政治に転落せしめた。

そして現代修正主義者は国内の反動的層と妥協し、和解した。帝国主義の不均衡発展の拡大深化、を崩し崩しのであれ、市場再分割の全面的進行はかかる帝国主義政治の現象的、擬制的、超帝国主義政治の時代を終末に至らしめ、崩壊の局面に突入させつつある。

⑦これらの時代こそ正に共産主義の高次を目的意識性が世界党の建設をもって高次を自然発生性に結合しをねばならぬ。正に高次を目的意識性の中心に我々の世界革命戦略即ちプロレタリア階級斗争の下での現代世界革命を同時に擬制的帝国主義政治の崩壊

の時点に向い、徹頭徹尾攻撃型階級斗争として斗い抜き実現することである。その過程での環は明らかに崩壊的市場再分割戦の激化に対し各帝国主義の軍事外交政策との非和解的斗いを機軸に全ゆる階級斗争を共産主義に向け組織することである。

ところで現代の高次を自然発生性に押した、小ブル改良主義は現代修正主義、社会排外主義は如何に登場するのか。

その中心の共通点は、反革命、民主主義防衛、民主主義的民族国家の建設、民族主義、国民主義、これである。

彼らのかかる戦術に於ける全くの合法主義、共産主義を民主主義と合法主義に押し下げる、裏側には、労働者国家内部の矛盾を看過し、労働者国家内部の現代修正主義者と手を結び、これらの無限の共産主義への発展と階級斗争の消滅という史観の上での、帝国主義の法則の自動消滅の願望とが潜んでいる。これは小ブルの労働者の高次を自然発生性に押した姿である。

これは米帝の階級斗争に於てもそうである。しかし、米国の労働者人民の自然発生性こそ、或る意味で最も巨大で深く、高次を目的意識性が結合されるなら、攻撃的革命は充分実現し得るし、その意識性が与えられなければ、戦前のナチスをヨリ越えた狂乱の反革命帝国主義国家へと変遷するだろう。

丁度、彼らに与えられた位置は戦前の賃労働者、人民の位置と同じである。米帝に相対的に劣位な日本、独、仏等の帝国主義の現代帝国主義の現代修正主義の社会排外主義への転化こそ、最も巧妙に形成される。

即ち、米帝の反革命反対を環にして、反米民主主義国家の建設である。彼らは、現代世界と現代帝国主義の総体の諸矛盾を把握し、が故に、又、そのこと、彼ら自身の下部の民族主義、改良主義、

即ち、「強大な合法的大衆的前衛政党政論」論なるものである。

かつ、労働者国家に於ける党活動の全くの独自性の軽視一否定と、国家機関活動への解消（これはプロ独の放棄にある）の姿である。

日井は今このスローガンの下に祭り、ハイキング、スポーツ祭典、赤旗売りに浮身をやってしている。

一見彼等はレーニンの党の型を信奉しているかの如く見える。だが全くその反対である。かかるスローガンの基礎には人民戦線に展望をおく議会議主義の合法的体質がある。日共から分裂した、我々とともに革命派は社会党に加入した。ところで労働派マルクス主義の未エイ運がその左翼的位置を占めている、社会党は完全な合法主義であることは言うまでもない。彼等が種々斗争に於いて戦線的な指導を荷おうとする衝動に、即ち下から突き上げられ取られることもある。

或いは種々革命戦略論も何度か議論された、だが彼等は一たびとして戦線的であったことけない。（若干国会内でも、もみあったことはあるとしても。）これ等のことは次の事を意味する。

自然発生的な戦闘性を彼等が宿しているにも拘わらず、理論的側面にとどまらず他面での徹底徹底合法主義議会議主義政党政型へも由来しているのである。

即ち頭部の殆んどは国会議員であり議員かつ、下部は殆んど総評の労組であり下部機関の社青同の同盟員は何らかの労組が総評の役員についている。かかる合法組織に規制されることのない党の独自活動を保証する人間は全く極く少数である。非合法的戦闘性は彼等の成立つ組織の型からいって全く無縁な性格なのだ。七〇年安保を戦闘的に闘うと宣言した彼等とそのブレーン清水慎三は全くこのことに触れず、合法主義の型を物神化し、社会党も日共に対する強大

排外主義、合法主義への押した理論的表現でも、自国帝国主義のMと帝国主義の崩壊し市場再分割一帝国主義戦争の準備を見落し、免罪し、帝国主義に屈服し、和解する。

現代の社会排外主義の特質こそ、カウツキー・ベルンシュタイン等と同様に、超帝国主義を基礎にしたがら、労働者国家の現代修正主義者と癒着しているが故に、そのことを通じ、「反革命反対」をマルクス主義的に粉飾し、排外主義へ至るところに、まさに現代の社会排外主義なるユエンがある。

前者は、他帝国主義との直接の関連で、後者は労働者国家と革命斗争とを背景に間接的媒介を経て、共通に民族主義一排外主義に至る。反帝反スタ主義とはなにか不可避の「人間」世界の運命的なものとして把握、それを現代のマルクス主義だと勝手に観念し、マルクス主義を否定する。だから、過渡期世界が生み出した、現代的寄生である。

現代革命は、徹底的に攻撃的に完成された戦略と分離一結合する党の型をもって、世界党の指導の下、諸陣地を基礎に闘いとらねばならぬ。

以上の、諸前提をふまえた上で、現代革命との関連で組織論を論じよう。

二、現代帝国主義市民社会とわれわれの組織論

①(1)合法的大衆的前衛政党政論とその影

簡単に、現在の国内的、国際的諸動向とその組織の型についてみよう。

われわれは、結論的にそれらが、M・E主義の組織論と実践が全く放棄されていることは一目瞭然である。

な大衆政を呼号しているのである。かつ興味あることは社会党への加入戦術をとっている、解放派や第四インターがこの一二年、とりわけ昨年来、根本的に左右の或は出るか、出ないかの不毛な戦路にたたされ、見事に下からの党の型を破産させつつあるのだ。トロッキー、ローザ（メンシェイキ）の下から党は、いまだしも悲劇であった。だがその亜流産のドタバタ劇は全く喜劇以外の何者でもない。社青同解放派の破産は組織論の破産以前の彼等の全く曖昧模湖とした、レーニン主義の反撥からの、非科学一非戦術一戦術的な疎外論にその根拠がある。かかる革命論は組織の型など一向かまわないうし、適当に適当に調子のいい所をうるつばはいいようになっている。そのような疎外論では、現実の組合主義・改良主義・排外主義が来るべき革命に何故犯罪なのかを説明することもできない。彼等の反撥しているのは反スターリン主義であり、現代修正主義であり、モローとした反スタ疎外論を唱えるのではなく、現代修正主義の物質的基礎と土台そのものの変革の革命戦略を考察すべきなのだ。その現代無政府主義者、革マル、中核は、一応下からの党の型をとっていないかの如くである。だが、その組織の型は、社青同解放派の疎外論の論理的必然性と同じく、徐々に、内部から下からの党の型へ変質するのだ。彼らも又、スターリン主義に党派性は示し得ても、帝国主義と改良主義、組合主義、排外主義には、疎外論では根本的地点でこれらに武装解除している。

ソ連共産党も又、全く同じ合法主義である。階級対立に対して、一切を国家機関にゆだねることはできない。政党による党派闘争こそ思想を純化するのだ。国家活動と党活動の二重化は、ここでも同じく真理である。又、ボルシェヴィキが党内闘争を禁止し、他党の活動を非合法化したことから、組織論上では危機は始まった。戦

際には於ける誤謬、そして上からの党は、その矛盾を下を抑圧しながらも、結局登りつめさせ、國家活動に一切が解消され、矛盾は國家を通して、まさに上から官僚的に抑圧された。このことは、党自身としては、下に拝跪したことである。だが、我々は解放派の如く、組織論のみをとりあげ、レーニン主義にスターリン主義の根源を求めようとしているのでは全くない。まさに具体的な階級闘争過程での過渡期観一戦略論こそが問題なのであり、組織論そのものは全く独自ではあり得ない。それが、戦略論が誤謬していることよって組織論は結局下から合法主義へと転落することを指摘しているのだ。

世界革命の第三の道・派は、今、実践の中から世界党と決定的な上からの党の型を確立しつつある。劉少奇は、帝國主義と自國の富農小ブル、ブル、上層プロのブルジョア意識に拝跪した。毛沢東派が真に世界革命の根拠地に中國革命を導かんとするなら、第一に世界革命戦路を修正し、第二に最も規律ある國家機關活動とは相対的に独自の、かつ赤軍とも独自に、自らをこれらと分離し、中國共產黨に組織し直し、これらに結合しなければならぬ。

我々は、ここで共通な中心が世界革命戦路に於ける誤謬・現代の修正が合法的大衆下からの党の型と深く結びついていることを確認すればよい。そして、まさに現代の労働者人民の高次の自然発生性に拝跪していることの事実を見ればよいのだ。

② 現代帝國主義市民社会と階級闘争の型・自然発生性の質

現代の労働者人民への自然発生性の拝跪した姿と、その組織の型は今概観した。それでは、かかる自然発生性の萌芽が攻撃型階級闘争等の拝跪と萌芽の根拠はどこからくるのか。何に根拠をおくのか

このことは機動戦を黒人々暴動ノ日本全学連反戦の砂川……佐藤訪ベト・米阻止闘争の過程でも明確にした。かつヴェトナム、南米などの解放ゲリラ戦方式である。又中國文化革命に於ける人民の武装闘争（IIプロ独運動への自然発生性の萌芽）も同質である。

そして、陣地戦は三池以降、東交、早大、明大闘争として明らかになりつつあるし、官公労への第三次合理化攻勢はそれより巨大化するであろう。かかる目的意識性への萌芽はいたるところで顕在化しつつある。現代修正主義と小ブル改良主義の戦略と合法党の型はこれを指導できないばかりか、これと対立し、自然発生性にます。す拝跪し、彼らをバリケードの向かい側に追いやる。

前衛党はかかる、世界的に國際性暴力をもった戦い、機動戦の自然発生性に拝跪しブルジョアイデオロギーにその意識を染めあげてしまうのではなく明確にその萌芽を現代革命の攻撃的型の問題として自覚しなければならぬ。

以上諸結論を明確に規定するためにはやはり最初に述べたこと、現代帝國主義市民社会に於ける階級闘争に於ける自然発生性の萌芽と、目的意識性について、現代帝國主義國家との関連で述べねば全くあいまいになってしまう。その問題には二つの前提をおく。

一つは市民社会と國家との関連における自然発生性と目的意識性との関連及びブルジョアイデオロギーについては前述したので、それは前提にする。二つは攻撃的階級闘争とブルジョアジーの「後退」の歴史的高次性についても述べたのでこれも前提にする。この問題

これも又、攻撃型階級闘争も現実に、見ても巨匠も上と、その國家に媒介されて、その自然発生性は確定される。我々は、III章の項で詳しく、市民社会と國家との關係に於ける自然発生性及びブルジョア・イデオロギーの内的連関を論じた。今も又、この基本的な諸連関は根本的に変化しない。

結論から先に述べよう。

自然発生性の質は、攻撃性・暴力性と國際性である。それへの拝跪は合法主義・民族主義である。かつ、その型は、武装闘争を主軸とする攻撃型であり、これは街頭の機動戦や職場・学園・農村に於ける陣地戦に於いても同様である。

現代革命の型は、このように、後進民族解放社会主義闘争の場合、もはや機動戦・陣地戦は結合され、根拠地戦II正規の革命戦争に発展していることから、國際的機動戦を軸に、各國の個別陣地戦が結合されるのだ。世界党と各國の上からの型をもった少数精鋭の前衛党が、それこそ巨大な諸戰闘的組織を媒介に結合し、かかる諸戰闘組織の武装を実現させ、同時に世界革命と内乱II蜂起を経てのソビエト國家輸出の方向である。

そして、これらに対して実態としての、國家権力、政治形態と「國家」II「普遍」としての階級的生活の表象を区別し、かつ「國家」II「普遍」と「國民」II「民族」のブルイデオロギーとを区別し、普遍に対して、共產主義の実現II最大限綱領を、かつ「國民」II「民族」II「普遍」のブルジョアジーの支配の道具であり、かつ「國民」II「民族」II「普遍」と「世界プロレタリアートの団結IIプロ國際主義のローガン」を提出し続け、それを普遍に実現し権力を打倒する。かかる攻撃型闘争の質はいうまでもなく攻撃性、暴力性である。

に關しては非常に大雑把にしか述べていないが、何よりも我々の歴史の諸経験が雄弁に物語っている。このことも市民社会と國家の關連が理解されていけば、はつきりと理解できるはずである。

① 資本主義的分業の社会化（生産の集積）過程における産業資本主義、古典的帝國主義（ロシア革命まで）、現代帝國主義の諸段階に対応する、國家II「民主主義」II「形態」と「民族」の關連をその性質相異を確認する必要がある。

産業資本主義は諸産業資本の競争の時期である。だから、國家への政治の集中性及び権力はいまだ脆弱で、地方分権的連合的、一般に君主制が多数である。

だから市民社会の二面的あり方と國家との關係に於ける、民主主義、民族の屬性をいまだ強く持っていない、國家は共同利害の果す任務を主要に荷い、夜警國家（即ち、市民社会の面倒をみてまわる）であった。

階級闘争は労働者階級の社会的形成は脆弱で、又その意識的前衛の理論の未完成故に、突発的一發主義であった。被抑圧無産者運動の國際主義、あるいは、新たな國家も無意識的で、コンミュニオンも崩壊せざるをえなかった。勿論マルクスはそれを総括し、分析していったが。

古典帝國主義段階に到達することによって生産の社会化と市民社会は明確に二大階級に分裂し、支配階級としてのブルジョアジーは國家権力を掌握し（だが、現代帝國主義國家権力の彼等の掌握力より弱い）権力を階級支配の道具として暴力的なものに再編成した。かつ、市民社会の諸支配ヘゲモニーはかかる権力に統合され中央集権制を確立した。これは生産の競争の形成から社会的独占的形成（II金融独占資本の確立）に物質的根拠をおく。市民社会の國家の

二面的あり方と国家との関連は、ここで完全に民族、國民となる。

かかる民族は帝國主義の市場再分割戦を通じて、民族主義、排外主義となり、他方國民は君主制から代議制民主政体（民主共和制など）となる。中央集権制を通じ諸階級は帝國主義權力に統制、統合されてしまふ。

広汎な即時的團結を確立しながらも、労働者階級は帝國主義の市場再分割戦を経て、始めて市民社会を越え、世界的プロレタリア！トになる条件を与える。ボルシェウエキ党はこれに對して、この過程に於ける労働者の團結と党自身をたえ耐え抜き、國家の民主主義に對し、權力のバクロと眞の民主主義（普遍）、大隈綱領、とプロレタリア國際主義の世界革命を提出し、プロレタリアートの即自性を對象化させ成功させた。だが帝國主義の政治的轉換を経るときに於いてのみ、その過程におけるブルジョア階級の積極的攻撃に受動的に耐えぬいて、革命が實現されたのだ。過渡期世界ではどうか。帝國主義は、越巨大金融独占資本に發展し、自由市場は極度に狭められ、生産の社会性は最高度に發達した。金融独占ブルジョア階級は完全に國家權力を独占したのである。金融独占ブルジョア階級の下により強い中央集権的支配は、全ゆる市民の社会ヘグモニ！裝置を統一統轄した。市民社会は重じよう的なブルジョア階級の支配によって統合された。

これが、樺革・日共自主独立派・トリアッチなどの「現代民主主義」の根拠である。重じよう的、濃密な中央集権的の議會主義政治形態は民主主義をして完全にブルジョア民主主義に転化せしめた。だがこの時、他方での國際的、国内的に新たな矛盾が激化していた。

ブルジョア・ヘグモニーの規制を通じての、その兩者を結合させ平和革命の實現となる。これらこそが、攻撃的陣地戦型闘争の自然發生性への拝跪である。この現実に拝跪するの理論は、觀念に過ぎない。何故なら、資本制分業生産様式の上層構造、及び精神的表象を土台と切り離し、現象の現代性から現象的革命を帰結させているからだ。まさに実態は合法議會主義、改良主義、組合主義の現代的変容でしかなく、全く新しさだけの、全くのブルジョアマルクス主義的粉飾である。逆に現代革命の基本問題が土台と如何にとり結ばれ、土台そのもののおきかえとの關係での、權力打倒の實現にむける現代市民社会と國家の現代的特質は、それが媒介点となって、前者の事柄が實現されるものとしてあるかを定めることによってプロ政治革命の型として定立される。

従って現代革命の基本問題は、このようになる。即ち、現代帝國主義市民社会内部の攻撃型階級闘争の諸階級形態の諸大衆的階級組織を如何なる諸階級闘争の發展段階に應じて、闘争形態、階級形態を付与するかを、國家權力自身とそれと結ばれて、それに民主主義政体を媒介に中央集権的に統合されている市民社会内部に纏の目的の如くはりめぐらされた諸階級形態のブルジョアヘグモニー裝置に對して、かかる市民社会内部から表象されるヘグモニーの共同利害の外化の「國民」「民族」に對して如何に把え、定立するかである。かかる問題に對して、土台・權力・イデオロギー形態の諸階級を土台から切り離して考える自然發生性の諸条件とそれへの拝跪が現代に如何に登場するかは明きらかにした。

この問題は、以下二つの問題として提出される。
④ 実態としてある諸階級的大衆的組織が、權力とその市民社会にまで下りたものまで含めての諸政治形態との関連で、どのように

即ち、労働者國家の成立を以て、國際的には強大な帝國主義への、弱い帝國主義の政治的經濟の依存の協調を通じての、労働者國家への對抗であり、強い帝國主義の弱いそれへの政治的經濟的補強・強制であった。他方での市民社会内部での労働者國家の諸活動と結合した、プロレタリアートの歴史的高次元な即自的諸階級・諸根拠地戦の形成である。この点から、前述した中央集権制は労働者の根拠地戦の大規模な形成、しかも支配の市民社会への全面的貫徹からの巨大な民主主義の國家への要求、ブルは、一定の議歩を行ないそれを媒介に一步後退して、労働者人民を遂に支配する過渡期世界の民主主義政体（つまり）にブルの一步後退と完全な中央集権的獨立とに階級の本質がある。（これが樺革・トリアッチ等の願く、生産關係の構造改革とその自動的變質である。）

③ ここから、いくつかの重要な政治的結論がひき出せる。古典帝國主義段階からみて、特異な國際的諸階級を通じて、市民社会の民族への外化は、強い帝國主義への、即ち、反米民族主義と労働者國家に對する反共主義へと外化した。又、市民社会は反労働者國家、アメリカ帝國主義を外化した。

⑥ このことは、現代過渡期世界特有の市民社会の市民社会の精神的外化の形態であり、古典帝國主義の膨脹期のそれでもない。

⑦ かつ、このことは、労働者階級の「意識」に於ける自然發生性への拝跪を、米帝内部では、労働者國家の現代修正主義と、結合しての、「反革命・民主主義國家」・民主的國家形成、米帝國主義へと拝跪する。他方、弱い帝國主義の自然發生性は、反米・「反革命・民主主義國家」の形成に外化する。

④ 現代修正主義の革命の型について、權力の無バクロ、現代中央集権民主主義政体を通じて、かつ、陣地に於ける生産の規制から

認識され、如何なる意識・闘争形態が与えられねばならぬか。
② その際、それは闘争形態・團結形態に限られず、それにとどまらないで、それを担う労働者人民の自然發生的意識、即ち「國家」「民族」に表象されていくものとして、どのように定立されねばならないか、である。

現代修正主義者の根本的現代革命論の合法主義的の型、及び世界覺の否定の誤ちは、現代的な自然發生性の質と形態とを、土台と切り離し、それ故に權力の政治形態に於ける階級性と表象としての國家の普遍性（全人民的類性を混同し、それ故に權力の政治形態における階級性を無階級性にとり違えたことである。これらの混同・誤ちは、全ゆる「左翼」をつき当らせる性質のものであるが。そこから、權力に對する非武装、無バクロ、肯定、そして權力・政治形態を通じての掌權、諸社会制度の規制による「民主權力」の基礎獲得になるのである。

我々は攻撃的武装闘争形態、陣地の獲得、あるいは權力としてある一定の政治活動の獲得した環境・条件としての自然發生性（目的意識性の萌芽を、權力と國家との區別を通して、従って共產主義Mとしての意識性に結合転化しなければならぬ）。

このことは、國際的連帯活動を背景に、權力と革命的敗北主義の立場で非和解に闘いつつ、普遍性に對して最大限綱領、プロ國際主義（全人民的利益）を提起し結束し、同時に、他方で權力の政治形態の階級性を全人民的政治バクロし、かつ自然發生性への拝跪「反革命」民主主義國家への拝跪を弾劾していかねばならない。

これらの把柄を通じてのみ、最も攻撃的に、國際的、後進國革命人民戦争、労働者國家のプロ独と結合し、機動戦による正面攻撃戦と政治形態を通じて、陣地からの側面的下からの陣地戦が武装闘争

として結合され、その過程を通じてコンミューン的大衆組織の広汎な単一に統合された大衆の戦闘的権力の萌芽が、内乱にむけ準備・形成される。反戦闘争や反合闘争、賃闘、授業料闘争等は、かかる攻撃的革命的型の陣地戦、機動戦の一環に位置するのである。

三 へ目的意識的攻撃型階級闘争の推進と我々の組織の型
………世界単一党の実現へ

現代帝国主義市民社会と国家、及び権力II政治形態における自然発生性、それへの拝跪、及び目的意識性、そして革命の型が位置づけられた。このことからみれば、小ブル改良主義や現代修正主義の下からの合法党の型の型は、全く笑うべき存在であることは明らかだ。

我々は以上の世界革命戦略、国際主義のスコーガン、同盟軍及び戦術形態、かつ機動戦、陣地戦とその結合を通じたプロ独形成の現代革命の型を意識的に実現していくためには、徹頭徹尾、労働者人民から分離した、上からの中央集権的党の型の組織を実現しなければならぬことも又、明きらかだ。

しかも、それは絶対的に世界党に従うものとして獲得されねばならない。

我々は、以上の(I)(II)(III)(IV)(V)章の内容を以って、世界革命の第三の道派を結集し、毛沢東派と「行動の統一」と政治活動の自由の原則の下に彼らとの共同闘争の過程で革命的に変質せしめ、ソ連現代修正指導部とその亜流共をコッパミジンに打倒し、揮かしい現代プロレタリア世界革命の真紅の旗を第五インターに高々と掲げねばならない。

本稿(1)のまとめ、絶対に確認しなければならぬこと。

A 基本的視点を確立したこと

I 我々の世界革命戦略Iプロ国際主義I党の型実践論を、
(1) 我々の現代過渡期世界の階級闘争が帝国主義世界と労働者国家群によって成り立ち、世界は帝国主義の運動を軸にブル・プロの非和解的階級闘争を展開し、しかも、労働者国家の存在を通じて、その階級闘争は攻撃型階級闘争を自然発生的に内包している。他方でのブルの後退。

(ロ) 帝国主義世界の破綻・革命の条件の基本ポイントの設定を通じて世界同時革命戦略、攻撃型階級闘争に対する自意識性II現代革命の型は根拠地型、攻撃型、国際同時等質単一型の革命の型である。市民社会とプロ国際主義の必然性

(ハ) 党は戦術I戦術で結集しその大衆との有り方は分離I結合、中央集権、職革型、全国新聞がその形態、上からの組織と党内闘争を杆槓とした四つの闘争を、右記三つの視点で貫いたこと。

II 労働者国家の評価の観点

(イ) 資本主義から共産主義への政治的過渡期
① 経済発展の段階、発展のスピード、その限界I階級対立

機軸性

② 帝国主義I自国根拠地に結びついた陣地戦機動戦の結合から内乱

後進国 I 根拠地I人民戦争
労働者国家Iプロ独運動と党のその世界革命に向けての指導

③ 各国バラバラ論及び機械的他の一者への従属論のマヤカシ性、修正主義、教条主義

V 現代革命の型とその意識性の評価の観点

① 根拠地攻撃・世界同時型
根拠地に基づく機動戦II陣地戦の結合とその武装「政治」闘争から内乱

② この場合の意識性と自然発生性への拝跪の現代革命論の分岐点である。
土台I市民社会と国家との関連に於ける原理的把握と現在の適用がカギである。

③ 現代修正主義、教条主義、現代無政府主義の発生とその実態

VI 世界党・党の型、実践論

① 現代市民社会と闘争の陣地・攻撃性への拝跪が下からの合法的大衆的党へとなる。
② 萌芽は、戦術I戦術・大衆からの分離I結合の党の性格と職等、中央集権全国新聞を形態として、上から党闘争を保障しつつ、四つの闘争を展開することによって意識性に

III 現代帝国主義の評価の観点

① 帝国主義そのもの、その運動法則のI労働者国家の不足と世界攻撃型階級闘争に I 発現が屈折、歪め、引き延ばされとなって現われる。そして、破局に於ける巨大な爆発とその純化

② 種々の現代修正主義経済学

過渡期世界から起る特殊な現代的政治経済現象を過渡期観を抜きにすることからの、マルクス主義経済学の修正によって説明しようとするところにある。

③ 経済学に於けるレーニン、帝国主義論の党派性が貫徹されねばならない。

IV 攻撃型世界階級闘争の評価の観点

① 帝国主義の運動を機軸に有機的全体性単一性をもってい

転化される。

B 不明確・弱点・残された領域

I 労働者国家の歴史—論理の実態分析

(ロ)(イ) ソ連、東欧、中国
明確な規定性

II 現代帝国主義の歴史的—論理の実態分析

III マルクス、レーニンその経済学への方法と修正主義経済学者との相異

IV 市民社会と国家との関連及びイデオロギーについてのより精密な確定
これが組織論の前提になる。かつ疎外革命論のマヤカシ性のバクロともなる。

V 毛沢東主義、我々の実践的立場は鮮明。後は彼等の分析と規定である。

VI 核—威力が共倒れを内包しても、武器は武器、誰れがどのように使用するかが問題

VII 戦略の規定性
(イ) 最大限綱領と革命に於ける過渡期↑↓ 宣伝とバクロ
(ロ) 我々は最小限「改良」闘争をこのように規定していいのか？！

(二) (イ)、(ロ)をまとめて、党と最大綱領
プロ・ヘゲモニー獲得としての統一戦線とその内部での党派闘争、党と戦術の総体としての論理的関連とその一環としての位置を明らかにする必要がある。展開が

弱い。

VIII (二)について現代革命と組織論(三節四)に現代性格を通じて付加されねばならぬ。

革命党建設の諸任務

一九六七・十二・一〇

佐 伯 武

(目 次)

第一章 世界革命の現段階と国際共産党及びわが同盟

一、 戦略視点と世界階級闘争の同時性・一体性

二、 危機の普遍性

三、 現段階における国際反戦闘争の革命的意義

四、 国際共産党及び国際反戦インテリ

五、 世界的諸ヘゲモニーの評価

第二章 日本における階級闘争の性格と課題

一、 日帝の対外膨張・市場再分割の必然性

二、 諸階級の分析

三、 国家再編の型と革命前段階の日本階級闘争

四、 七〇年安保闘争

五、 諸党派

第三章 中央集権的党の建設

第四章 同盟と大衆闘争組織及び青年同盟

以上

第一章 世界革命の現段階と

国際共産党及びわが同盟

第三期階級闘争の国際的に同時性、同質性をもった深化と一体の方向性志向が生みだされ、世界大革命前段階の成熟が危機に対応し新たな国際帝国主義秩序形成の死闘の始まりのなかで訪れているとき、われわれの党、党の任務、党建設の特質と課題は、以下のように設定されねばならぬ。

それは、プロレタリア国際主義の生きた表現である世界革命戦略を帝国主義、労働者国家群、旧植民地地域に後進諸国階級闘争の当面の帰結を、単一の世界プロレタリア独裁国家に真に死滅の契機を内在した国家のかくごとく引き寄せ、その戦略的要素を、①「帝国主義プロレタリアートの武装蜂起の貫徹による自国政府の打倒」と、②「それによって決定づけられる労働者諸国家での官僚コース打破・プロレタリア独裁運動の国境をこえた展開としての危機に於ける革命戦争の展望をもった政治的軍事的路線による自国の帝国主義体系からの存在そのものの解放のための永続革命の堅持」であり、③「帝国主義と、その新植民地主義を媒介とした反革命軍事政権と

の癒着によるブロック化方向の永続的打破の戦線である革命戦争のインターナショナルな規模での推進に見定め、それらの共同の結合された力による、帝国主義矛盾の帝国主義戦争への不可避性が生み出す危機を、したがって帝国主義ナショナルの分割と対抗を、IMF危機……国際恐慌の深化における国際的打撃によって帝国主義戦争の粉砕……革命におきかえることである。

実際に国際的戦線はそのような成熟をたらしつづける。それが全く新たな革命潮流の抬頭を併い、否、それによつて形成されたたっていることに、われわれは注目しなければならぬ。戦線規定を大胆に全世界の革命的なプロレタリア人民にすすめること、そして、かかる戦線方向性の一致した確認が、まさに各国革命の総和としての世界革命路線ではありえない以上、単一の世界革命の参謀本部としての国際共産主義者党の結成にいかなる困難をも排して具体的に着手されることが、わが同盟に緊急の死活の重要性をもつてのしかかつてきているのである。このことを一般的空語に墮落せしめるような潮流・傾向をも、その存在すら許してはならないのである。

そして、世界戦線と国際党建設の基軸から、当面する過渡的任務の国際・国内的結合を、政治攻勢・資本攻勢・イデオロギー攻撃を帝国主義の軍事・外交路線に対する国際反戦闘争、自国政府の路線に反対し反帝反政府闘争への転化を、実力闘争として推しすすめること、これがかくとくする世界的包括性を労働者国家のプロレタリア革命左派を含む後進諸国ゲリラ革命戦争勢力の闘いと連絡した国際反戦闘争の創設、その組織と運動において、広汎なナショナルリズムとの対質の形成と既成左翼の分解の日和見主義の社会排外主義への転化とその労働運動での勝利を阻止しプロレタリア国際革命

一、戦線視点と世界階級闘争の同時性・一体性

世界革命の原則一般にとどまらず、その戦略的具体化がわが党派性の基軸にすえられねばならないのは、今日の世界的規模での階級闘争の自然発生的昂揚に應えることは、まさにこの形態ぬきにしてはありえないからである。実際に三〇年代のヨーロッパ革命の各連統敗北の真の総括が、各国の戦線の提起と各国の共産主義運動の分断であったことを想起しなければならぬ。自然発生的昂揚はそれはそのみで終らしめない戦線による目的意識性の注入を要求している。そして、新たな革命の潮流の、かかる昂揚と一体化した輩出は、真に戦線的な統一を要求している。それは世界党の再建として目指されねばならぬ。

われわれはヴェトナムにおいて世界革命の直接の最前線が形成された一時期が、帝国主義支配秩序の動揺とを通して、帝国主義支配の永続的打撃につきすすむ広大な戦線の広がりがありひらかれてきたことを確認しなければならぬ。

闘いは末端・周辺・最下層から、国際的国内的に、進展している。それは基幹部心臓部の登場を決定的に、おしすすめつつある。帝国主義諸国プロレタリア本隊はいまだ「墓場のよりな静けさ」を保っているかもしれない。だがそこには、決定的な戦線への胎動が用意されている。この攻防が、帝国主義と世界的前衛の、機動・陣地の結合環である。

ヴェトナム革命戦争はアメリカ・ドル危機による世界政策の包摂力の後退と戦後第二期を通して結果した後進独立諸国の経済自立建設の困難、を根底として、革命的伝統の発展である新たなヘゲモニ

派としての第三潮流の、決定的な労働運動との結合を闘いとすることである。そして日本革命のまさに直接に労働者国家、アジア革命戦争アメリカ・プロレタリア人民の闘いと結合した国際的形態の必然性をもとずいて安保七〇年闘争を、いかなる一国的ビボウ的な人民戦線と平和共存の幻想を拒否し、永続的な革命過程をして日程にのぼらしむるものとせねばならない。

そして、日本の革命的左翼の党的結集と再編は危機に対応する諸国際ヘゲモニーの解体再編と緊密にからみあつて進行しているし、するべきること、われわれの党派闘争、統一戦線は国際的形態に拡張されること、を確認しなければならぬ。ことに、日本共産党のソ連派との新たな癒着が国際党会議の陰謀とともに進められていることの意味を、ソ連平和共存路線の世界政治における包摂力の後退をあくまでソ連一國「共産主義」建設の国家利害の条件、確保なくしずしに冷戦的共存……反米帝人民戦線（政府）の戦略戦術をもつて国際党を配列することとしてとらえる必要がある。これとの党派闘争の勝利は革命の必須の要件である。国際的に中国路線が、OLASが、挑戦している。だが、中ソ論争に端的に示されたように中国革命の外在的拡張であるかぎり普遍的な党派性をもちあえず物質的に転化しない。中国プロレタリア人民が下から自然発生的に無自覚的に要求している中国文革と世界革命の結合をなしうる戦略を対象化することが決定的である。逆にこのことがなれば中国革命ヘゲモニーのなしくずし的な修正主義への逆転がなされるし、現状で、毛沢東インスターの固定化とも断固闘わねばならぬ。われわれがOLASと結合することの必然性は、これが中国路線の限界を自覚したインターナショナルリズムとして、特殊を絶対化せず普遍を求めているからである。

一へ解放民族戦線の武装解放闘争戦略の正しさによつて密集した国際反革命をよびおこしつつも、武装した人民の永続抵抗が、帝国主義支配の経済・政治・軍事・かつイデオロギー的な危機を促進した。これが、戦後へ米ソ平和リヤルタ体制への、人民破壊要因であるがゆえにその暴力的圧殺にアメリカ帝国主義にとつて勢力圏保持と世界階級上の不返転の線であり、一国的革命が社会革命への深化と世界革命の成熟に支えられてこそ展望しうることを意味している。

そしてヘ十七度線という特殊な要素を捨象すれば、後進国に共通する危機が成熟していること、その革命への転化はもっぱらヘゲモニー形成に委ねられていることを確認しなければならぬ。だからこそ、後進諸国は随所に人民のコースを、武装解放闘争として突出させつつある。

(地域別に摘出して)

インド・ビルマ KOREA / インドネシア

コンゴ / エジプト・アルジェリア

LA

そして、キューバは、自国の階級闘争の革命的発展の道を、このインターナショナルな革命の拡張にまき、国際階級闘争の革命的要因として結合と促進をつよめている。

中国も、その文化革命において人民コースをたつていさせ自国階級闘争の進路プロレタリアートの官僚に対する真の勝利は、世界革命にしか、発展的に見出しえなうことをうきほりにした。

帝国主義の心臓部 アメリカでは、三〇年代以来の闘いの昂揚が進んでいる。しかも、その質は、明白にアメリカ社会を統合した国民的価値観に対する根本的検討を迫りつつ、武装闘争と大衆的反撃

を深刻化している。周辺と下部は相互に異質であるが、強力に戦後アメリカ世界の秩序形成を支えたアメリカ反共ナショナルコンセンサスを引き裂きつつある。史上最強の帝国主義労働運動・組合も、最近の数々の教員・自動車・交通等のストに示されるように、労働貴族の地位の防衛という外見をとりながら、アメリカ帝国主義の世界地位の相対的後退を反映した不可避の傾向的な生活破壊に対する大衆闘争の時代をきりひらきつつある。

ヨーロッパ階級闘争も、相対的安定期―拡張期の闘争の性格を自然発生的にうち破りつつある。

イギリスは、所得政策に失敗し、ポンド防衛を破綻せしめた。ポンド切り下げは強権的な賃金凍結をプロレタリアートに強要しつつもなお、地すべりの危機をかくせない。

西独の財政危機、諸階級利害の拡張期における「調整」の破綻、独占ブルジョアジーと独占体労働貴族のブロックたる大連合政府の形成は、反合、賃闘の新たな展開によってむかえうたれている。

ヨーロッパ反戦闘争は一〇/二一において、広大な現状不信・離反の政治行動への転化を示した。

(中 略)

日本は急速に全戦線で実力闘争が常態化しつつある。

二、危機の普遍性

これら諸領域、諸国の階級闘争の普遍的な危機の根底が、戦後帝国主義世界支配の再編をめぐる闘争に起因していることは明らかである。

敗戦あるいはそれに等しい諸帝国主義国、日本、西独、イタリア、フランス等において、設備投資主導型の国内市場の膨張―拡大かていとして展開し、それは、国内産業構造の高度化―重化学工業化を形成し、独占体とその支配を強めた。更に、米英の低成長に對するEEC諸国、日本の高成長、その不均等発展を基礎とした標準化の進展が、国際的国内的に市場問題を登場せしめ、EECに代表的な先進国広域経済へによる過渡的解決も行きずまり、対外膨脹を必然化したことである。(国内、域内における資本の過剰)、第二に、独占体の帝国主義諸国間の市場ベースによる競争の段階は独占体、世界企業の市場再分割―経済的支配と長期の勢力圏闘争に転化したことである。第三に、市場再分割戦は、新たな質をもった後進諸国―旧植民地地域の再分割を急速に日程にのぼせてやり、この結着をめぐる角逐の過程こそ危機を政治的軍事的に全世界を、かつ国内縦深的に深化させるものに他ならない。後進国は単に反革命体制維持の見地から帝国主義支配の対象とされ、市場としての価値は極度に低下し、今後もそうだとする見解は根本的に誤りである。

米帝、英帝に一元的に掌握され、帝国主義共同利害と米帝独自利害の結合の世界戦略化に包摂されていた旧植民地は、第二期に於ける帝国主義の運動法則の現れが、まさにその体制下で、その体制に反抗せざるをえない行糧を、国内(あるいは域内)市場の拡大、高度化として進展し、重化学工業化と原料代替品の出現等が、第二期に於ける旧来の原料市場としての地位を(特殊に、石油、ウラン、貴金屬等は除き)低下させ、帝国主義国に於ける食料自給度の確保と、重化学工業製品市場の内包的発展及び「先進国間国際分業」を可能にしたことが、旧植民地―新興独立国の世界経済に於ける地位

ある。周辺―下層(国内的に)に於ける闘争と心臓部のそれとの一定の現象的乖離にもかかわらず、危機は心臓部に発して全世界に普遍化され、特殊に累乗されて心臓部に環流する行程としてとらえる必要がある。そして心臓部の革命的危機への転化は、まさに各国帝国主義の国際戦略に対応したところの国際革命の目的意識性を欠いては、すなわち一國革命戦略では闘いとれないことを確認しなければならぬ。戦後帝国主義支配の再編をめぐる闘争とはアメリカ帝国主義の圧倒的な優位性のもとに、戦後経済編成を可能にした金融基礎―IMF体制が、ドル・ポンド危機の進展として、解体の道を不可抗的に歩んでいることである。ドルインフレに基づく各国の国際的蓄積条件の確保と相対的安定期―各国の経済膨脹の時代は終了しつつある。再興帝国主義は、ドルリアメ帝優位の国際通貨体制の再編を自国の個別的利害優位の体系に結着づける争闘にならざるをえない。しかも、このことは、史上第三の市場再分割の世界的闘争の時代の到来と重層していることである。戦後帝国主義の現段階は、政治的、軍事的にも反共―反革命のアメリカ帝国主義の独自利害を基礎に編成された共同利害防衛体制が、まさにそのものとして復活―再興をなしてきた帝国主義諸国の絶対的不均等発展の結果としてつき破られようとしており、だが、共同利害―反革命体制の保持を必要とすることを、当面する市場再分割自体を単に後進国を席捲するのみならず「社会主義」をも対象として進展し、かつその結着は、米ソ冷戦―米ソ平和共存をいっそうグローバルに拡張した戦略的展望のもとにおしすすめられるであろうということである。戦後相対的安定期の、市場再分割の段階への突入とは、次のこととしてとらえることができる。

第一は、戦後革命の庄殺の上に開花した第二期の興活―再興過程

を傾向的に至少化してきた。

だが、新たな膨脹―帝国主義の生命線を、異った型の植民地市場の確保に見出させようとしている。これは米帝に對する再興帝国主義の再分割要求―進出としてある。そして異った型とは、一般に原料確保―軽工業製品輸出とは区別されて、第二期の重化学工業化(とその一層の高度化要求)を必然的要因として、その広域かつ独占的な市場を勢力圏として展望し、長期の戦略をいわゆる「開発構想」としておしすすめている。国家資本輸出、倍カン、特惠関税等がその武器である。

こうした戦略展開は、後進国内に新たな階級分解―階級闘争をもちこむばかりでなく、帝国主義―後進国の支配、従属関係の強化と帝国主義国間闘争を激化させる。そして、まさに帝国主義の市場再分割の要求にもとづくこの戦略展開が、第二期全体をとおして、経済自立…諸々の資本主義的計画経済を世界体系からも、国内関係からも破綻せしめざるをえなかったがゆえに共通している後進国危機に對する後進国地主、ブルジョアの階級的利害の防衛と合致することである。旧帝国主義宗主国に對する国民的統一戦線は破綻した。支配階級は帝国主義との癒着、ブロックによる危機解決の展望を見出した。帝国主義国間闘争は、まさにこの帝国主義がこのブロックを荷うかということである。(インドネシア、韓国等の軍事反革命政権―クーデターと日米帝の対応、ビルマ―「社会主義」に對する人民武装闘争と日帝の進出、更にインド等)

こうして、この関係の構造化から生み出されることは、米帝・再興帝国主義、後進国支配階級、プロレタリア、農民大衆のヘゲモニーの強弱、組合せの諸々の可能性をもちながらも、後進国階級闘争の激化―すべての帝国主義に對する解放闘争と一体化されること、

そして、このことは、市場再分割を政治的、軍事分割に移行せしめざるをえない。それは、四重に経済戦術を政治、軍事力で保証することを必然化する。第一に、対抗帝国主義と後支配階級の結合を争いうる威力、第二に、階級闘争の激動に権益を守り「安定化」させ支配階級にその手に余る抑圧力を保証しうる威力、第三に「社会主義国」に對抗する威力、そして第四に、帝国主義自内プロレタリア人民をナショナリズム・社会排外主義に統合する支配基幹、これらすべてが、帝国主義軍隊の対外的確立と発動として現われる。

第四に、「社会主義国」に対する反革命体制を、帝国主義の市場進出、独自利害―世界戦略によって、再編を展望しつゝ、それが米ソ共存が核ドウカツによる共存であったように、基本的に武力均衡―核均衡を拡大することをもとめつつ進展することは明らかである。

こうして、核保有を不可欠とする帝国主義軍事・外交路線の展開が市場再分割に随半―主導し、その全世界を席捲することにこそ世界各領域の階級闘争、解放闘争の一体性、同質性、同時性の根拠があることを認めなければならぬ。

更に、第五に問題にするべきは、ドルボンド危機に国際通貨体制の危機の過程が、各帝国主義にもたらしている第二期高成長の終エンと階級矛盾の深化を「国際的に解決する」展望こそ市場分割戦なのであって、内戦は国際戦略のもとに包摂されていなければならないことである。国内危機の予見の上に長期的国際戦略の展開こそ、国内危機を物理的・イデオロギー的のりきる攻撃の主要環である。

的要素と結びつきうるものであり、(そうでなければ)革命戦争は展望をたたねるのであり)

- ① この闘争自体が、高度に目的意識的であるのみならず、
- ② 現在(革命前段階)と未来(革命情勢II国際恐慌)にわたって、生活と権利の實力防衛闘争に大衆をして決起せしめ、かつ、権力獲得能力を付与することが、軍事・外交に対する反戦闘争の反帝反政府闘争としての展開にかけられていることを確認しなければならぬ。当面する政治闘争はまさに経済闘争を包摂し、政治の主導のもとに経済を結合することが問われているのである。これは根本的に対外戦略と資本攻勢の關係に規定されている。とともに自然発生的昂揚がいかんにか権力獲得の主体を見出し得るかという問題である。だから、われわれは統一的な世界暴力革命を目指す現段階における環が、
- ③ すべての国際的闘争を結合する反帝反政府闘争として
- ④ 経済闘争を現在も未来も権力獲得の基盤としうる主導的闘争として、国際国内的に反戦闘争の革命的意義を設定しなければならぬ。かかる位置づけの中でこそ、一〇・十一月闘争は語られなければならない。七〇年安保闘争こそこの戦略的展望を求めているのである。

三 現段階における国際反戦闘争の革命的意義

われわれが国際反戦闘争を現段階の戦略的要素として提起するのは世界単一のプロレタリアートの階級形成に對して国際国内的に分断と対抗の論理をもつて現に帝国主義の世界戦略が登場しているからである。

軍事・外交路線として具体化されるそれは、帝国主義国プロレ

こうして我々は、基本的な戦略視点を次のように確認することができる。

すなわち、帝国主義の侵略と抑圧、反革命の世界戦略II軍事・外交の展開に對し、

1. すべての帝国主義支配階級のブロックに對する民族解放II社会主義革命をインターナショナルな武装解放闘争としておしすすめる後進諸国人民の任務、これが①プロレタリア世界革命の予備軍の立ちでけなく、不可欠の戦略部隊の一環であり、(二つ三つのヴェトナムを激発し、持続せしめること)、②その勝利は個別的にはなく、他の戦略的要素との時間的場所的に統一された帝国主義打倒の一環として決定づけられているゆえに、

2. 労働者国家は、また、そこでの革命的階級闘争は、武力均衡核ドウカツに屈服した一國革命路線を粉碎し、直接に帝国主義軍事・外交に對して物理的・イデオロギー的に打撃を与える対外的革命戦略の展望をもつたプロレタリア独裁運動でなければならず、

3. 決定的に、すべての領域の闘いを結合し実際に結着づける環はすべて、帝国主義諸国に對するプロレタリアート人民の、自内帝国主義の破綻・崩壊を自内政府打倒・武装蜂起内乱に転化すること、それは密集した国際反革命を分解せしめ、発動を不可能にするのでなければならぬ故に、国際的同時革命でなければならぬ。その根拠は、国際恐慌の結合に對して与えられるであろう。

問題は、

① 国際戦略の破綻・崩壊はせまる主体的な「阻止闘争」による現実のソガイと自内プロレタリア人民の革命隊への結集として、外

アートを帝国主義的民族として、後進国、「社会主義」、他帝国主義国プロレタリア人民に敵対させることによつて、危機解決の国内主義的形態を指向するものである。だが帝国主義の国際路線は国内危機の解決の擬似国際主義であり、その展開は、旧来の第二期階級闘争―国家支配の全面転換、協調、安定、民主主義にかわつて、プロレタリア人民に對する行政的イデオロギーの攻撃を利益―防衛侵略と他民族抑圧の合理化として、強権的にくわえ、かつすてのべたようなすべての国内核保有を必然化する帝国主義軍隊の形成によるへ域内平和―帝国主義ナショナリズムへの統合を一貫して前提し、かつ域内平和を実体化する帝国主義超過利潤による買収を實現していかなければならぬ。(現にそうであることはまた別である)軍事・外交の展開は、直接に帝国主義国プロレタリアートを端緒に對しても「勝利的過程に對しても、「去勢」することなくしてはありえないし、プロレタリアートはこれに屈服することによつて抑圧民族として登場し、諸国人民の革命の事業を二重に裏切るのである。だから現に開始されている世界革命の第四のめらしの時代の序曲―その前段階は、まさにかかる敵対と分断の具体的攻撃に、真に国際的な統一が、いかなる帝国主義的国際戦略にもなく、その国際戦略の永続的打倒を通しての世界革命以外にないことを、全面的政治バクローを通して明示し、世界単一のプロレタリアートを媒介する帝国主義国プロレタリアートの任務が、すべて共通して、①すべての帝国主義国際戦略に反対し、とりわけ、自内そのものに反対し、侵略と抑圧、反革命の帝国主義政府打倒の旗の下に闘いぬくこと、②いかなる自内他民族抑圧をしてはならないがゆえに、被抑圧民族の「民族自決」II民族解放社会主義革命を支持し、革命戦争と連帯してすべての帝国主義と闘うこと、③「労働者国家」の防衛、を主軸とした国際反戦闘争

を、目的意識的な統一世界革命戦線部隊の最前衛として、闘いとら
おはならない。これが、ブルジョアジーの、全機構的な攻撃に耐え
ぬいて得られる高度に目的意識的な事業であることは明白である。
だが、われわれはこの目的意識的外部注入だけが、すなわち、プ
ロレタリアートの国際主義意識—国際主義闘争こそが、帝国主義の
擬似国際主義—帝国主義ナショナリズムに吸収される特殊利害意識
を粉砕して、権力闘争の主体を形成することを確認しなければなら
ない。そして、そのような目的意識性をプロが必ず理解し、体得
するであろう事を一九六七の諸政治闘争は萌芽的に示したのであ
る。

具体的に、国際反戦闘争は、ベトナムとの連関を日帝が一層ふか
め、かつ後進国革命戦争が拡大の現状にあり、のみならずNATO
再編が帝国主義戦略の確執として登場し、更に日米安保の改定によ
る日米反革命協調と独自利害をめぐるヘゲモニー争いの登場に対し
反帝反政府の巨境をこえた統一戦線にもとずいて押し進めることが
死活問題として問われているといわねばならない。

第二に、国際反戦闘争が権力獲得の環であることは、政治闘争が
経済闘争を包摂し、政治闘争の主導の下に経済闘争を結合し、経済
闘争の決定的爆発を権力獲得に至らしめる決定環であることと、全
く等質的に把握される必要がある。

われわれは経済闘争の徹底抗戦上に権力かくとくへの転化の基軸
を設定する経済主義左派の誤謬を二重に銘記しておかねばならない。
経済闘争の最極点はあきらかに革命的危機の基盤を形成するであ
る。社会主義的生産の組織化の意識と実践とそこから直接に形成さ
れ、権力かくとくを決定づけるのではない。独裁の樹立をとおして
のみ、自らの社会的転形の道を歩みだすのであって逆ではない。そ

久しく忘却のかたに、無原則にも放置されてきた、国際共産党
再建はいまやわれわれの獲得目標であり、われわれの戦線と不可分
である。

反戦闘争のプロレタリア国際主義ヘゲモニーの貫徹はわれわれに
国際反戦闘争左派のブロック形成をもって戦線の結合と統一戦線、
国際党派闘争を媒介する国際反戦インターの直接の準備を要求して
いる。

① われわれは国際共産党を次の原則をもって用意しなければな
らない。

④ 戦線の基本視点の統一

この観点から、ソ連派路線に対する党的、絶えぬの明確化と、中
共産党毛沢東路線の周辺革命的限界の批判的国際論争と党派闘争
OLASIIゲバラカストロ戦線に普遍化の契機を注入し、ブラ
ック・パワーの思想のマルクス・レーニン主義的純化と急進主義行
動体系の戦線化の援助、これらを通して、世界的に革命的第三潮流
をインターの母胎として連絡情報機関の設置から国際的な諸々の
党的闘争の一致した展開の開始から始めるべきである。

⑤ 各領域で問われる国際主義的国際反戦闘争の実践的方向
性と行動次第に至るまでの一致した展開

具体的には、

1. 日米安保改定期における日本プロレタリア人民の実力闘争に
対し、アメリカ、反戦闘争、黒人闘争の融合による日米プロレ
タリア人民の根本的敵対者のバクロと実力闘争、これら実力闘
争の方向性が日米両帝国主義の打倒をめざして後、人民の革命
戦争と目標を共にすることを明らかにし、直接、ヴェトナム解
放戦線の、一般にアジア、LAのすべての武装解放闘争勢力が

して、権力かくとくへのプロレタリア的結集—対抗権力的形成は個
別利害の総和としてではなく、個別利害の 根源的統一としての政
治闘争によってこそ媒介される。それは戦線的には集中的政治課題
をめぐる闘争の反政府闘争への転化—政府打倒と権力諸機構の粉砕
として経路するであろう。危機における個別利害の追求が
人民的利害の基盤の解体—再建としてのみ権力闘争に転化するの
あるから、ここでの政治とはプロレタリア国際主義への目的意識的
な結集以外のなにもでもない。経済闘争の追求のみからは、
危機における、自らを帝国主義民族としての自己から、世界プロレ
タリアートに解放する過程は封印されてしまっているのである。

一九一七年十月革命の成功が、圧倒的な危機における大衆の昂揚
のなかでその昂まりの質を規定した大衆の「小ブル的無自覚性・軽
信性」(レーニン)との闘争によってのみもたらされたことをわれ
われは知っている。その基準はプロレタリア国際主義にこそあった
といわねばならない。

そして、経済闘争の追求を可能とさせる指導の展開の質自体
に、経済的領域における攻撃のもつブルジョアジーの全国家性に対
するわれわれの包括性が要求されるということを無視してはならな
い。

四 国際共産党及び国際反戦インター

以上の如くわが戦線とその過渡的媒介について、普遍し特殊に目
標設定するとき、われわれの革命党及び当面する実践の見地からみ
た組織上の飛躍をも、プロレタリア国際主義に徹することが導きだ
されるであろう。

実力闘争こそ唯一の兄弟の道であることを宣言し、

キューバ、中国が、社会主義のトリデとして日米人民と共同
して反撃することの明確化を闘いとする。

一言でいえば、日米安保に対する日本ロアメリカロヴェトナ
ム(アジア)社会主義(キューバ、中国)の戦線的に一致した国
際的実力闘争の実現、更にこのことは特殊な前哨戦として、エ
ンタープライズ—沖繩(自主防衛)闘争においてすでに実現さ
れてゆかねばならないし、それに随伴するあらゆる諸形態の国
際主義の追求、われわれは国際主義を闘争の生活の「スミス」に
日常的組織化せねばならない。

ここでの主要環は、日本の革命派がアメリカの革命派をして
安保反対の実力闘争を正しく位置づけさせ、公然たる反政府闘
争にたちあがらせることである。

2. NATO改編に対する凡ヨーロッパ左翼の共同行動綱領—実
践

これらのことは党レベルで検討され、大衆の実践化されねばな
らない。

更に、国際反戦インター、国際学連の意志統一。

⑥ 結成の尺度、形態、接近の組織的過渡措置等々はここではいわ
ない。

⑦ 国際反戦インター

国際反戦インターは、ここ数年來の、ことにヴェトナム反戦のヨ
ロッパ、アメリカにおける昨六六年春、秋統一行動、六七年春、
一〇・二一統一行動、十二月闘争をもって、すでに連絡機構と実践
的連帯をもちつつある中ですべての反戦組織的闘争の暴力革命左
派ヘゲモニーの貫徹と修正主義、中略路線、市民主義をのりこえた

戦略的展望と部隊を形成するべく、緊急不可欠であり、ことに、安
保、NATO闘争を直接の契機としてなされるべきである。われわ
れは語の正確な意味で二〇世紀後半でのチンメルブルド左派を世界
大の規模で、はるかに実践的基盤と展開力をもって結成すること
である。

われわれはおくればならないのだ！

五、世界的諸ヘゲモニーの評価

現実の新たな運動体をもった国際的ヘゲモニーについて原則的評
価を与える必要は増大している。如上の世界階級闘争の第四の波と
しての抬頭が、公認国際共産主義運動指導戦略の限界と裏切りによ
って作り出された米ソ平和共存を世界的枠組みとする、戦後世界帝
国主義支配秩序に対する反逆根底の世界破壊要因である以上、かか
る闘いのヘゲモニーが、レーニンの時代以来の、諸々の政治潮流と
は始めから無縁の、あるいは犯されることがなく絶縁した、更には
修正主義からの離脱を事実上開始している。そのような諸潮流であ
ることを我々は知る必要がある。新たな大衆の闘いと結合した革命
運動は、まさに不断に状況に追いつき、状況を打ち破る、新たな革
命潮流の現存在の全き革命的意義の確認と、様々な限界の突破をな
しうる普遍的世界戦略の提起によってこそ、飛躍を決定づけねばな
らない。

OLAS、米黒人反乱、中国の造反文化革命についてみよう。ヴ
ェトナムとヨーロッパに関しては補充的にとどめたい。

④ OLASの革命的意義はどこにあるか。

われわれが、OLAS第一回大会の諸決議を注意深く読み、か

軍事戦略の要であるという、当面する焦眉の任務の核心を实践的
インターナショナルリズムとして明示したことである。

そして直接には植民地後進国のあるいはLAのインターナショナル
に見えるこの試みが実は、①キューバ労働者団家の永続革命の
道、権力をにやめたキューバプロレタリアートと、未だ権力奪取を
遂げていないプロレタリアートとの統合された戦略として提出され
ていること。②OLASが全幅の革命的信頼を持ってむかえ、かつ
カーマイケル自身が自己自身を同一の陣営として位置づけたように
米帝本陣における革命的潮流、運動との政治的、軍事的なグローバ
ルな戦略的統合を追求しており、ここには、帝国主義、「社会主義」
「第三世界」総体の階級闘争、プロ独、社会主義の実現のための戦
略、党・運動のインターナショナルの萌芽があるとみななければなら
ない。

このことを認めないもの、軽視するもの、更には単なる「精神的」
連帯にとどめて、統合を求めないものはすべて決定的な日和見主義
であり、必ずしもそのような自己自身によって革命の事業が裏切られ
るのであることを覚悟せねばなるまい。

② ブラック・パワー・SNCC・カーマイケル

一九三〇年代以来の地殻変動をむかえているアメリカの階級闘争
の諸ヘゲモニーの著しい特徴は、次の点にある。

- a 既成インテリの体制内化、既成党（共産党のみならず種々のト
ロッキスト党派）の没落にとどまらず、新たな世代のインテ
リゲンティアの運動理念（参加する民主主義）をもった政府・団
家からの離反の広範な永続的な開始、運動体SDSの登場
- b 一貫してアメリカ帝国主義の階級支配の客体であり、与件であ
った黒人の政治的解放闘争の帝国主義打倒闘争を推進する理念・

つげバラのあの「よびかけ」を革命家の理性と良心をもって、うけ
とめるならば、次のことが明らかであろう。

第一は、現代階級闘争史上、時代を画する、あの修正主義の「勝
利」であり、国際人民に対するほうとくであった、ソ連共産党二九
回大会の、「平和共存—革命への平和移行」のドグマがLA革命の
現実の検証を避けて否定され、武装解放闘争戦略として体系化され
たことである。しかもそれは、キューバ武装解放の経験に学んだア
メリカ帝国主義、アライ政権の対ゲリラ戦略に対抗しうる唯一の
道として設定されたことである。

第二は、武装闘争は、民族独立を自己目的化した戦略のもとでは
なく、反帝反政府闘争の内実が、プロレタリアートの独裁社会主
義を当面の目標とすることに直結されていることである。これは旧
来のスターリン的修正主義二段階戦略の根本的克服であり、かつ、
ヴェトナム革命戦争それ自体に真の戦略的展望を与えると同時に、
まさに現段階の後進国解放闘争の世界帝国主義体系打倒につきす
まねばならない。プロレタリアートのヘゲモニーの正しい規定があ
るとを見落してはならない。

第三に、地域的あるいは植民地インターナショナルリズムの戦略と
機構に、プロレタリア国際主義の具体化を特殊に一步前進せしめて
いるし、普遍的な世界戦略に対して道を閉ざすことなく留保、限定
し、飛躍の条件を抽出したことがある（あるいは真に求めていると
いってよいのだ）。後進諸国の闘争解放が一旦の規模の革命の総
和ではなく、相互に統一された戦時戦術の下での国際的同時革命を
展望することを明確化したこと、「二つ三つのVIETNAMを、
無数のVIETNAMを」のスローガンは、すべての帝国主義に対
する、国際的に結合された解放闘争の対シが、現時点からの政治的

運動・組織の急速な抬頭、SNCC・ブラック・パワー。

c アメリカの対ヴェトナム策—世界政策をめぐる闘争を二分する

反戦闘争とその指導体の急進化。

d 世界的労働貴族—白人プロレタリアート本隊に、断続的に忍び
よる危機を反映した、組合主義左派形成の条件の成熟。—未登場
これらを主観的願望で一元的に結びつけてしまうことはできない。
それらは相互に分離しており、対立さえしている。客観的には、ア
メリカ帝国主義の経済的地位の後退にもとづく国内攻撃の、とくに
下層へのしわよせが、政治的軍事的地位—世界政策の後退と亀裂か
らもたらされる「反共・自由陣営の防衛」のナショナル・コンセン
サスの動揺とあわせて、政治的イデオロギー的分解—再編が開始
していることとしてとらえることができる。だが、主要に、三十年
代のゼネストのあらしを通して百年来の産別労働CIOを獲得した
にもかかわらず、ニューディール、第二次帝国主義戦争、「反ファ
シズム」聖戦にのみこまれ、典型的な帝国主義的労働組合運動との
協調体制の枠に屈服し、去勢された一時代のプロレタリアートの破
壊を、革命的プロレタリアートの形成—権力獲得に結着ずけるには
高度の目的意識的な革命党による闘いを不可欠とするであろうし、
帝国主義的労働運動—帝国主義的民主主義の蓄積された害毒に対す
るラディカルかつ組織的な、包括的かつ打撃的な闘争が不可欠であ
る。このことは、アメリカ革命勢力の「白人労働者」に対する過渡
の、党派性と社会的基盤の分化、かたよりとしてあらわれるであろう
ことをわれわれは知らねばならない。

SNCC—ブラック・パワーの組織・思想・運動にアメリカ革命の
原動力を見出すのはこの故である。彼等は最も非和協的な反帝・反
政府派であり、かつプロ独—社会主義の現在の擁護者である。その

ブラック・レボリューションは、「大衆の中の帝制主義白人社会」から公然たる分裂・自立を通してしか黒人を革命勢力たらしめえず白人労働者の抑圧的地位と思想からのリダツト階級形成、を実現できないことを対象化したものに他ならない。アメリカ革命の運動と党は、かように、社会的基盤としては別箇に進み一語に打つ行程をとっている。われわれは、ブラック・パワーと直接に党に結合し、更に、全階級、反政府運動……ことに白人労働運動の新しい波と反戦闘争を結合された線戦とする戦略的展望を具体的に意志統一することが決定的である。

③ 中国文化革命と毛・林・コースリ造反派・奪権派

文革に対する評価はいわゆる「中印派」が帝制主義心臓部・及びソ連においても分派を形成していることから、また権力を闘い合ったプロレタリアートの「転換」であることから、極めて重要である。それは帝制主義の攻撃の激化が生む階級闘争に規定され二重の過渡期にある印内的要因に農民性・後進性との結合として、特殊な承継革命の表現である。問題は、指導部が世界戦略と帝制主義プロレタリア運動を包摂して提起しているか、しうるかにかかっている。

ソ連の印共産主義的路線から逆規定した生産力主義的世界戦略の発展・資本制下プロレタリアートの社会主義への接近・後進の非資本主義的発展の道の保証は、帝制主義、戦後第三期において至るところで公然たる破綻・分解と転換をつきつけられた。ベトナム戦争はそれを促進した。共存路線批判は中印が民族解放闘争の徹底化を目指す限りで深化し、かつ、必然的に共存路線を暗黙の前提としてきた中印内建設路線の方向性をあらためて問い正した。印社会主義建設を資本とし、そこから反米一元論民族解放統

一戦線論を据える中印共産党の総路線も修正と転換がせまられた。五三年、朝鮮動乱の終結で、米ソ分割支配が新しい均衡のもとに再固定化されるや、中共はソ連の援助をバックに中印における印社会主義建設にむかった。即ち、「農民の生産手段共有形態」と「思想の起爆力による生産力発展形態」との組織的総合と人民公社路線に據ける三面紅旗路線である。

この印内建設大躍進 路線と表裏となすものとして周恩来の「平和五原則」が提唱された。一九五五年以降の「反米一元論と中間地帯論」の集中的表現、バンド会議、日中友好、中印友好がそれである。印社会主義建設を共通分母とするソ連の矛盾は米帝との共存を基調として印内生産力の発展を目指すソ連の共存形態と、諸悪の根源を米帝に求め、他の帝制主義印を中間地帯と位置づけ、印内生産力の発展を目指す中共の共存形態との対立として、徐々に進化した。対米の位置づけをめぐる対立は、五七年、六四ヶ印共産党会議での毛沢東に対するソ連の核弾頭譲渡拒否によって深化した。ソ連の中印経済援助の中止と重なる大躍進の失敗は、社会主義建設の印的官僚的コースによる人民的コースの排除として、毛沢東の手から劉小奇へと移った。

官僚コースの実権派は人民公社形態を形骸化し、所有形態の私有化と個人的欲望刺激策による生産力上昇政策へと転換していった。中印の文化大革命は、根本的には、中印の印社会主義建設路線が中印対立抗争で突き当たった矛盾を、人民のエネルギーの爆発によって止揚するものとしてあった。ここに、巨大な人民が決起する社会的基礎をもっていた。文化大革命の根底的性格が、革命後に毛沢東自身が設定した印社会主義建設路線の矛盾を止揚するものであれば、それは劉派の打倒ですまされるのではなく、毛沢東戦略の

全体系を、転換させる新たな総路線を提起しなければならないものであった。根本問題は、人民公社形態で大躍進を行ない、自力更生で印社会主義を再度追求することも、対外的に「米帝一元論と中間地帯論」の結合を再度設定することもできないどころにある。人民公社に変わるべき人民の社会的権力形態が明確に示し得ず、三結合形態として発展させるべき生産力発展の方向と国家形態の確保が不明確である。

対内政策においては、印社会主義路線をとるのか、労働者国家建設を世界革命との関連でうちだし、現在の危機から脱出するか（文革は客観的にこの行程に歩み出しているものであるが）、体系化された路線は未形成である。

対外的政策では、インドネシア共産党の九・三〇敗北、仏帝ド・ゴール政権との裏切など、毛沢東路線自身の「米帝一元論と中間地帯論」の結果を実権派の責任として追求することによって転換をはかった。こうして全帝制主義と敵対し反共タイ印をはじめ、ビルマ・インドネシア等、かつてのバンドン友好印内においても武装解放闘争を指令、香港反英暴動指導で対決闘争をも挑んだ。毛沢東の対外路線の転換は、一定の印内経済基盤を持つ印での印社会主義建設路線がソ連の援助打ち切りを契機として破綻する過程を通して始まり、この内的矛盾にベトナム解放闘争をめぐる階級闘争の激化という外的インパクトが加わっておこったものである。だがこの部分的転換は印内建設路線と世界革命との関連における総路線の転換を意味するものではない。

われわれは、中印文革に対する確定的評価を、次期中印党大会の提起をまっせに行なうよう、留保しておく必要がある。中印より存立基盤の浅く狭いキューバでは、米帝海軍の洞窟の前

にキューバから核を引き揚げたソ連共存路線の無力、米帝反革命軍のドミニカ革命の武力弾圧とソ連の傍観から、完全に共存路線に見切りをつけ、カストロ政権維持のためにも中南米への永続革命が志向された。OLAS会議におけるゲバラ・カストロの中南米一段階社会主義革命路線はこのような条件から形成されたのである。それは、キューバ・インテリナショナルな革命の根拠地としての本来の労働者国家の任務を正しく提起している。

われわれは、キューバ・パラグアラ・カストロ路線の帝制主義印労働者革命運動の評価の留保と自己の部分性を自覚したインテリナショナルな革命路線をその特殊の提起としての正しさを全面的に承認し、彼等の「留保」を補填し、再構成することによって普遍的戦略のかくたく世界党のきそをつくりださねばならない。

第二章 日本における階級闘争の性格と課題

一、日帝の対外膨脹、市場再分割の必然性

① 日本資本主義は、第二期発展の型を崩壊させ高成長の終えん印際競争の激化における「寡占体制」の形成による産業再編の全機構的な展開と、対外膨脹・市場再分割の展開に生命線をもつ段階に到達している。

② その基本的な推移は次に示される。

第一は、設備投資主導型高度成長の「構造的不況」からの回復過程が顕示したように、財政、輸出主導型経済への転換である。資本・貿易の管理「封鎖」体系の中で、基本的には印市場の内包的発展の時代はすぎ去った。戦後の「経済民主化」措置と金

融的、産業的・階級的な高成長条件を汲みつくして、日本資本主義の生産力は一伊市場のわくを突破してしまつた。

高成長は成長の基盤そのものに根本的な変容を結果した。産業構成の高度化、重化学工業化、独占体の形成と支配、諸階級の分解と、「若年労働力」の不足。

だが、第二に、それは「際競争」資本自由化「際独占体の死闘」の始まりの段階で、原料、食糧の確保と産業構成の全體的な再編更には独占体間自体の旧来のワンセット主義の脱却、「協同的寡占」の形成と対外膨脹「勢力圏獲得闘争」とを重層的に必然化している。それは現に進展している。

⑧ 国内独占体同志の国内市場闘争の当面の結着「寡占体制への移行」が、国内市場の外「寡占体」からの防衛をかけたなされ、かつ、寡占体制の要求する農業、中小企業のラディカルな切り捨て、再編がなしくずしに進行しており、「際競争」の強化が、旧来の寡占「中小企業、工業」農業、資本家階級「プロレタリアートの「国民経済的編成を、日本」勢力圏の特殊な広域化に於て長期に展望せざるをえない事態が、現段階の特徴である。

⑨ アジア太平洋開闢構想「それは本年初頭来、急ピッチで展開、具体化している」が、日帝第三期の経済戦であり、この下に諸々の国内経済政策の展開は位置づけられる。そして、この「開闢構想」としての市場再分割が、全面的に「国家権力、階級関係、統合イデオロギー」を帝「主義政治、軍事の登場として、内外にまたがる転換、帝「主義ブルジョア」の「第二期の清算」を不可避とする。

④ 日帝の、アジア太平洋開闢構想における「自力害」経済戦は以下の通りである。

第一に、後進諸国市場は、安定したものでなければ、無意味である。一貫して、進出、侵略と反革命政治安定は相互に補完する。とりわけ、日帝の対外膨脹が後進「危機」の深化と国民「ロック」の対極への分解、軍事反革命政権の樹立か永続社会革命武装解放闘争か、敵しく問われる時点で必然化していることは、後進諸国ブルジョア・支配階級（それがすでに反共反革命として持続してきたか、それともいまだ民族統一戦線政府の外見を保っているか変質しつつあるか）の階級闘争抑圧の国際化に対する日帝の軍事的政治的テロ入れ、あるいは強制を不可欠とするからである。

第二に、帝「主義開闢」反革命軍事体制一般ではなく、日帝の「自力害」を裏付けるものとしてのそれが第一のことからひき出されるのであって、具体的には日米関係「安保」が、日帝の政治的軍事的地位の歴然たる証左として拡大強化「改訂」されなければならない。第三に長期的に武力「核均衡」による中国の変質「平和共存」を強制しようという展望に於て、中国「後進」人民階級、解放闘争の相互浸透を分断できる。

第四に、国内諸階級の権力からの公然たる離反のはじまりと自然発生的闘争要因の蓄積、目的意識的実力政治闘争の展開に対して明確に「平時」の警察機能をこえた軍事的治安を以てそなえることであり、第五に、物理的粉砕のみならず、経済的力量を政治的力量「軍隊

重化学工業独占体の「際競争」力強化と対外市場進出「市場問題」の解決を、対極東、東南アジア旧植民地諸国の「経済危機」「解消」、政治的「安定」への介入を通して「自力害」勢力圏を展望し、それを軸に、対米市場闘争の堅持、対「労働者」への市場進出を推し進めることである。勢力圏への組み入れは、後進諸国ブルジョア「と」の結合、国家資本輸出、借款、援助を武器として、軽工業の創出、農業開闢を「内過剰生産力」の輸出によって進行されている。日韓談以降の「韓国」に対する日本資本の急速な進出に典型的である。

あいつく東南アジア開闢関係会議のくわだてや、今夏、今秋の第一次、第二次東南アジア外交の結果がそれを物語っている。

佐藤訪東南アを通じて、約束された「援助」は東南ア農業開発基金一億ドル、他、総額六億ドル以上を新規追加、今後の約束として設定している。（韓国二億、台湾一・五億、タイ六億、南ベトナム数億、インドネシア一億、フィリピン一億等）

大五年日韓を突破口として、日帝のアジア進出は、資本輸出、後進国経済援助が著るしく増大している。ビルマ以東で商品輸出は優位にたっているだけでなく、最近民間投資で上位をもつ地域も出現している。インドネシアに対して、債権国家ではアメリカに次いで巨額の借款を提供し、発言力を増大させ、外国帝「主義」に対する闘争を強めるとともに、市場進出、侵略の拡張を行なってきた。これのヒヤクとして、東南アジア訪問を位置付けることが必要である。そして、この突破口と展望の下に、ドル、ポンド危機の重圧をはらいのけつつ、①農業問題の深化に代表される諸階級分解と利害対立に対応し、②財政破産化に伴なう二・三年後に切迫する危機に対する行政合理化等を位置付け、③国家企業部門への合理化を貫徹して、帝「主義」対外路線をめぐる直接の利害関係を幻想的共同利害に

として国民に承認させ、権威的イデオロギー的統合軸として軍隊を定位することが要求されるからである。

こうして、帝「主義」軍隊の形「軍事」外交路線「東南アジア市場」獲得が、延命の現現環として、対米対中戦略を包摂する当面の基本路線として設定された。

二、諸階級の分析

諸階級分析と階級関係、国家再編をとらえる基本的視点は以下の通りである。

① 第二期の帝「主義」復活「独占」中心の高成長、強蓄積を支えた「先進資本主義国」に特殊な階級構造「自立」自営農民の膨大な存在と工業それ自体の二重構造「は動揺」にさらされ、すでに大量の変容をなしながらなお極端として、国際的展望をもつた再編攻撃の対象にされている。

② 金融寡頭制の成立・支配を結果するとともに①のことは現実「に」旧来の国民経済の論理に包摂された階級存在（生活・生産）要求の社会的充足「闘争」に對する転換を迫る攻撃であるから、広汎な権力からの生活利害に基く離反が、階級分解、移動の不可欠の特性として進行している。

③ 中小資本の没落「倒産」は構造的な不況以来、一貫しており、この十月は史上最高を記録した。これは、六〇年以來急速に進展してきた「斜陽産業」不良企業、不均等部門の統廃合が、拡大過程に陰ベイされてきたこととあいまって、経済の成長率鈍化に際して、失業問題を公然化させる要因である。

④ 農業の構造的危機は、戦後農地改革の歪小性「保護政策」の限

界が基本的農政の展開によっても、一貫して米価問題、財政危機との悪矛盾を再生産することに露呈している。兼業農家、ことに第二種が増大し、挙家離村をあまり伴わない膨大な労働力人口がプロレタリア化している。

⑤ プロレタリア人口は、かつてないスピードを以て増大した。それは人口構成中最大の階級であるが、没落産業と新興産業、独立体と中小企業、切りすて部門職種と拡張発展部門職種、新規流入者とそうでないもの等々、複雑な階層構成をもっている。これらを我々は、権力との関係、資本との関係を統一的に次のようにとらえる。

⑥ 第二期において、二重構造を拡張、再編しつつ、独占が中小資本、農民を収奪して自己の機構に包摂し、政治的ブロックを形成した関係は、基幹産業、重化学工業独占体の労使協調を主軸に、対外関係に強権的イデオロギー的に包摂するブロックへの拡張が促進されている。

新興中間層、技術者層、上層労働者が、権力に独占資本の排他性を荷う階層として、新たな支柱にとりこまれようとしている。

基幹労働者は、この関係の成熟を第四次合理化への総敗北として決定づけられるかどうかの位置に直面している。第三次合理化への屈伏と闘争なき沈黙が今日倒産一危機の中の中小労働者の反抗を展望のないものにしてしている。だが、国家権力を行政権の肥大化によって統合し、独占「独占労組」を支柱として、諸々の労働者・下層農民、没落層の敵対的行動を粉砕し強権支配する構造は、当面の結着を、基幹部革命の「正規軍」の登場の如何を、公労協、公務員に集中される合理化に対する攻防とそれら反合闘争の体制的権力との闘争への推転の環を包摂する七十年安保闘争に委ねている。

いずれにせよ、第二期に根本的にとって代わる第三期―第四期の

権力編成は、極めて対外的幻想をもったイデオロギーと強権（ナシヨナリズム）にうらづけられて、その実体の獲得として、推し進められよう。

⑦ 現実に諸階級は、旧市民ブロックのラディカルな解体、市民的イデオロギーの崩壊を政治的に表現しつつある。日和見主義は、社会排外主義に転化している。その転化に現在と未来を直接かけられない者、社会排外主義と公然と敵対する大衆の登場が亀裂をついて始まっている。大衆の中の政治的構成は、①ブルジョアジー社会排外主義、②潜在的ファシズム ③革命的第三潮流として区分される。社会はこの分化を③の方向で推しすすめないが故に分解の対象とされる。日共は再び国際的権威に依存せざるをえない。我々③は、社会との党派闘争によって、④への転化、④の勝利をばみ危機爆発におけるファシズムの抬頭を分解しうるとせねばならぬ。

三、国家再編の型と革命前段階の日本階級闘争

諸帝国主義の危機の、国際的解放と史上三度目の市場再分割として訪れ、内外にわたる帝国主義反動の形成が、国際通貨体制の揺らぎとそれに伴う諸攻撃と重層して進展する現段階が、国際・国内的に次の直接的危機の転化の時機での諸階級の戦闘はいちと部隊編成を結着づけるといふ意味では、明白に革命の前段階としてとらえる必要がある。帝国主義ナシヨナリズムの勝利か、それともプロレタリア基幹部労働運動と共産主義の結合し革命の正規のかくくによる世界的戦闘はいちの確立か―当面する闘争―まさにここ数年の安保七〇年闘争を通して、われわれにかく問題はたてられている。

登場を包摂して闘いとらねばならない。

② 諸階級の生活利害をめぐる争いは、構造的な物価昂騰・税負担の増大、社会保険の改悪の進行するなかで、諸々の自然発生的闘争要因を蓄積している。主軸は労働者階級の質闘―反合闘争にある。

当面する反合闘争は民間第三次合理化への敗北の意味と現時点のそれがもつ全国家的規模のナシヨナリズム攻勢の一環としての特質をふまえないければならない。（生活利害―企業利益―臣益―国防）

国際競争の一層の激化・内外市場での国際独占体との死闘をたえぬくための産業再編―第四次合理化のあらしは、安保から直接々統する「決戦」である。

現時点で財政硬直化―行政整理の不可避性と公労協（運輸・通信政府部門）に集中する合理化を連続した実力闘争で闘いぬくことは第三次合理化の敗北をくい止め、全労働運動の社会排外主義的統合をつき破り、安保政治闘争と結合し、第四次合理化に対する独占体労働者の本格的登場を促す戦略的な要である。

公労協反合闘争によるプロレタリア各層の個別闘争とそれ自体の権力闘争への転化、このことが革命的指導部の、日帝総路線との等質的な把握―政治との党的活動における統一をとおして、安保闘争にプロレタリア大衆闘争の基盤を提供し、実践的に結合せざるべきものと位置づけられねばならない。

のみならず、これは、われわれの政治のもちこみを通じて、社会の分解―戦闘的部分の革命的大衆潮流を闘いとる決定的な要素である。

① 安保七〇年闘争を突破口に、革命の永続的發展を闘いとれ。われわれの安保闘争は、沖繩―国防―安保という連続の中に、国防主義任務と諸階級の闘争の前線を構成する。それは一〇・八一―十二型の闘いの質量的發展深化として連続的に闘いとらねばならない。政治ストとの結合の展望をもった実力街頭闘争は同時にそれが帝国主義軍隊の形成に対する闘いであるがゆえに、イデオロギー的実践的に、軍事綱領を媒介とした国家の型と国際的役割を提起し権力闘争への推転を革命前衛の任務として問いたす。

国家再編の型を帝国主義が提起し自衛隊がその主軸に構成され、階級闘争に政治過程に登場する發展段階はすでに七〇年闘争自体を個別改良―民主主義闘争として限定することなく安保破棄、改訂阻止を帝国主義軍隊の解体にいくとくと同質化し、連続的に権力奪取を展望しうるもののみ、闘争指導になりきれることを意味している。

沖繩では、軍政打倒―基地撤廃が「すべての帝国主義からの解放」とますます結合せざるをえず、その結合に依りて、階級的亀裂は深化している。われわれの安保破棄―帝国主義軍隊形成阻止の闘いが沖繩住民の結合環であるが、そして沖繩のかかる要求の「日米帝陰謀的取引」による解決展望を拒否するがぎり、闘いは実力闘争以外にはなく、実力闘争以外にはなく、実力闘争は「武装闘争」への発展以外にはない。われわれは沖繩闘争をかく大胆に提起するとともに、この方向への導きを安保闘争を通して「明日」のわれわれの闘争に直接ひきつがれていることを確認しよう。

国防反戦の一環にも、とも主要なたる安保闘争を革命戦争とともに敵の正規の要塞の攻囲としなければならぬ。すなわち、革命のプロレタリアの実践的組織的形成に党の確立と結合した正規軍の

(五、諸党派以降は次号に掲載)

① 日米安保の拡大適用一七〇年安保改定は、日帝の対外戦の追求一独自利害・侵略と抑圧・反革命的企図の表現であり、日米帝共同利害一反革命協調を枠とした、日帝のヘゲモニー向上要求としてとらえねばならない。

その実体的内容は自主防衛一帝国主義軍隊の形成と発動であり、その展開は、ヴェトナム加担強化、アジア進出、対米武力均衡、日米プロ人民の抑圧である。突破口は沖繩問題に設定された。

② 安保闘争はプロ国際主義の具体的表現を闘いとらねばならない。主要環は日米反戦闘争の反帝反政府闘争であり、そのことによる心臓部のかくごとく「革命戦争」「労働者国家」に意識化された世界革命の展望を与えることである。

③ 「軍政打倒・基地でっばい・日帝軍隊の派遣阻止」の実力闘争(沖繩)を、安保放棄改定阻止、帝国主義軍隊確立阻止の一環として、エンブラ・基地闘争と結合して闘いぬくことが当面の中心である。

④ われわれの反帝反政府は、政治スト、街頭政治デモを構造化する方向で設定されねばならない。

⑤ この闘いに対する行政権力の介在が、(軍事)にまで飛躍するであろうことを予測しなければならない。

⑥ われわれの七〇年安保闘争は、自衛的軍事行動であることは不可避である。

⑦ これら目的意識的闘いの先導が、経済闘争に飛躍の質を与えるであろう。

権力分析

I 自衛隊

— 帝国主義的常備軍 —

葛 木 曾 津 彦

一 序 論

— 革命の根本問題は権力の問題である —

国家とは「社会から生まれ乍ら社会の上に立ち社会に対して益々外的なものとなっていく」特殊な権力組織でありある階級が他の階級を「抑圧するための暴力装置」であり、「常備軍と警察とは国家権力の暴力行使の主要な道具である」(レーニン「国家と革命」)こと、それ故に「革命の根本問題は権力の問題」であり、「革命とは国家権力が一つの階級の手に入る」(レーニン、同上)問題である以上、われわれ共産主義者は、資本家階級の国家、被抑圧階級労働者・人民を搾取し支配する道具としての国家と、資本家階級の階級支配を保障し労働者・人民の支配者とその資本家階級に対する反乱(武装反乱は勿論のこと、日常的なストライキを中心とした経済闘争や政治闘争・デモンストレーションや直接的な現実的搾取現場である職場内部でのブルジョア的搾取の規律に従わない労働者の反抗さえも)を粉砕するための暴力装置として、「暴力行使

の主要な道具」として、「常備軍・警察・公安・裁判所・官僚機構・議会」を位置づけねばならないのは当然である。そして、共産主義者が、労働者人民の「国籍に左右されない」普遍的な階級利害を代表するものである以上、労働者・人民の武装反乱によつて、これらもろもろの資本家階級の支配、労働者・人民の搾取の道具であり、暴力装置である「常備軍・警察・公安・裁判所・官僚機構・議会」を、つまり、ブルジョアジーの国家を、きれいさつぱりと、徹底的に粉砕し、国家権力を労働者・人民の手に掌握し、労働者・人民の利害を代表し、守り、労働者・人民の階級支配を保障する労働者人民の国家機構を、労働者・人民の手で樹立しなければならぬことも当然のことである。

労働者・人民の国家は、帝国主義常備軍・警察を粉砕して、全労働者、人民の武装をかちとり、自らの武装で自からの権力を守り、帝国主義的官僚機構を粉砕して、すべての労働者・人民が自からの国家の統治に自から参加する徹底した人民の民主主義機構をつくりあげ、資本家階級の議会制度を粉砕して、議員の特権を廃止し、議会を人民の代議員が「自分も活動し、自分の法律を実施し、自分で實際上の結果を点検し、自分で自分の選挙人(労働者・人民)に直

接責任を負う」という、「同時に執行府であり立法府でもある行動団体」(マルクス)にかえるであろう。

故に、労働者・人民の国家は、真の全人民の利益と自由と民主主義を保障し、全人民の手で、これらの制度が発展させられる社会、政治機構である。

そして、この様な労働者、人民の国家は、階級闘争がまだ存在する社会主義の段階から、階級そのものが存在しなくなる共産主義社会への発展によつて、これらの暴力装置としての国家機構は、不必要となり、やがて「国家は死滅する」(レーニン)であろう。

以上は、帝国主義国家権力機構を分析するにあつて、この国家機構・権力構造そのものである、議会・官僚機構・軍隊・警察・裁判所・公安の位置付けの問題として、レーニンの「国家と革命」を中心として要約したものである。

われわれが革命を語る以上、そして、社会主義世界革命を現実のものとしよつとする以上、当面、日本の労働者、人民が共産主義者が粉碎しなければならぬ日本帝国主義の権力機構を、われわれ共産主義者・労働者・人民が最も良く分析し知つておかなければならない。

「敵を知り己を知れば百戦殆うからず」(孫子)とは、孫子の兵法であるが、この言葉は、それを知る者も知らない者も、古今東西を問わず、すべての秀れた革命家が、当然のこととして、事にあつておこなつてきたことであり、それ故に真理でもある。

われわれも又、「敵を知り己を知る」者でなければならぬ。でなければ、全般的な革命情勢のなかでさえも、蜂起すべき時に蜂起せず、蜂起すべきでない時に蜂起する、という、最も基本的な誤りさえ犯すであろう。

義のアジア・極東戦略体制展開の要請に答えて、その強大な狂暴な姿を、日本の労働者・人民の前だけでなく、全アジアの労働者・人民の前に現わし始めているのが現況である。

結論を先に述べるならば中華人民共和国を除いて、アジアで質量共に最も強大な戦力を保持するに至つた「自衛隊」は、我々が予想している以上に、精強な秀れた軍隊である。

しかし、前述した様に、精強な帝国主義軍隊となつた、自衛隊、第三次防衛力整備計画、更に第四次防・第五次防と、その実力を質量共に増大させていくであろう。自衛隊を、われわれが冷静に分析し、彼の実力を知り、全般的情勢のなかで、これを位置づけ、それにみあつてわれわれの力量を増大させ、全般的情勢のなかで労働者・人民を鍛えあげ、団結させ、立ち上がらせていくならば、「戦略において敵を軽視し、戦術において敵を重視する」という毛沢東の言葉をまづまでもなく、一方では、敗北主義におちいる事から、他方では、敵をみくびる、という重大な誤りから、われわれを守つてくれるであろう。

二 警察予備隊から自衛隊へ

— 治安警察隊から帝国主義軍隊への成長 —

① 警察予備隊

戦後の激しい動揺のなかで、米軍の莫大な兵力と経済援助の下にようやく立ち直り始めた日本資本主義に、再軍備のきっかけを与えたものは、一九五〇年六月二五日の朝鮮戦争の勃発であつた。

われわれは、先ず、我々が打倒すべき相手である日本帝国主義の暴力装置を知ることから始めよう。「敵を知る」ことによつて、われわれは、当面する情勢のなかで日本帝国主義を打倒する力量をもつた党に、わが党を鍛え上げ、労働者、人民を成長させなければならぬ。

権力分析は、以上述べたことから当然、「議会・内閣・官僚機構(行政機構)・軍・警察・公安・裁判所」等、全般にわたつて行われなければならないが、「議会・内閣・官僚機構」は竹野同志が、すでに「烽火」5から分析を始めていたので、私は「軍(自衛隊)・警察・公安」を中心として分析したいと思う。

先ず最初に、すでに帝国主義的常備軍にまで成長し、自らの核武装をもめざして、ますます強大になつていく帝国主義の最大の暴力装置であり、最も赤裸々な権力の中枢である「自衛隊」を、I・自衛隊の現況、II・日米安保と自衛隊(米帝の極東戦略にかわる独自の日帝の極東戦略体制と自衛隊の位置を中心に)、III・日本資本主義と自衛隊(日本資本主義に占める防衛産業の位置)の三つにわけて述べていくつもりである。

レーニンが述べている様に、独占資本主義が国家独占資本主義に成長転化する帝国主義の時代とは、「国家機構の異常な強化、国家機構の官僚的および軍事的機関の前代未聞の拡大をしめす」時代であり、ブルジョアジーの階級支配が、権力支配が、そのもつとも狂暴な姿をもつて、自国の労働者、人民を抑圧する時代であり、更に自らの帝国主義的勢力圏を築きあげるべく、他国の労働者・人民・他民族をも、強大な資本の力と、強大な暴力装置II帝国主義的常備軍を背景に、支配し、搾取し、抑圧する時代でもある。

今や帝国主義的常備軍にまで成長した「自衛隊」は、日本帝国主

当時、日本を占領していた米軍、第七師団(北海道)、第一騎兵師団(関東)、第二五師団(関西)、第二四師団(九州)等の地上兵力のほとんどは、直ちに朝鮮半島に出撃した。アメリカ本国から陸上部隊が編成をおわつて、援軍を出撃させるまでには、当時、二ヶ月を要したので、手薄となつた日本の治安維持に不安を感じた連合軍総司令部は、この空白をうめるため、マツカーサ書簡の形で日本政府に警察予備隊の創設を許可した。

当時、日本資本主義の暴力装置の中心たる警察力は、国家地方警察三万人、自治体警察九万五千人、合計一二万五千人、海上警察力としての海上保安庁職員八五〇〇人(うち海上保安官三千人)、巡視艇六二隻であつた。

日本資本主義の公的暴力は、この様にひよわなものであつた。日本政府は同年八月十日、「警察予備隊令」を公布し、七万五千人の国家警察予備隊の創設と、海上保安庁定員の八千人増強に歩み切つた。

警察予備隊の組織は、本部と部隊に分れ、本部は本部長官のもとに予備隊全般を統括し、施策の大綱を定め、部隊は総隊総監が直接指揮にあつた。部隊は、第一管区隊・東京都練馬、第二管区隊・北海道札幌、第三管区隊・兵庫県伊丹、第四管区隊・福岡県福岡の四管区隊に編成され、この他に管理補給隊がおかれた。

「警察予備隊」は、その法令に「わが国の平和と秩序を維持し、公共の福祉を保障するに必要な限度内で、国家地方警察及び自治体警察の警察力を補う」とある様に、その性格や実力からいつても、暴動や政治ストライキにそなえた治安警察隊であつた。それは、現在の治安警察隊としての警察機動隊が「カービン銃と、機関銃」で武装したものであるとみてよい。そして、警察予備隊が純治安維

持部隊としてあつたことは、その四つの管区隊が、東京・北海道・兵庫・福岡という日本の政治戦略上最も重要な拠点に配地編成されていることからみてもわかることである。

ともあれここに、日本資本主義の復活と共に生れ、その後の日本資本主義の発展・成長、帝国主義としての復活と、その経済的、政治的実力の増大と共に、治安警察隊から常備軍へ、更に帝国主義的軍隊へと発展成長していく芽が与えられたのである。

② 保安隊

一九五一年九月八日、サンフランシスコで調印された対日平和条約、日米安全保障条約は五二年四月二八日効力を発生、日本資本主義は連合軍の占領体制から独立して、朝鮮戦争の特需をバネとしながら、戦後のめざましい成長期に入った。

そして、アメリカ帝国主義の世界戦略としての共産圏封じ込め政策、その一環としての極東戦略体制のなかで、日本の米軍基地を位置付け、これを確保するとともに、日本を再軍備させ、アジアにおける反共集団防衛体制に日本資本主義を組み入れる為の、日米安全保障条約の締結と前後して、ダレスの「日本は直ちに再軍備態勢を自主的にとり、特に米軍の地上部隊に代つてその責任を分担することが望ましい」という要請に答え、警察予備隊を五一年秋頃から三万五千人増員し十一万人とし、その編成を北海道では「軍」に相当する「方面隊」を設置し、他は師団に相当する「管区隊」と再編成し、海上保安庁でも定員を八千人増加した。

そして、五二年八月一日、同年四月から効力を発生した日米安全保障条約の下で、同年四月までに「海上予備隊」を、質・量共に強

化して発足していた「海上警察隊」と警察予備隊を統括するものとして、「保安庁」を新設、警察予備隊は「保安隊」に編成変えられたのである。「保安隊」は、戦後の成長期に入った日本資本主義の下で、「保安庁」の統轄下に陸・海軍を有する常備軍としての性格をもつものとなつた。

「保安庁法」は保安庁の任務を「わが国の平和と秩序を維持し、人命、財産を保護するため特別の必要がある場合に行動する部隊の管理、運営を行う」と定め「保安隊」の装備を米軍供与の一〇五ミリ、一五五ミリ榴弾砲、軽戦車で、「海上警察隊」は一五〇〇トン級フリゲート艦一八隻、二五〇トン級上陸支援艇五〇隻と質・量共に強化し、法的、戦力的に常備軍としての面目を備えた。

「保安隊」は、日米安保条約にもとづき、米軍極東戦略体制下における日本資本主義の再軍備の第一歩であり、その権力の最も根本的な中枢をしめる暴力装置として、たえざる質・量における戦力の強化、増強がおこなわれ、日本資本主義の帝国主義的復活と経済の高度成長をとおして、帝国主義的軍隊へ成長転化する突破口であつた。

③ 自衛隊の発足

一九五四年三月八日、「日米相互防衛援助協定」「農産物購入協定」「経済的措置協定」「投資保証協定」のMSA（相互安全保障法）関係四協定の調印によつて、日本資本主義は、明確な国防の基本方針を決定すると共に、日・米相方の間に、軍事的義務、日本の防衛力整備増強を行うことを確認した。

防衛計画で自由・改進黨・日本自由の保守三党間で話しあひがまとま

るや、政府は五四年三月九日、閣議で「防衛庁設置法案」「自衛隊法案」を正式に決定、議会議決をのり切つて、六月九日公布、七月一日から施行され、新たに創設された航空部隊と共に、陸、海、空三百衛隊の発足となつた。

陸・海・空三軍を要する「自衛隊」は「わが国の平和と独立を守り、国の安全を保つ」「直接侵略及び間接侵略に対しわが国を防衛するのを主な任務とし必要に応じて公共の秩序の維持を図る」とその目的・任務を規定し、組織面では、①内閣に国防会議を設置し、②防衛庁長官の幕僚機関として陸上・海上・航空の三幕僚監部を設けそれぞれ幕僚長を配置し、③三幕僚監部の調整機関として統合幕僚会議を新設して、組織体制を整備強化し、自衛隊法では、①「防衛出動」を規定し、②自衛隊員の服務本旨として「事に臨んでは危険を顧みず、身をもつて責務の完遂に努め、もつて国民の負託にこたえることを期するものとする」とし、③上官の命令に服従する義務、品位を保つ義務など各種の職務遂行の義務規定を設けた。

そして、五六年七月二日、「国防会議の構成等に関する法律」の公布、施行で、「国防会議」が具体的活動を開始するや、五七年五月二〇日、同会議で「国防の基本方針」を決定、この基本方針に基いて、「国力、国情に應じた必要最小限度の自衛力を整備する」という「第一次防衛力整備計画」を決定した。

国防会議が決定した「国防の基本方針」とは次のようなものである。

国防の基本方針

国防の目的は、直接及び間接侵略を未然に防止し、万一侵略が行われるときはこれを排除し、もつて民主主義を基調とするわが国の独立と平和を守ることにあり。

この目的を達成するための基本方針を次のとおり定める。

- 一 国際連合の活動を支持し、国際間の協調をはかり、世界の平和の実現を期する。
- 二 民主を安定し、愛国心を高揚し、国家の安全を保障するに必要な基盤を確立する。
- 三 国力国情に應じ自衛のため必要な限度において、効果的な防衛力を漸進的に整備する。
- 四 外部からの侵略に対しては、将来国際連合が有効にこれを阻止する機能を果し得るにいたるまでは、米、国との安全保障体制を基調としてこれに対処する。

ここにいう、「直接及び間接侵略」とは後述で（陸・海・空三軍自衛隊の戦略構想）明らかな様に、日本を始めてとするアジア全域での革命的情勢の進展の下に、日本内部で労働者・人民の武装反乱（間接侵略）が起り、これを支援する目的で中華人民共和国、朝鮮人民民主主義共和国、ソビエト連邦が、義勇軍を展開した（直接侵略と規定）時のことを想定したものであるし、「民主主義を基調としたわが国の独立と平和を守る」とは、ブルジョア民主主義に基づき、日本の資本家階級とそのブルジョア政權、彼らの権力支配彼らの国家を、労働者、人民の革命運動から守る、ということであるのは明確なことである。

日本の支配階級である資本家達とその政府は右の目的を達成するため、基本方針として、国際ブルジョアジーの反革命的協調をはかり、具体的には、アメリカ帝国主義の強大な兵力と、アジア・極東反革命戦略への協力（日米安保）の下に日本の労働者、人民を「愛国心」の名の下にブルジョア国家に忠誠をちかわせ、ブルジョアジ

一の支配の前に拝跪させ、自らの経済的・政治的力量に依り、又、自らの要求に応じて、日本ブルジョアジーの軍隊に自衛隊の戦力を増強していくことを、ここに明らかにしたのである。

ここに「自衛隊」は、日本の労働者、人民に対しては「抑圧」をアジアの労働者、人民、民族に対しては「侵略」を意味する。帝國主義的常備軍としての位置付けを、日本帝國主義ブルジョアジーから与えられたのである。

三 自衛隊の現況

一 アジア有数の常備軍

① 自衛隊の任務

自衛隊の任務は、「防衛庁設置法第四条」、「自衛隊法第三条」に明記されている。

「わが国の平和と独立を守り、国の安全を保つことを目的とし、これがため、陸上自衛隊、海上自衛隊及び航空自衛を管理し、ならびにこれに関する事務を行なうこと」(防衛庁設置法)、「わが国の平和と独立を守り、国の安全を保つため、直接侵略及び間接侵略に対しわが国を防衛することを主たる任務とし、必要に依り、公共の秩序の維持にあたる」(自衛隊法)と規定している。

「防衛庁」とは、日本帝國主義の行政機関の側面から、自衛隊とは、実際の戦力展開の活動面から、それぞれ規定されたものであるから、防衛庁も自衛隊も実体は同じものである。

自衛隊法は更に「自衛隊の出動」を詳細に規定している。戦前の

これは、旧日米安保第一条に規定されていたものであるが、自衛隊の戦力・能力のいちじるしい強化によつて、内乱においては米軍の援軍をうける必要が薄らいだので新安保条約では削除されたものである。

第二要件は、緊急事態で「一般の警察力では治安の維持ができない場合」である。

内閣総理大臣が命令権者で、出動を命じた日から二〇日以内に国会に付議して承認を求めることが必要となつている。

治安出動の際は、防衛庁長官と国家公安委員会とが緊密な連絡を維持し、出動した自衛官には警察官職務執行法の規定が準用されることになつている。

(iii) 要請による治安出動

局地的な治安維持のためのもので、都道府県知事は「治安維持上重大な事態につき、やむをえない必要があると認める場合」に、内閣総理大臣に部隊の出動を要請でき、内閣総理大臣が「事態やむをえないと認めるとき」に部隊の出動を命じる(同法第八一条)といふものである。

この場合、都道府県知事は、要請前に、都道府県公安委員会と協議せねばならず、内閣総理大臣は防衛庁長官と国家公安委員会との間に緊密な連絡をたもとて規定している。

(iv) 海上における警備行動

海上の人命、財産の保護・治安維持のため、特別の必要がある場合、防衛庁長官は、内閣総理大臣の承認をえて「海上における必要な行動」をとる(同法第八二条)ことができ、この場合は、防衛出動や治安出動に比べ、海上保安庁の仕事の補佐という比較的軽易な事態でも出動しなければならぬので、命令権者は防衛庁長官であ

旧陸・海軍が、「自衛」の名のもとに、軍部の意図にしたがつて、自由に軍が使用されていたのに比べ、一つの特徴になつている。

これは、戦前の経験から、ブルジョア政府が、軍の暴走をコントロールできる様、自らの忠実な獵犬としておく意図からでていると思われる。このことは、次にみる「防衛庁の組織」に、はつきりみられるものである。

「自衛隊法」が規定している自衛隊の行動の主なものには次に列挙するものである。

(i) 防衛出動

外部からの武力攻撃(そのおそれのある場合も含む)に際し、わが国を防衛するため必要であると認める場合(自衛隊法第七六条)に出動する、外部からの武力攻撃についての政府見解は、④外国軍隊の日本領域への侵入、⑤外国軍隊の日本領域、日本周辺にある船舶、航空機に対する攻撃、⑥外国で組織された武装部隊の侵入などである。

防衛出動を命ずるのは内閣総理大臣で、出動を命じるには、国防会議に諮問し、閣議で決定し、国会の承認をえなければならぬが、緊急の場合は、国会の承認を得ないで出動を命じることができる。

ただ、緊急出動の場合は、事後直ちに国会の承認をえねばならず、承認されない場合は、直ちに部隊を撤収しなければならないとされている。

(ii) 命令による治安出動

治安出動を命ずる第一の要件は、「間接侵略その他の緊急事態」(同法第七八条)が存在すること、政府は間接侵略とは、「一または二以上の外部の国による教唆または干渉によつて引越された日本国における大規模な内乱および騒ぎよう」と規定している。

る。

武器の使用は、正当防衛と緊急避難の場合を除いて、出動部隊指揮官の命令によるとしている。

(v) 領空侵犯に対する措置

外国の航空機が国際法規、日本の航空法などの規定に違反して、日本の領域上空に侵入したとき、防衛庁長官は、自衛隊部隊に、その航空機を着陸させ、日本の領域上空から退去させるに必要な措置を講じさせることができる(同法第八二条)と規定しているものである。

この任務は当初、航空自衛隊にその実力がなかつたので米軍が担当していたものであるが、航空部隊戦力の充実と共に、現在では、完全に航空自衛隊が担当、任務についている。

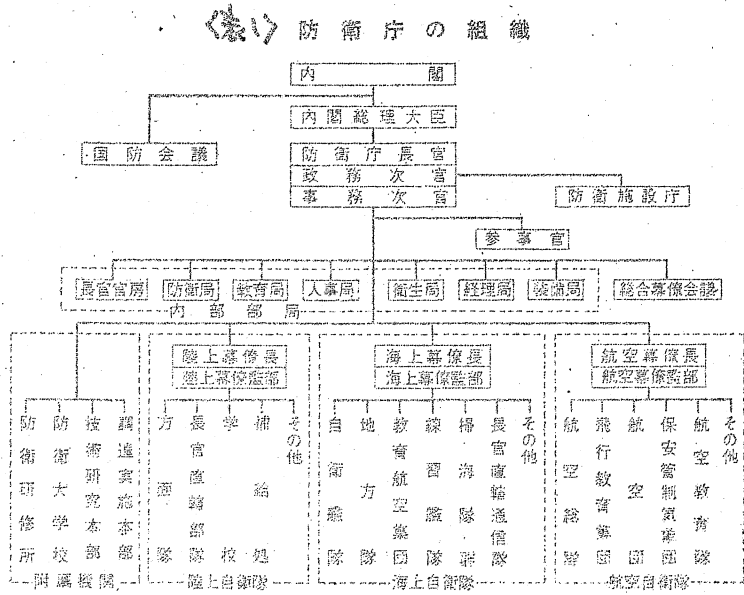
(vi) 民主活動・その他

この他に、災害派遣、機雷などの除去、土木工事の受託、教育訓練の受託、運動競技会に対する協力、南極観測に対する協力、海上保安庁に対する協力等が自衛隊法で規定されている。これは、自衛隊を国民になじませ、労働者、人民の日本帝國主義国家に対する忠誠と、「国防意識の向上」「愛国心」を育てあげる為、ブルジョアジーの常備軍である自衛隊そのものをつかつて、日夜、重点的に力を入れていっているものである。

以上が自衛隊の任務・目的と、防衛出動の詳目であるが、自衛隊が、何のために存在し、何をめざして、その防衛出動が規定されているかは、「序編」で述べた帝國主義的常備軍の位置づけと、「自衛隊の現況」三、「警察予備隊から自衛隊へ」の日本帝國主義の成長・発展とともに、充実されてきた常備軍の実体とを、ここで相せて考えてもらえば、述べるまでもなく明らかであると思う。

① 防衛庁の編成

①で述べた自衛隊の目的・任務と防衛出動を保障する行政機関としての防衛庁の組織は「表1」の如きである。



表にみる通り、「総理大臣」が自衛隊に対する最高の指揮監督権をもち、「防衛庁長官」が総理大臣の指揮監督のもとに自衛隊を統括するものとなっている。

更に、「総理大臣」を議長として、外務大臣、大蔵大臣、防衛庁長官、経済企画庁長官等を議員とする「国防会議」が、内閣に国防に関する重要事項を審議する機関として設けられている。

これらの下にある防衛庁の組織は、長官を政務次官、事務次官が補佐し、文官の参事官（定員一〇人）が防衛庁の基本方針の策定を補佐する。文官を中心とした内部部局（通称、内局といわれている）の官房長、防衛・教育、人事、衛生、経理、装備の六局長は参事官があてられ、この内部部局は、自衛隊の業務の基本的事項を担当して、防衛庁長官の政策的な補佐にあたる。

参事官は三自衛隊の隊務についても①それぞれの隊務についての基本方針と実施計画についての指示 ②陸・海・空幕僚長の作成した方針、実施計画についての承認 ③統幕会議の所掌事項についての指示、承認 ④一般的監督について長官を補佐することが規定されており、更に内部部局が具体的な事務処理について①法令の作成国会、他官庁との交渉 ②部隊の編成、装備、教育、訓練、人事などについての業務計画の審査にあたり ③防衛計画の審査にあたるなど、「文官統制」（シビリアン・コントロール）という組織機構になっている。

内部部局の他に、陸・海・空の各幕僚監部があり、各自自衛隊の隊務についての幕僚機関となっており、この各幕僚監部の長である各幕僚長は、最高の専門的助言者として長官を補佐し、長官の命令を執行する。又、自衛官の最高幹部である統合幕僚会議議長と陸・海・空幕僚長で構成される統合幕僚会議は、①統合防衛計画の作成・各幕の防衛計画の調整、②後方補給

② 陸上自衛隊の戦略構想

以下に述べる自衛隊の戦力・編成、戦略は第二次防衛力整備計画終了段階（一九六二年）六六年迄の五ヶ年間のものである。

先ず陸上自衛隊の戦略構想は、海空自衛隊の直接侵略Ⅱ武力侵攻対処に比べ、直接侵略にも備えるが、間接侵略Ⅰ労働者・人民の内乱・騒じようを重視し、これに重点的に対処するというものである。

軍事戦略上、アジア大陸に沿って細長く、大きな四つの島から成立つ島国日本は、大陸的な内陸への縦深性もないため、「敵を本土に迎えて戦う」という戦略は、全く不利であり、「敵を本土外で撃滅する。このために海・空の戦力を充実し、核攻撃など自衛隊の戦力の及ばないところは日米安保条約によつて米軍の支援に期待する」という海・空戦力中心の戦略構想になる。

これに対して、陸上自衛隊幕僚幹部は「アメリカの核抑止力のもとにある日本に対して、大規模な武力侵攻が行われる可能性は少ない。だが、アメリカの核抑止力の行使には中があつて、局地的侵攻が発生しても直ちに核報復が行われるとは限らない。しかも最近の戦争の様相は変化してきており、直接侵略と間接侵略が並行する可能性が大きい。防衛の基本は治安の確保にある。」として、具体的には、中ソ対立、米ソの平和共存、ベトナム戦争の激化とアジア地域での解放戦線方式の武装ゲリラの活発化、中国の核武装の進展と武装解放闘争の呼びかけ等の情勢判断から「中国の核武装が進展すれば、核を背景にして日本に圧力をかけ、それとともに国内に反乱を起して、それをきっかけに軍事援助を始め、小規模な戦争を継続する解放戦線方式をとるのではないか。現実の問題として、（朝鮮

給計画 ③統合訓練計画 ④出動時の自衛隊の指揮命令の基本、統合調整 ⑤二つ以上の自衛隊で構成する部隊についての長官の指揮命令、等を行ってこれらについて長官を補佐することになっている。そして、この陸・海・空幕僚長・幕僚監部の下に、陸・海・空自衛隊の実戦部隊がある。

この他に、兵器の研究開発を行う「技術研究本部」や、三軍自衛隊の士官を養成する機関として「防衛大学」等が防衛庁附属機関としてある。

防衛庁の組織構成の特徴は、旧陸・海軍の組織・編成等の軍政事項も法律によらず陸・海軍大臣の副署による軍令で定め、これら陸・海軍大臣が現役軍人であり、作戦用兵の軍令事項も天皇の大権として、これら軍部が政治から独立していたのに比べて、自衛隊は国会の統制、内閣の統制、防衛庁内部の文官（自衛官の「制服」）に対して、「背広の参謀」と呼ばれている）の統制という三面から「政治が軍事に優先する」という原則の下に、「シビリアン・コントロール」が行われていることである。

実質的には、内閣と、参事官（文官）、内部部局（現世、六部局の各課長以上は全部文官で構成され、一七九人の「背広の参謀」がいる）の文官が自衛隊を統制している。

③ 陸・海・空自衛隊の戦略構想と戦力

半島)三八度線で紛争が発生した場合、そのような事態に発展する可能性がある」と想定している。

故に、陸上自衛隊の戦略構想は、前述した様な、間接侵略Ⅱ労働者・人民の武装内乱・騒じようと、これを支援する外部の局地的侵攻Ⅱ武器援助・義勇軍の派遣・関連地域、戦略上の地域での兵力展開を最も重視し、特に「治安確保」を、防衛上の基本として、これに對処し、備えようとするものである。

この戦略構想は、六〇年安保闘争によつて、その後、一層重視され、二次防初期の部隊編成を、次に述べる様に日本独自のものに變更したことから、はつきり読みとれるものである。

一九六〇年六月、安保闘争は、その頂点に達し、東京では「国会突入」をめざす全学連の闘いが、日夜くりかえされ、全国主要都市・地方都市で、学生、労働者、市民の圧倒的なデモが展開され、一方、三井三池炭鉱の炭鉱労働者数万人が、首切り反対の市街戦をくりかえしていた。この様な緊張した政治情勢のなかで、情勢を「わが国における大規模な内乱、騒じよう」としてとらえた政府と陸上自衛隊は、ひそかに治安出動の準備をし、六〇年五月四日には赤城防衛庁長官が「自衛隊の治安出動に関する訓令」をだしていた。

安保自然成立の六月一九日、全学連の暴走を恐れた自民党首脳が防衛庁に押しかけ、自衛隊の出動を要求したが、赤城長官がこれを拒否したので、現実には自衛隊が出動するにいたらなかった。

しかし、この経験は、政府、陸上自衛隊の幹部に、改めて治安出動を現実の問題としてとらえさせ、その後のより一層、間接侵略Ⅱ労働者、人民の蜂起、内乱、騒じようを、最大の恐怖として、治安対策重視の防衛政策を打ちださせたのである。

㊦ 陸上自衛隊の戦力と編成

陸上自衛隊の編成は、「表2」にみる様に、「北部、東北、東部中部、西部」の五方面隊にわかれ、各方面總監部の統括のもとに、作戦部隊である「師団」を二から四個師団配備している。

師団は、九千人師団四、七千人師団九の合計一三三師団で、各一個師団の編成は「表3」にみるとおりである。

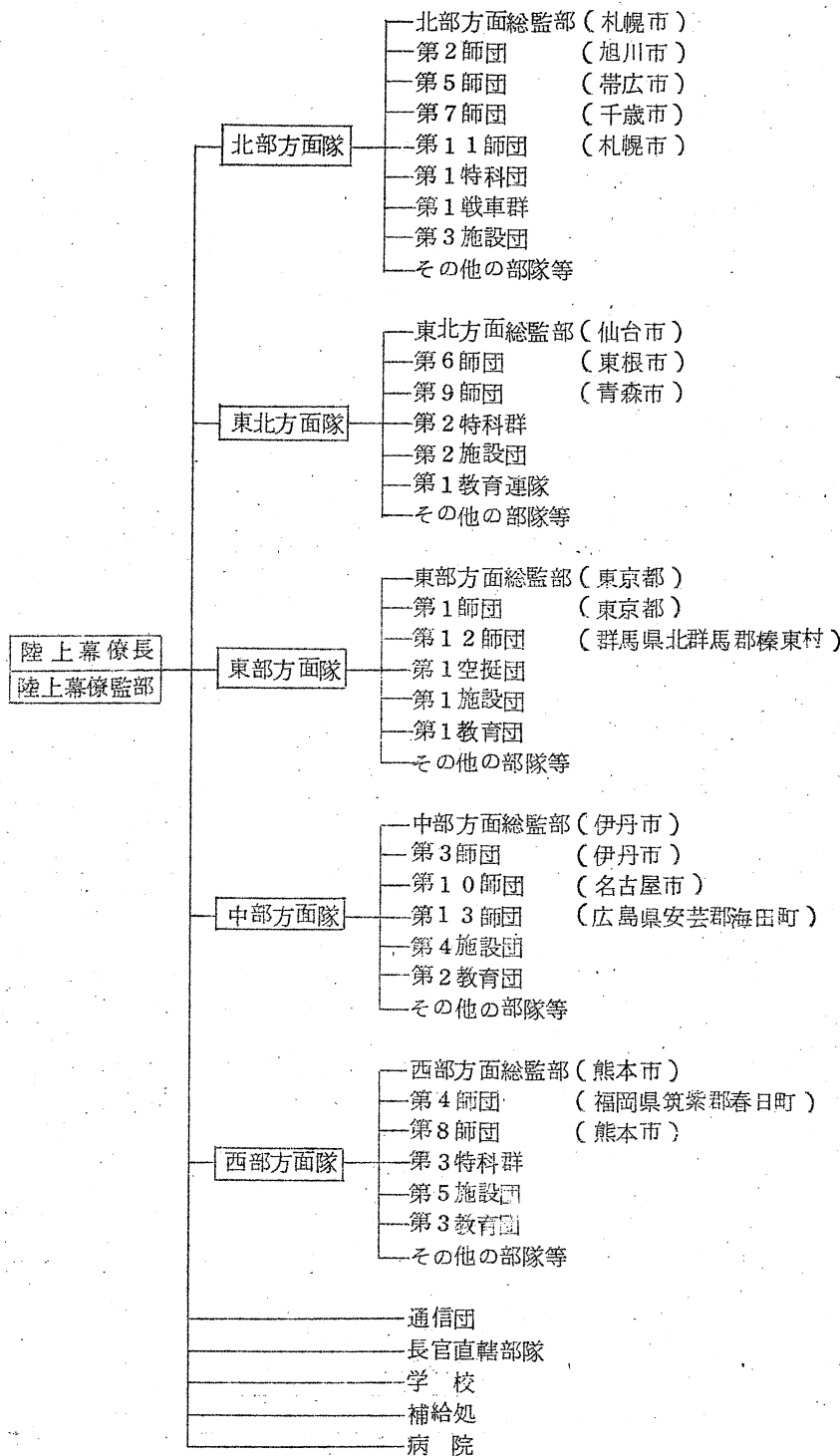
九千人師団では、小銃四個小隊、無反動砲一個小隊、追撃砲一個小隊で普通科(旧歩兵)一個中隊を構成し、この普通科四個中隊と重迫撃砲一個中隊で普通科(旧歩兵)一個連隊を構成し、この普通科四個連隊と、特科(旧砲兵)一個連隊(特科六個大隊で構成)、施設(旧工兵)一個大隊(施設四個中隊で構成)と偵察隊、対戦車隊、通信大隊、武器隊、補給隊、輸送隊、衛生隊、師団司令部及付隊で陸上自衛隊一個師団が構成されている。勿論、各連隊、大隊(戦車、施設大隊)には、本部及び管理中隊が置かれている。

自衛官の定員は、一七万一千五百人(欠員がある)で、他に職員一万三千六百三十人、それに除隊しているが出動命令が出たとき、一般隊員と同様、任務につく予備自衛官が二万四千人で、制度上の兵力は合計一九万五千五百人である。

旧陸軍の一個師団は二万人編成であつたが、その半数以下の兵力で編成されている現在の陸上自衛隊は、機動力の点では五人に一台の割り得車があり、小銃、大砲等、火力は二倍以上で、旧陸軍の破壊力の四、五倍にひつてきるといわれる。

この先述した自衛隊の師団編成は独特のもので、これは、㊦で述べた陸上自衛隊の戦略構想からきているものである。

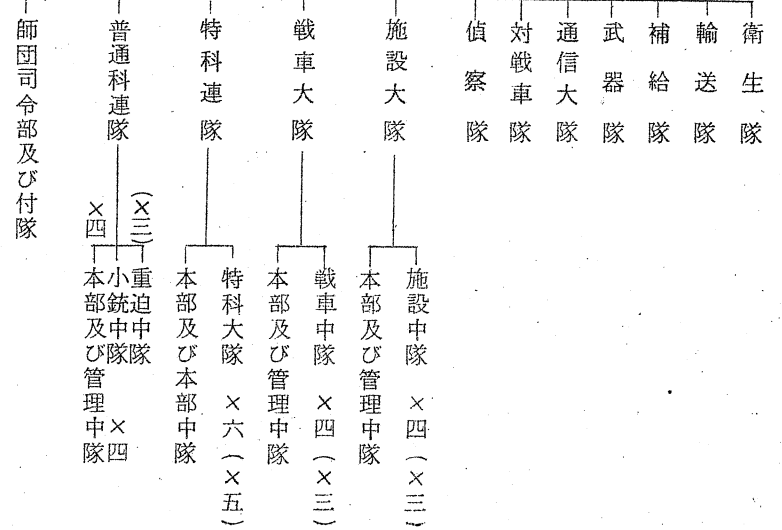
(表2) 陸上自衛隊の編成 (昭和42年6月末日現在)



当初、自衛隊は、作戦部隊として、六管区隊(一管区隊一万二七〇〇人で編成)、四混成団(一混成団六〇〇〇人)編成であつたが先述した六〇年から六三年にかけて、現在の様な九千人師団、七千

人師団からなる一三三師団に編成がえした。これは、①日本の地形の特質(島國で細長く、山が多いため広大な平野部が少く、河川が多く、急流が多い)、表日本のこれらの

(表3) 陸上自衛隊1個師団の編成



(注) 数字は部隊の数を示し()の外は9000人師団、内は7000人師団におけるものである。他は単数である。

大兵力ではかえって作戦部隊の戦闘能力が落ちるから機動力のある小型編成が好ましいとの戦術、戦術上の配慮 ②間接侵略を重視する戦略構想からくる大都市周辺の治安出動体制の確立という意図からである。

この戦略、戦術上の意図から、師団改編とともに、従来の管区隊編成の際における一戦闘団である普通科一連隊を中心補給部隊を

平野部は戦略上重要な大都市のみならず、人口密度が高く、主要装備は「表4」のとおりであるが、全体では、戦車約八六〇両、装甲車約四八〇両、自走砲四八〇門、各種火砲四四〇

(表4) 陸上自衛隊団別の主要装備

師団名	定員	各師団主要装備定数
第1師団	約 9,000	小火器約 8,100 火砲約 240 戦車約 60 装甲車約 20
第2 "	"	
第4 "	"	
第11 "	"	
第3 "	約 7,000	小火器約 6,300 火砲約 180 戦車約 50 装甲車約 15
第5 "	"	
第6 "	"	
第8 "	"	
第9 "	"	
第10 "	"	
第12 "	"	小火器約 5,900 火砲約 200 戦車約 70 装甲車約 200
第13 "	"	
第7 "	約 6,700	
計	約 99,000	

合せた兵力三千五百人、車両約五百両では鈍重で機動性にかけるとして、新師団では一戦闘団当り、兵力二千二人、車両約三百両と小規模化し、機動力を増強した。そして、指揮系統においても従来の管区隊連隊大隊中隊を師団連隊中隊と簡略化し、命令伝達の迅速化、部隊統括の強化をはかった。

また、これまで本州の中核部が手薄で、東京を含む関東、甲信越の一一都府県に一管区隊、中部、近畿、中国、四国の一〇府県に一管区隊、一混成団しか配置されていなかったため、大都市周辺の治安出動強化の為、師団改編と同時に、東部(東京都を中心に関東、甲信越)、中部(阪神地区を中心に関西)、中国、四国(両方面隊に各一師団)を増強、更に、普通科二三連隊を四三三連隊に倍數小型化した。

門、地对空ミサイル「ホーク」二個大隊四八基、この内一個大隊二四基は、北海道千歳地区に、他の一個大隊は、東京周辺の埼玉県朝霞町、千葉県柏市、千葉市下志津の三ヶ所に配置されている。「ホーク」は約三〇mの低空から一万五〇〇〇mの中高度で侵入する航空機を撃墜する誘導ミサイルで、全長五m、音速の三倍で自動的に目標を追跡し、命中率はよい。航空機はジェットではなく、連絡機約一五〇、ヘリコプター一五〇機で、東部方面隊に属する千葉県には最強部隊の一つである空挺団が配置されている。

「表2」の師団編成でも戦術上の重点配置がどこにあるかがわかるが、それは、北部、東部、西部方面隊である。

北海道には一三師団の三分の一にあたる四個師団が配備され、更に、第一特科団(旧砲兵旅団に相当)、第一戦車群が配備されている。これは「日本の防衛正面は北部、西部、南部であるが、西部は三八度線をはさんで、韓国、北鮮両軍が対峙しているけれど、米第八軍が韓国に駐留しており緩衝地帯をつくっている。南部は、中国には、現在、海を渡って侵攻してくる程の能力はない。攻撃意図は別として、物的に侵攻能力をもつのはソ連で、その際、北海道が対象となる」という戦略上の配慮からである。

北海道は地理的にいっても、ソヴェト領土にすぐ接しており、陸上自衛隊幹部は、ソヴェト極東軍一七個師団、他に空挺二個師団が配置されていて、保有船舶量から一挙に一〇個師団の侵攻が可能とみているので、陸上自衛隊は、このため唯一の機械化師団である第七師団を、北海道に配置している。この師団は総人員では他の七千人師団の九五%であるが、国産の六一式戦車約七〇両、六〇式装甲車約二〇〇両と新鋭機材をつぎこみ、対戦車火器、野戦砲、対空火器等を増強して、他の師団に比べて、装甲車両で四・二倍、

装軌車両で三・六倍の機動力を持つている。更に、自衛隊唯一の火力集団たる第一特科団は、兵力六五〇〇人、二〇〇ミリ榴弾砲等の野戦砲一二六門、七五ミリ山砲四五門、九〇ミリ高射砲など五六門対空ミサイル「ホーク」一個大隊などを保有している。

北海道の北部方面隊が、直接侵略、局地侵略に備えているのに対して、治安対策を重視している典型的師団は東京・練馬の第一師団(この師団は内乱用の治安出動専門師団とみてよい)である。同師団の主任務は、首都の治安・警備であり、平時の警備配属は東京・茨城・千葉・埼玉・神奈川・山梨・静岡で、総兵力九〇〇〇人は、これら地域に分散配置されている。

革命的情勢が緊ばくして、労働者、人民の蜂起がおこる等、「治安出動」が要請される「重大な内乱・騒ぎよう」が突発したとみるや、同師団は、出動命令の下に、富士駐屯の戦車部隊を始め一夜で八〇%の兵力(約七千人)が東京に集結、同時に師団長の指揮権が拡大されて、最大の場合は、精強な千葉県習志野の第一空挺団(兵力一四〇〇人)を始め一三四の部隊を指揮して治安維持にあたる。

第一師団は、他の師団の治安訓練年間四六時間の約三倍の時間をかけて治安出動に備えており、又各連隊にレンジャー隊員一〇〇人を配置して治安出動時には、ヘリコプターで潜入、内乱や騒ぎようの首謀者の逮捕、要人の身辺警護にあたる訓練も行っている。

六〇年末、陸上自衛隊が安保闘争の分析から作成した「治安行動草案」では、治安出動には、小銃編成部隊はもとより、戦車、装甲車部隊による暴徒(労働者、人民、学生のこと)鎮圧、催涙ガスなどの散布にあたる航空部隊、暴徒の背後をつく空挺部隊などをくりだし、放水、ガス、銃剣の失ふすまによる制圧など詳細な方法を規定している。

又、治安出動に備えるため、陸上自衛隊独自の調査、情報機、アメリカの中央情報局C・I・Aにあたる独自の強力な中央情報機関をつくれという要望は、自民党の保科善四郎を中心に強い一を、ついでに日共、内外情勢、各政党、労組、革新団体の動向、実態分析にあたり、毎年、治安行動の戦略目標である政情概観、交通通信の要衝、発電所等を選定して保護、確保対策を研究している。

第三次防の戦略構想等については次回に詳しく述べるが、以上の陸上自衛隊の戦略構想に基いて、空、地機動力の増強、対空火力に重点をおいている。

それは、九千人師団を四から七個に増強することから、長官直轄ヘリコプター団（普通科一個連隊の輸送力をもつ）の編成から、各方面隊でのヘリコプター部隊の配置、他に霞ヶ関の第一ヘリコプター隊に、V-107型大型ヘリコプター二個部隊を新設配置する、「ホーク」二個大隊の新設、他に一個大隊の準備など、山地が多いという地形上の制約、兵力量の制約を機動力で補うことを目的としている。

◎ 海上自衛隊の戦略構想

海上自衛隊の任務、対象は、原子力潜水艦から航空機、機雷まで複雑多岐で、通峡阻止、対潜掃討、港湾防備、船団護衛など広範囲にわたっている。

日本は四面が海に囲まれ、主要資源、原料の海外依存度が高いことから、これら重要資源を確保するための輸送船団護衛は特に重要である。

海上幕僚監部の調査では、一九六〇年度の物資輸入量約八七〇〇

万トンであつたものが、六五年度には一億九九〇〇万トンと五ヶ年で約二・三倍にふえ、日本帝国主義の経済成長と共に、これからも更に莫大な量に増加する見込みで、しかも内訳は、原油・石油製品四四・五％、鉄石一五・六％、石炭八・六％（これら品目で七・六％を占める）と重要原料が圧倒的に多い。国内備蓄は六五年度通商白書によると、石油製品約一九日分、原料炭約一七日分、鉄鉱石約四六日分である。海上輸送路が封鎖されれば日本帝国主義の存立そのものが重大な危機に陥る。有事の際には生存していく為のぎりぎりの輸入量は、平時の四・五〇％とされている（第二次大戦中のイギリスの輸入量は平時の四一％、日本は四四年に四六％）ので、六五年度の輸入量約二億トンの四〇％として、約八〇〇〇万トン、月間七〇〇万トンの輸入は確保せねばならないことになる。

以上のことから、海上自衛隊の戦略構想は、海上輸送路確保の為の①対潜水艦作戦 ②船団護衛、港湾防備 ③敵艦艇・潜水艦などの海峡通過阻止作戦に重点をおき、これを重視するものである。

海上自衛隊幹部は、海上輸送に対する脅威として、ソビエト連邦中華人民共和国、朝鮮民主主義人民共和国の海軍力をあげている。

①潜水艦では、ソビエト極東海軍の主力たる潜水艦は約一〇〇隻でこの内、原子力潜水艦は約一〇隻であるが、七一、二年頃には原子力潜水艦四五から五〇隻、在来型潜水艦は七、八〇隻に増強されると見ている。中国は在来型の潜水艦三五隻であるが、現在年間二隻程度建艦しており、七一、二年頃には約五〇隻に達すると推定、北鮮は、現在、ソビエト供与の二隻を保有するだけであるが、将来、更にソビエトから供与される可能性があるとみている。②機雷はソビエトが新型機雷の開発を進めて、潜水艦で日本周辺に敷設することが可能である。③航空機はソビエト沿海州にバジヤー、パイソン

などの暴撃機が一二〇〜一三〇機あり、水上艦艇は、ミサイル装備の駆逐艦、魚雷艇を増強しているので、航空機と共に、制空権を確保すれば、船舶攻撃、水上艦艇による攻撃が考えられるとみている。中国については、潜水艦にしても現在は沿岸防御用が主で、さしたる脅威はないが、中国の核武装後は、石油輸送ルートである南西航路は、中国航空機の攻撃範囲に入り、かなりの脅威となるとみている。

以上の戦略上の観点から海幕の戦略構想は「アメリカの核のカサの下にある日本に対して全面的な攻撃をかけてくる可能性は少ない可能性が大きい」とすれば間接侵略であろう。そして、突然に間接侵略が発生するとは考えられない。社会的、経済的不安が先行して間接侵略の本安が先行して間接侵略という事態になる。間接侵略に先行する事態は海上輸送路に対する攻撃であり、間接侵略に先立って海上輸送路に対する潜水艦、航空機による攻撃は極めてありうることである」と、陸上自衛隊同様、労働者・人民の蜂起・内乱・重大な騒じょうという間接侵略を重視し、これを支援するソヴェト・中華人民共和国の海上輸送路攻撃を積極的に排除する事に戦略上の重点をおいている。これを作戦機別に見ると、

- I 「港湾防備」 東京湾、大阪湾、舞鶴湾、津軽海峡、下関海峡、佐世保湾などの重要港湾を防備する。
- II 「船舶護衛」 外国から出入港する日本船舶（外航）、重要港湾間を往復する船舶（内航）を護衛する。現在、通常三護衛隊群を保有。有事には、内航護衛二群、外航護衛二群を編成してこれに当る。
- III 「哨戒」 日本周辺海域の哨戒を護衛艦、哨戒艇、対潜哨戒機で行う。

- IV 「通峡阻止」 宗谷、津軽、対馬の三海峡を有事に閉鎖し、敵艦艇、潜水艦などの通過を阻止する。
- V 「対潜掃討」 潜水艦掃討艦艇、航空機などで潜水艦を発見攻撃する。
- VI 「作戦輸送」 陸上自衛隊兵員を輸送する。
- VII 「機雷の除去、敷設」 海峡、港湾など機雷が敷設された場合の除去、敵艦艇、潜水艦攻撃を防ぐための機雷敷設。
- VIII 「要撃」 海上自衛隊艦艇で敵艦艇に攻撃する。
- IX 「防空協力」 航空自衛隊の防空作戦に協力する。
- X などである。

海上自衛隊も、以上述べたところから「間接侵略重視」の戦略構想であるが、次にみる様に、その戦力・装備の強化、向上から、三次防、四次防以降は、アメリカの第七艦隊の様な、核武装、原子力潜水艦を持つ、日本帝国主義の極東戦略における重要な海軍戦力となる芽をもっている。

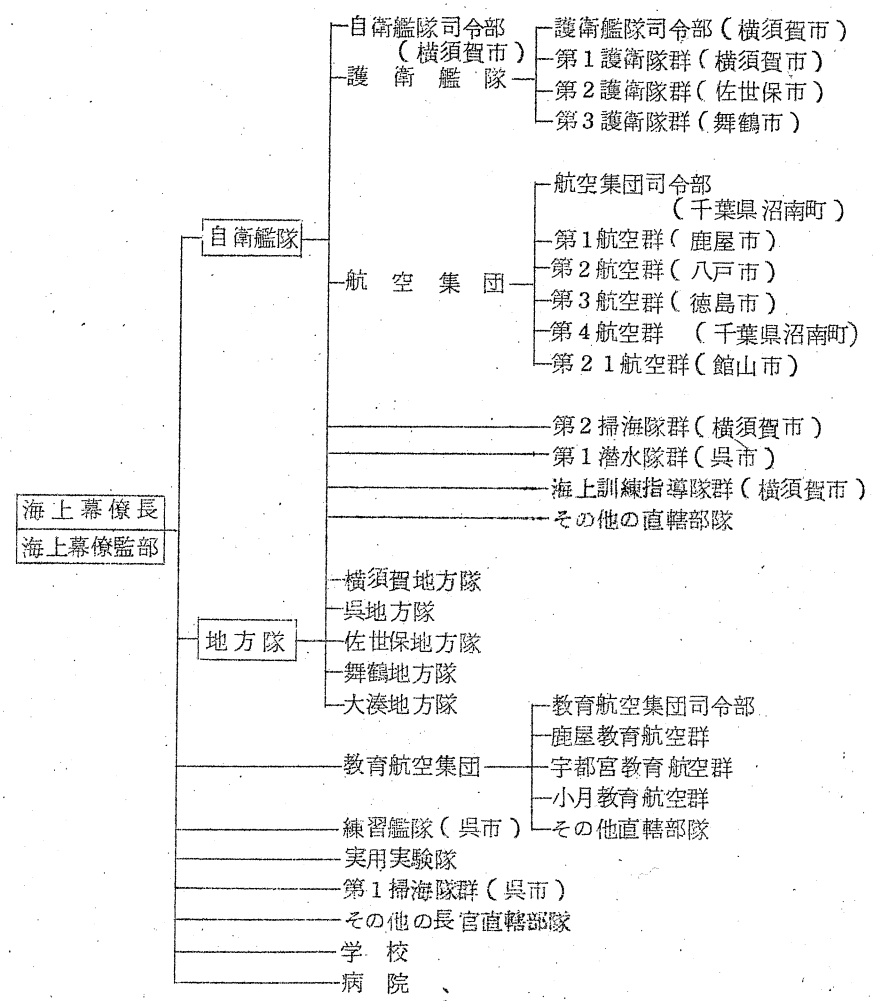
④ 海上自衛隊の戦力と編成

海上自衛隊の編成は「表5」にみるとおり作戦部隊としては、自衛隊と地方隊に分れている。自衛艦隊は、護衛艦隊、航空集団に分れ、艦艇、航空機で海上輸送路確保船舶護衛にあたらうというもので、海上自衛隊戦力の中心である。

自衛艦隊は、護衛艦による護衛隊群三、対潜機、対潜ヘリコプターを装備した五航空群、掃海隊群、潜水群によって編成されている。地方隊は周辺海域の警戒、護衛にあたるもので、横須賀、呉、佐世保、舞鶴、大湊の五ヶ所に配置され、自衛艦隊の「攻撃」の役割に

対し、「防御」の役割という位置にある。

(表5) 海上自衛隊の編成 (昭和42年6月末日現在)



海上自衛隊の定員は三万四千九百六十三人である。

海上自衛隊の戦力は、六七年一月で護衛艦三九隻、潜水艦七隻、掃海艇三五隻など艦船五二三隻、約一五万トン大型対潜機P2V六〇機、小型対潜機S2F五八機など航空機二三五機で構成されている。

護衛艦は対潜攻撃を主としたDDと船団護衛を主としたDEに分けられ、DDは対潜多用途、対空を主としたもののDDAと対潜中心のDDKに分けられているが、三次防では、対潜ヘリコプター装備のDDHが新たに編成される。

護衛艦は三九隻、六万五〇〇トンのうち、初の国産護衛艦「はるかぜ」(一七〇〇トン)を始め、現在、二三隻、三万八二六〇トンが国産艦である。一次防では対空誘導ミサイル「ターター」装備の「あまつかぜ」(三〇五〇トン)の建艦計画を決め六五年就役したが、二次防では対潜ロケット「ア

自衛艦隊の司令部は、横須賀にあり、艦隊は大湊、横須賀、舞鶴、佐世保の五管轄地区に分けて沿岸警備・機雷の掃海等に当たっている。

スロツク」、対潜無人ヘリコプター「ダツシュ」、索敵性能のよい低周波のパウソナ(SQI23)を装備することを決め、護衛艦「

やまぐも」型(二〇五〇トン)に「アスロツク」を、「たかつき」型(三〇五〇トン)には「アスロツク」と「ダツシュ」を装備した。三次防では二〇五〇トン級に「ダツシュ」を装備、四七〇〇トンの対潜有人ヘリコプター搭載の護衛艦二隻を建艦する計画である。潜水艦は七隻、七四三〇トンで訓練用であり戦力化していないので、水中航走性能の良いティアドロツプ型(涙滴型)の一八〇〇トン級潜水艦を三次防では五隻建造する計画である。

ト弾発射装置などがある。原子力潜水艦は、水中速力三〇ノット(通常型は一五ノット)、連続潜航時間は二〇月(通常型一時間)と、その性能はばつぐんであり、船団より速力が高いため、自由に接近して攻撃できる。ために、対潜作戦には広い警戒網と敏速な攻撃が必要で、それには水上艦艇の能力だけでは不可能で航空機、ヘリコプターによる対潜攻撃が必要となった。

航空機も対潜用が主力であり、大型のP2V7(航続距離七四〇〇Km)、小型のS2F1(同一四八〇Km)の他に対潜ヘリコプターであるHSS1、同2がある。三次防では、P2Vを改良し搭載機器、航続能力、速度などを向上して、対潜深知、攻撃装備を近代化したP2Jを二四機、対潜用大型飛行艇PX1S四機を配備する。更に、海峡、港湾防衛のためHSS2を増強、現在のHSS1一五、HSS2二三機、合計三八機を、HSS2六〇機とする予定である。

そこで、海上自衛隊では、米海軍のとつているヘリコプター搭載の対潜空母一隻を中心に七ノット八隻の駆逐艦で編成される潜水艦掃討部隊の構想を持つており、二次防、三次防では実現しなかったが、将来四次防、五次防段階で編成する可能性がある。他に敵潜水艦基地を攻撃する作戦構想があり、基地の出入口付近に對潜水艦攻撃用潜水艦を配備して、基地に出入する敵潜水艦を攻撃するものである。この作戦構想のもとに、三次防で対潜攻撃用短魚雷を装備した一八〇〇トン級攻撃型潜水艦五隻が配備されるのである。

対潜作戦重視の戦略をとる海上自衛隊は、原子力潜水艦に対抗する為の装備として、先述した対潜ロケット「アスロツク」、対潜無人ヘリコプター「ダツシュ」を護衛艦につけた。

現在、日米安保体制下で日米の地域分担は、南西航路はフィリピン、太平洋航路はグアム海域までが、海上自衛隊、それ以遠は、米海軍が担当することになっており、更に米軍は、日本海に基地を持つソビエト潜水艦隊が有事の際、太平洋に出撃するのを、海上自衛隊の宗谷、津軽、対馬海峡の通航阻止作戦で阻止することを期待している。

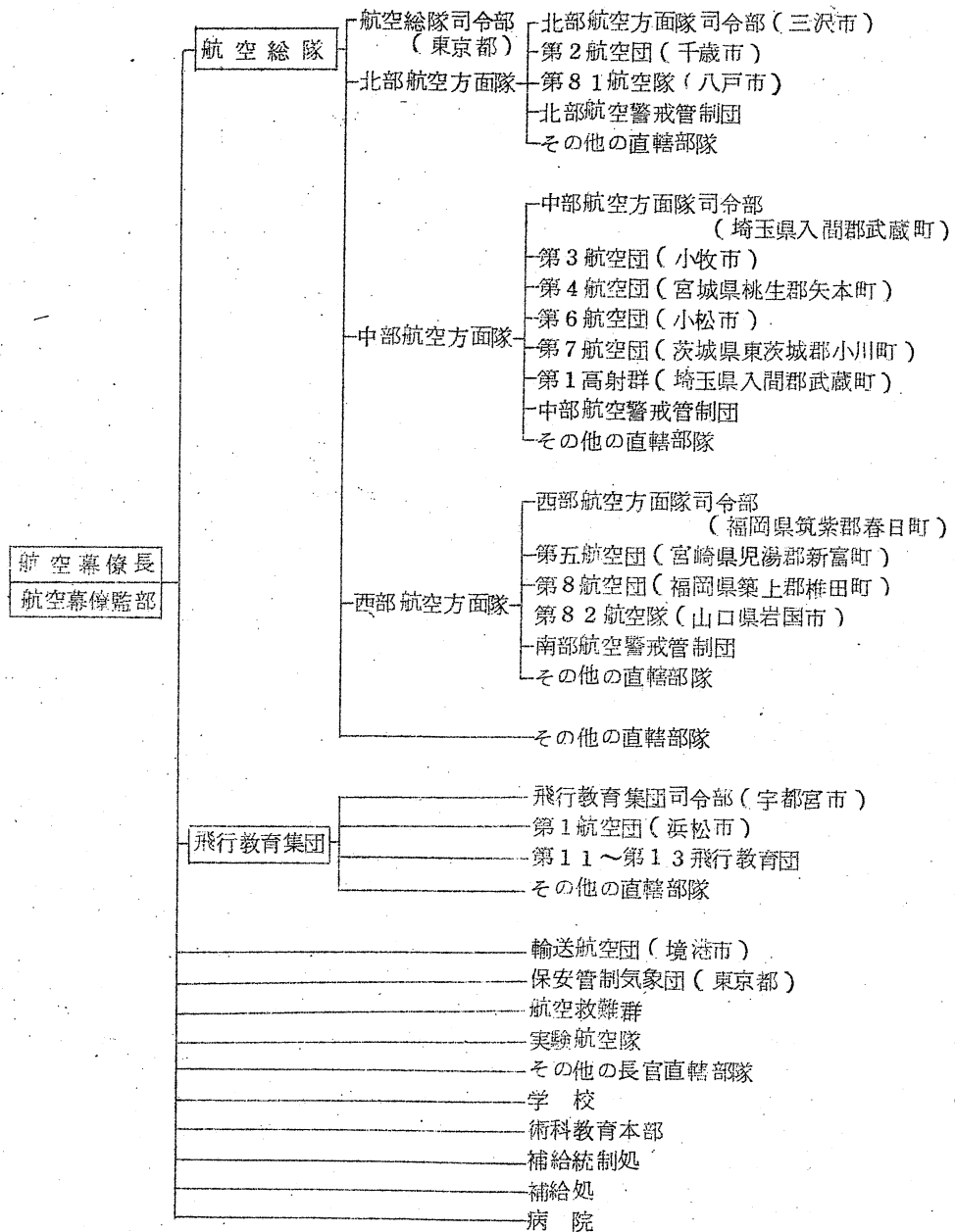
「アスロツク」はロケットの先端にホーミング魚雷を装備しているが、魚雷は空中をとんで目標付近でパラシュートで着水、魚雷が自動的に敵潜水艦を追跡するもので、射程約八キロ、速度マツハーである。「ダツシュ」は、ホーミング魚雷二本を装備、無線操縦で後甲板から目標付近まで飛行、魚雷を投下して、母艦に帰るもので、時速一五〇キロ、航続距離約九〇〇キロである。

海上自衛隊は二次防終了段階で、すでに米ソを除いてカナダ海軍をしのぐアジア第一の戦力を持つており、先にみた三次防での対潜能力の向上、作戦構想の積極化とならんで、「アスロツク」「ダツシュ」が核・非核両用兵器であることから、将来、四次防、

他の対潜兵器はソーナ・レーダー、爆雷投射器、ヘッジホッグ(前投兵器の一種で一時に二四弾を〇・二秒間隔で投射)、対潜ロケ

ツク」が核・非核両用兵器であることから、将来、四次防、

(表6) 航空自衛隊の編成 (昭和42年6月末日現在)



「(二五発の連射が〇・三七五秒というもの)、七〇ミリ空対空ロケット「マイティマウス」三八発で武装した最新鋭機である。

五次防段階で必然的に核武装へと進むなど、極東における米第七艦隊とならんで、日帝のアジア戦略体制の重要な柱として、強力な艦艇群を編成するものとなるであろう。

◎ 航空自衛隊の戦略構想

航空作戦の特徴は、①突発的で陸上、海上に比べて軍前に兆候がつかめず、リーダーの識別圏に敵機が入るまで、その意図がつかみにくいこと。②初期の作戦がその後重大な影響を及ぼすこと、例えば中東戦争の様初期に空軍力を、壊滅されると、敵に制空権を完全に奪われ体制を立て直す機会すら失なわれるおそれがあることである。③強力な攻撃力を持たない時は防空体制を完璧にすることができないこと、つまり、航空自衛隊の様に敵空軍基地をたたく強力な攻撃力がない場合、防衛一本では、攻撃方法は相手の自由であり、防空ができれば結局、重大な被害をこうむるおそれが強いことである。

そこで航空自衛隊の戦略構想は、①日米安保体制の下で、在日米軍と密接な協同防衛体制をとり、米軍の攻撃力に期待する。②有事に即応する態勢をつくる、の二点が重視され、基本としている。

このため航空自衛隊の航空総隊司令部は、東京・府中の米等五空軍司令部に同居しており、韓国、沖縄方面の航空情報を米軍から通知をうけ、第五空軍が指揮下においている韓国、鳥山の米等三空軍師団、沖縄・嘉手納の米三一三空軍師団と共に実質的に、日米韓三国協同の防空体制をしいている。

そして、有事に即応する態勢として、有人機と対空ミサイルの組合せによる防空作戦をとっている。これは有人機(自衛隊ではF104

J・F86D・F86F)は、迎撃の有効範囲が広く、集中機動ができるなどの長所があるが、地方では地上管制装置がないと目くら同様に動けないし、気象条件に影響されやすいという欠点がある。対空ミサイルは支援組織に対する依存度は小さいが、防空の有効範囲が限定されているという長所と欠点を持つている。

そこで、有人機と対空ミサイルの組合せで各々の欠点をおぎない高々度(一万五〇〇メートル以上)と低空侵入機は対空ミサイルで迎撃する態勢を、ミサイルの有効圏外で行動する敵機には有人機で迎え撃つ態勢をとっているのである。

① 航空自衛隊の戦力と編成

航空自衛隊の編成は(表6)のとおりで、航空総隊、飛行教育集団、輸送航空団などに分けられ、航空総隊が作戦部隊で東京・府中の航空総隊司令部の統括のもとに「北部」(宮城、山形以北を担当)、「中部」(関東、関西)、「西部」(中国、四国、九州)の三方面隊に編成され、司令部をそれぞれ、三沢(青森県)、入間(埼玉県)、春日(福岡県)においている。

陸上自衛隊の師団に相当する航空団が八つあり、方面隊は航空団一以上、航空警戒管制団一などで編成されている。

自衛官は三万九千五百三人(定員)である。

作戦部隊の主力は、全天候戦闘機のF104J七飛行隊(一七五機)米軍供与のF86D四飛行隊(九七機)の計十一飛行隊、昼間戦闘機のF86F飛行隊(三一〇機)で合計五八二機である。

F104Jは速力マッハ二(時速二二〇〇キロ)、赤外線ホーミングの空対空ミサイル「サイドワインダー」を二と四発、「バルカン砲

他にはF86

Fを偵察用に改造したRF86F一飛行隊(一八機)、輸送機C46(約四〇機)とYS11による二輪送飛行隊練習機F104D J(約二〇機)、T-33(二一〇機)、ヘリコプター(約四〇機)などがあり、それに、一飛行点検隊がある。

C46は主力輸送機として陸上自衛隊の空挺演習、物質輸送にあたっている。

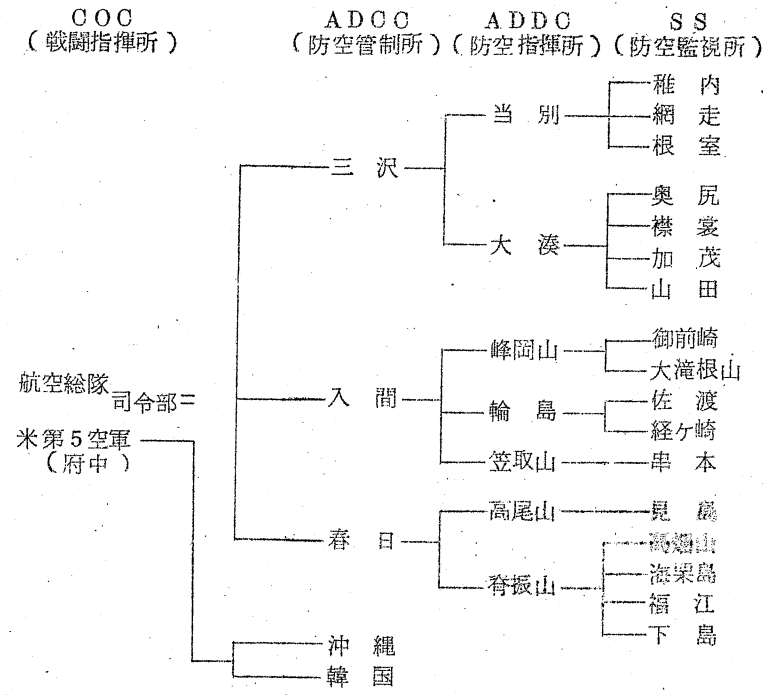
対空ミサイ

ル部隊としては「ナイキ・アジャックス」二個大隊（七二基）があり、一個大隊は東京周辺に第一高射群として配置され、他の一個大隊は北九州地区に第二高射群として配置されている。

「アジャックス」はマツハニ・五、最大高度一万八〇〇〇メートル、射程四六キロである。

日本のレーダー網は全国一四〇方所にあり現在（六〇年六月から）、全レーダースイドが米軍から航空自衛隊に移管されている。

(表7) 防空レーダー網組織



つけ、また早期警戒機を開発して、レーダーの死角をなくす計画をすゝめている。

それにF86Dはすでに老朽化しているので今年中に全廃、又、F86Fも三次防中で維持不可能となるのでFX（次期戦闘機）の選定をいそいでいる。しかし、現在の最新鋭戦闘機は爆撃機としてもつかえる両用のものが主力となっており（ベトナム戦で米軍使用中のF4E「ファントム」はこれに当る）、戦闘機、爆撃機という区別はなくなりつつある。そこで、爆撃機を保有しないと云われてきた航空自衛隊も、その兵器体系からいっても必然的に地上攻撃の爆撃機としての機能を備えた有力な最新鋭機を三次防末期には持つことになろう。

更に「ナイキ・アジャックス」は旧型なので三次防中に核・非核両用の「ナイキ・ハーキユリス」（マツハニ、射程一四〇キロ、最大高度三万メートル）に変更し、更に別に二個大隊を新設することになっている。「ハーキユリス」は核・非核両用といつても、核弾頭を装置することを前提として作られており、命中精度や性能・効率からいっても核装備と非核装備とは全く差があるといつてよい。故に現代の兵器体系からいつても、自衛隊の核武装は時間の問題といつて良く、第三次防は、陸・海・空をとわず核武装をめざしての第一段階とみてよい。

四 結 論

以上、三軍自衛隊の「戦略構想」と「戦力・編成」をみてきたわけであるが、二次防完了段階（三次防は六七年から）で、自衛隊は

レーダー設置場所は「表7」のとおりで、SS（防空監視所）、ADCC（防空指揮所）に搜索用レーダー、測高レーダーをおき、目標の三次元位置（高度、距離、方向）を測定する。ADDCは飛行計画と照合して、のつていないものはIFF（敵味方識別装置）で敵味方を判断、領空侵犯のおそれのある時、迎撃機にスクランブル（緊急発進）を指令する。迎撃機には、ADDCとSSの迎撃管制官が目標機に誘導する。

しかし、このシステムでは、目標発見、識別から緊急発進、迎撃まで一〇〜二〇分かかる。これでは、マツハニの超音速機が、東京―大阪間十数分しかかからないのでまにあわないことになる。このため二次防で「バツジ・システム」（半自動防空警戒管制組織）が導入されることになった。これは、①電子計算機による各種データの高速自動処理 ②データリンク（符号伝送装置）による高速度データ伝送 ③プログラミング技術などを中心に目標処理を自動化したものである。

バツジシステムでは、レーダーが目標を発見すると電子計算機が一瞬のうちに敵味方を判断、高度、速度、方向を算出して、防空戦闘機、対空ミサイルなどの迎撃兵器を割当て、迎撃管制（誘導）会敵（撃破・帰還）を自動的に行う。迎撃戦闘機のレーダーにも、データリンクが組込まれていて、迎撃目標へと誘導されるものである。しかし、現在のレーダーでは音速の一〇〜二〇倍のIRBM、ICBMを捕捉することは不可能である。

それに、航空自衛隊では、対電子戦（ECM）相手側がレーダー通信機などに電波による目つぶしをかけ、有効性を減少させること（対電子対策戦（ECM）ECM）に対抗する対策をこころじていることが不足しているので、三次防ではナイキ部隊にECM装置を

日本国内のブルジョア支配を保障し労働者・人民を「抑圧」する反革命暴力装置としては、すでに十分過ぎるほどに強力である。次回にみる様に、兵・将校（特に戦後派の防大出）は質において優秀であり、その戦闘力・機動力・装備においても精強な軍隊となつていく。

しかし、彼らが日本帝国主義の「侵略と抑圧」の道具であり、日本の労働者・人民に敵対するものである以上、われわれは戦略において、すこしも自衛隊を恐れる必要はない。いかなる精強な莫大な戦力を保持する帝国主義軍隊といえども、人民の側に立つ、人民による革命的労働者・人民の武装集団・その革命的戦闘力の前には無力であることは、現在の世界最強の米帝国主義軍隊と英雄的に戦つて、不敗の地位を築いているベトナム労働者・人民の武装闘争が、また証明していることである。だが、同時に、われわれは戦術において敵を重視することを忘れてはならない。精強な強力な戦力と精強さをもつていたつた帝国主義軍隊たる自衛隊の実力を、われわれは同時に正當に評価せねばならない。

兎角、現在、「三次防」段階に突入した自衛隊は、沖縄の核付き返還を、七二、三年頃に現実のものとして、「第四次防」以降において、イギリス帝国主義のアジア戦略からの後退、アメリカ帝国主義の「ベトナム」手づまりの問げきをぬつて、従来の経済・政治外交の実績のもとに、新たに、独自の極東戦略、独自の勢力圏の確立をめざす日本帝国主義の「経済・政治・軍事外交」の重要な担い手として、質・量共に一層充実され増強された帝国主義軍隊へと一路その速度を速めてべく進んでいるといふことができる。

次回は、「I、自衛隊の現況」(2)として、自衛隊の統幕幹部が、極東・アジアにおける革命情勢の進展のなかで、日本内部に労働者

人民の革命的武装蜂起の危機がせまり、中華人民共和国、ソビエト連邦が、これを支援して軍事的展開をしたと想定して、これに対処する具体策、問題点を研究した「三失研究」を、彼らが、あの六三年段階で、国内・国際情勢をどの様にとらえ、日本における革命をどの様に位置づけ、これにどの様に対処しようとしたか、を述べ、あわせて、自衛隊の日常生活などをおして、兵員訓練、教育が、どの様におこなわれているか、兵員・幹部の質や、意識状況などについて不十分とは思うが私の判断のおよぶかぎりで分析してみたいと考えている。

この二つの頃は、今回にまとめて掲載しなかったが、わりあてられた枚数も時間も予定よりはるかにオーバーしているので、二回に分けることにしたものである。

尚、自衛隊の戦力や編成については主に、朝日新聞社編『日本の安全保障』によった。

編集後記

* 六八年の初頭をかざる『エンタープライズ阻止佐世保闘争』は一〇/八・十一/十二闘争の実績のうえにたって、新たな教訓と新しい展望を我々に与えた。

この闘争は「実力闘争」を基調とするわれわれの主張の正しさを改めて証明したばかりでなく、一〇/八・十一/十二闘争にはみられなかった大衆的盛り上がり、大衆の闘争への参加という新局面を生みだした。

「佐世保闘争」の総括は、次号№8に発表する。

* 「現代世界革命序論」と「革命党建設の諸任務」は、一向・佐伯両同志の個人論文として掲載した。同志諸君を始めとする多数の諸君の建設的討論が活発におこなわれることを期待する。

* 「権力分析」では、今回、議会、の項は時間と、スペースの關係上掲載できなかった。次号№8にまわすことにした。

* 『「烽火」定期購読申し込み用紙』ができたので、固定購読制に協力して下さいようお願いします。

(一)号分二百円、年間(十二号分)二千四百円。尚、何号分申し込まれても結構である。

尚、固定購読制の採用とともに、「烽火」代金は、即金制としたので、代金未納の方は、№7は配布しない。

この原則は以後も厳しく守るつもりであるから、代金未納の方は早急に支払いを済ませられるよう、お願いします。

* 発行が予定日より大変遅れたことを、おわびする。

一九六八年一月三十一日

共産主義者同盟・関西地方委員会
「烽火」編集部

烽火 = No. 7 (Vol. 3. No. 1)

定価 = 200円

発行 = 1968年1月31日

編集者 = 共産主義者同盟関西地方委員会

発行者 = 関西戦旗社 / 大阪市福島区鷺洲上3の3 / 土寅ビル内

電話 = 大阪 (06) 458-0235

振替 = 大阪 24995 / 関西戦旗社 (西山久)

